

2 各 論

(1) 青森県の野生生物の概要

本州の北端に位置する青森県は津軽海峡をはさんで北海道と対峙する。この海峡は狭いところでは20kmほどの距離しかないが、新生代第四紀の初期に陥没によって形成されたといわれており、生物の移動拡散には大きな障壁になってきたと考えられる。

平野部の地形は傾斜0～3度の平坦地が県土面積の17.3%をしめており、わが国の平均14.0%を上回る。山地部は、中央に八甲田山地・十和田山地など、奥羽山脈につらなる山地群があって県を東西に二分している。また東側には下北山地・田子山地などが、西側には出羽山地からの延長にあたる白神山や岩木山、津軽半島山地などがあって地形を複雑なものにしている。これらの山地は、岩木山の標高1,625mを最高に1,000m前後のものが多いが、緯度が高いので高山性の生物が頻繁に現われる。

生物の生活に大きく影響する気候は、大別するとオホーツク気団による太平洋側気候区とシベリア気団による日本海側気候区の二つの気候型が複合している特徴がある。具体的には、太平洋側は春季から夏季に低温多湿な偏東風（俗称やませ）の影響をうけて比較的冷涼、冬季は小雪、晴天が多いのに対し、日本海側は比較的温暖、冬季は季節風が強く、多雪で曇天が多い。

本県の陸水環境は多様である。まず湖沼では、本県は十三湖と小川原湖という大きな汽水湖を抱えており、さらに、小川原湖に近接した鷹架沼や尾駈沼などの汽水性の湖沼群もある。その一方、淡水湖の十和田湖もあるし、宇曾利湖は酸性湖沼で独自性が高い。また、津軽半島や下北半島には、成因的に珍しい砂丘湖が数多く分布する。これらに加えて県内には大小の溜池も多数あるが、その多くは津軽平野に集中している。中でも廻堰大溜池や狄ヶ館溜池は大きな池だが、いずれも17世紀に築堤され、300年以上の歴史を持っている。河川では、一級水系は岩木川水系、馬淵川水系、高瀬川水系の3つだけだが、むしろ多数の二級水系を擁することが特徴である。これは、面する海域が太平洋、日本海、陸奥湾、津軽海峡と4つにわたる本県の地理・地形的に複雑な状況を反映している。このように多様な湖沼・河川は本県の陸水生物に豊かな生息環境を提供している。

植物分布上、青森県はブナやミズナラを主体とする落葉広葉樹林帯（ブナ帯ともいう）に位置している。本県のブナは今では山地帯に限ってみられるが、かつては海岸地域にも生育していた。例をあげると、太平洋側東通村海岸に広がる猿ヶ森周辺のクロマツ林は往時ブナ林であったとされているし、日本海側つがる市のベンセ海岸には約1,400年前のブナ生育を証明する花粉分析の結果が報告されている。これら平地のブナ林は人間生活の営みと共に次第に伐採が進み、その結果、現在残っているブナ林は多くが奥山の山地帯に限られ、大部分が国有林として管理されている。青森県の森林面積は約64万haであるが、そのうちブナ林は10万ha余におよび、世界自然遺産に指定された白神山の一部も含まれる。ブナ林の中に生育している木本・草本類は、太平洋側と日本海側では主としてその気候環境の違いから大きく異なっている。とりわけ林床に生えるササの種類に違いがみられ、太平洋側ではスズタケやチマキザサがまばらに見られるだけなのに、日本海側ではチシマザサが圧倒的に多い。しかも、チシマザサと同じように多雪環境に適応したほふく型の常緑の低木であるハイヌガヤやヒメアオキ・エゾユズリハなどが多く、混交している針葉樹もヒバ（ヒノキアスナロ）などで、太平洋側にみられるマツ科木本より弾力性があり、雪に対する適応性がみられる。

消雪直後から若葉が芽吹くころのブナ・ミズナラ林の林床は非常に明るい。このわずかの期間に地上に届く光を最大限に活用して生きているのがカタクリやキクザキイチリンソウなど、北国の早春を象徴する植物群である。

ブナ林と並んで8万9千haの生育面積をもつヒバ林も青森を代表する樹木で、県の木に指定されている。全国の80%が本県に生育しており、下北・津軽両半島にその90%が分布している。陰湿な林床はヒメホテイランなどの希少種を育む環境となっている。なんとといっても多いのは20万haにおよぶスギ林で、そのほとん

どは人工林である。生育状況によってことなるが、混交または下生する植生は比較的単純である。

変化に富んだ植生を背景に、動物相も多様である。北海道とつながっていた寒い時代に南下した動物の一部は、本州北端の高標高地などにとどまって生息しているし、津軽海峡の成立にはばまれて本県を北限の生息地として落ちついた種類も多い。津軽海峡は英人ブレイキストンによって提唱された動物地理学上の一つの境界線として知られ、ブレイキストン線（ブラキストン線）とよばれる。主として哺乳類と鳥類の分布から唱えられたといわれるが、ほかの動物群についても適用されるケースが多く、本県の動物分布を論じる時には無視できない学説となっている。ヒト以外の霊長類の世界の北限になっているニホンザルなどは、その最たるものであろう。

哺乳類と同様に、昆虫類をはじめとして陸域で生活する無脊椎動物にとっても、津軽海峡は北方へ分布を拡大する際の大きな障壁になっている。青森県が日本での本来の分布北限になっている無脊椎動物はたいへん多く、昆虫類のゲンジボタルやカブトムシ、甲殻類のサワガニやヌカエビなど、よく知られた種類を多数含んでいる。これらの中には、人為的な移入によって、現在は北海道でも見られるようになっている種類も多い。一方で、青森県の冷涼な気候は八甲田山のような山地だけでなく津軽半島や下北半島では平地でも寒冷地に特有なミズゴケ湿原を作り、北方系の生物の生息を支えている。キタシロカズメウズムシやニホンザリガニのような、青森県が分布南限かそれに近い分布をしている生物には北海道との共通種が多く、分布を決める要因には気候の影響が大きいと考えられている。

本県周辺の海は、本来北の海で、特に冬季に温度が下がる潮間帯は寒海性の生物の住み場になっている。しかし、日本海側や下北半島の西海岸、陸奥湾の一部では、対馬暖流の影響を受けるため、暖海性の生き物と寒海性の生きものが混じり合った複雑な生物相が見られる。潮汐の小さな日本海側には干潟が発達しないが、陸奥湾の小湊浅所とむつ市芦崎、それに太平洋側の高瀬川河口部には干潟があり、青森県が分布北限のアカテガニやアリアケモドキ、魚類ではヒモハゼなど、多くの特徴的な海浜生物が生息している。

本県における近代的な野生生物研究の流れをみると、1934年和田干蔵が初代会長となって青森県博物研究会（事務局は青森県師範学校博物学教室）が設立され、「青森博物研究会会報」、「青森博物研究会時報」を発行して1940年ころまで本県の生物調査に重要な役割を果たした。戦後、1956年郡場寛を初代会長に青森県生物学会が設立された。この会は事務局を弘前大学文理学部生物学教室に置き、「青森県生物学会誌」を28巻まで発行したが、その後自然閉会した。青森県立郷土館は1973年に創立され、自然・民族・考古・歴史の各部門において幅広い調査・研究活動を展開して「青森県立郷土館調査研究年報」（2009年の33号から「青森県立郷土館研究紀要」）を毎年刊行し、自然部門関係では県内の動植物相・分布にかかわる数多くの報告がある。1995年福田進を初代会長に青森自然誌研究会が設立され、事務局は青森県立郷土館学芸課に置かれている。会誌「青森自然誌研究」は2019年には第24号に達している。2004年、牧田肇を初代会長に白神研究会（事務局は弘前大学農学生命科学部内）が結成され、会誌「白神研究」は2018年には第13号を迎えた。これらの組織だった活動母体のほかに、地域ごとあるいは専門分野ごとに研究会・同好会などがあって会報発行や情報交換を行っている。

現代は地球史上、6番目の生物大量絶滅期と言われている。過去5度あった大絶滅期とは異なり、現在進行中の大絶滅の主要因には、生息地破壊や乱獲、温暖化、外来種問題など様々あげられているが、いずれも人間自身が引き起こしたものである。野生生物の生息状況が急速に変化しつつある現状を鑑み、今回、2020年版の青森県レッドデータブックを作成した。レッドリストに掲載されていることが、ただちに保護されていることを意味するのではない。希少生物保護のためには行政の取組が不可欠であるとともに、希少種も含めて野生生物たちの生活と現状への県民の理解が欠かせない。自然教育・環境教育の大切さはいくら強調しても十分すぎることはない。青森県は、様々な野生生物たちとの共存をどう作り上げていくかという大きな課題を背負っているとさえいえる。本書が課題解決のために役立つことを願ってやまない。（佐原雄二・原田幸雄・大高明史）

(2) 植物

1) 維管束植物

①概説

生物の分布は環境に規制されている。特に植物の場合は根を下ろすやいなや、その場所以外へ移動できる確率は低下し、多くの場合、その場で一生を終えるのが常である。環境という規制は、降水量、気温、受光量、土壌の理化学的性質、他の個体との関係、人間によるインパクトなど様々である。それらの諸々の規制要因に縛られながら生育し続けることから、種としての分布はたえず変化する。

分布には水平分布と垂直分布がある。水平分布は緯度の側面から、垂直分布は高度の側面から分布を捉えた見方である。いずれも、気温や降水量の差が表れている。結果として、生育環境幅の広い種は広域に分布し、狭い種は局部的に分布することになる。レッドデータブックに扱われる種の多くは、元来、後者のグループに入り込む種が多いのだろうが、ただ、最近では自然環境に対する人間による攪乱の度合いや規模の増大により、本来は広域に分布していたはずの種がレッドデータブックに取り上げられるようになったケースも多々ある。

ところで、維管束植物とは体内に水分や養分を運ぶ組織を持っている植物の仲間、種子植物とシダ植物が相当する。今回のレッドデータブックに取り上げられた維管束植物は総計318種である。内訳はシダ植物15種、種子植物303種となる。この種数は2010年度版と比べると種子植物で8種の増加である。レベルの変更や新加入種をカテゴリーのEX、A～D、LPなどの6つのランクから捉えると、ヒメヒゴタイはAからEXに、ヒシモドキやフサタヌキモはEXからAに、さらに、アイナエ、キクモはBからAに、ザラツキヒナガリヤスやイトナルコスゲはDからAにそれぞれ移行した。また、カノコソウはCからBへ、アリアケスミレとエビネはBからCへ移行した。新たな種としてはアオバズゲ、ハゴロモニワトコ、ガシャモクがAに、ムツウヒレン、ハチノヘトウヒレンはBに、ハマウツボはCに、そして、ザリコミ、シテンクモキリはDにそれぞれ加わった。レベルは情報量の多少により大きく変動する。すなわち、観察者の増加や情報収集範囲の拡大がレベルの変更をもたらすことになる。今回のレベル変更はその例と言える。

2010年度版のレッドデータブック発行後、維管束植物の分類の観点は大きく変化してきている。それは、DNAの塩基解析の成果を盛り込んだAPG (Angiosperm Phylogeny Group) 分類体系が採用されるようになってきているからだ。これは時代の流れともいえよう。そのため、これまで多く使用されてきたエングラヤクロンキストなどの旧分類体系に慣れ親しんできていた者には、分類基準の一部に不慣れさが生じている。たとえば、旧分類体系でユキノシタ科に含まれていたウメバチソウはAPG分類体系ではニシキギ科、同様にカエデ科に含まれていたカエデの仲間やトチノキ科の代表樹種であるトチノキはムクロジ科などと、驚愕の部分もある。APG分類体系は今後さらに確立されていくと思われることから、2020年度版のレッドデータブックの学名はAPG分類体系に合わせることにした。

青森県内の植物フロラ研究は、細井幸兵衛氏の前稿をもとに取りまとめられた「新青森県植物目録」(弘前大学白神自然研究所, 2018) で新たな基準ができた。この目録は被子植物についてはAPG分類体系に従っており、自生種2,304種、帰化・逸出・栽培種673種が取り上げられている。今後の本県の植物フロラ研究はその目録をもとに進むことは間違いのないであろう。

このレッドデータブックに取り上げられた種を含み、これからも県内外の多くの専門家・研究者・同好会会員などが、青森県の植物フロラの解明調査を継続していくであろう。その際、レッドデータブックに記載された種の分布域の拡大・縮小、あるいは量的な増加・減少、消滅などの情報が、より広く、より多くの人々の手元に届くような組織づくり、連絡網づくりが大切である。それは、本書に掲載された種の実態把握と種の保存・保全、及び絶滅回避に大きく貢献すると信じるからである。 (齋藤信夫)

②本文

被子植物オモダカ目 オモダカ科

EX

和名 トウゴクヘラオモダカ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Alisma rariflorum* Sam.

[形態的特徴] 細井(2010)は薄葉(1986)による本種の形態的特徴を次のように紹介している。すなわち、花期は7～9月で1日の開花数は1株当たり通常2～5個で多くとも10個以内(ヘラオモダカは10～30個)、開花時間は14～19時で午前中には咲かない(ヘラオモダカ11～16時)、花卉は大きく6～7mm、弁の辺縁に粗大鋸歯がある(ヘラオモダカは半分位で鋸歯は目立たない)、花序の第一節目の枝数は通常2本(ヘラオモダカ3本)と差がある。

[選定理由] フォーリーが1898年に八戸で採った標本以外の記録はなく、絶滅したと考える(細井, 2010)。

[分布と生態の概要] 日本の水生植物(waterplants.web.fc2.com/menu_about.html)では本種は谷津田の奥などの水源地の近くにも生育できるが、普通種のヘラオモダカはそのような場所にはみられないとされる。分布は本州・九州。

[特記事項] 日本固有で関東に分布の中心があり、本県が北限であるが、フォーリー以外いまだに採集記録がない。

日本の水生植物(waterplants.web.fc2.com/menu_about.html)にはトウゴクヘラオモダカの特徴として「葯の色は褐色、花卉を欠如、株あたりの花の数が少ない、草体が小さい、花茎第一分岐が2または3だが、5つの型があり、同一株でも様々である」と記されている。(齋藤信夫)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

EX

和名 タチガヤツリ

環境省：絶滅

学名 *Cyperus diaphanus* Schrad. ex Roem. et Schult.

[形態的特徴] 茎の高さは10～40cmの一年草。似たような立地に生えるカワラスガナによく似ていて外形だけでは区別しにくい。同定には果実の表面の細胞配列を確認することが必要である。すなわち、カワラスガナではやや円い六角形だが、タチガヤツリは縦長に短冊状である。花期は8～9月。

[選定理由] フォーリーが青森で採った古い標本以外の記録はない。

[分布と生態の概要] 本州・小笠原、朝鮮・中国(東北)・アムールに分布する。池沼の畔や湿地に生育する。

[特記事項] 細井(2010)は「大井(1943)は京都大学のフォーリー採集標本中に青森産のものを見出し発表した。それにはAomori(Faurie sin.num.)とあり、標本番号と採集年月日不明である。大井は青森と小笠原にまれに生えるとしたが、後に栃木県で見つかっている。」と記している。(齋藤信夫)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

EX

和名 カンエンガヤツリ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cyperus exaltatus* Retz. var. *iwasakii* (Makino) T.Koyama

[形態的特徴] 湖沼の畔や川岸の湿地に生える一年草。大きな群落を作り、草丈が1mにも達し、叢生する。葉の幅は8～15mm。花序は大型で長さ幅ともに10～30cm。種子は9～10月に熟す。

[選定理由] 井上(1971)が記録して以降、確認できていない。

[分布と生態の概要] 細井(2010)は「基本種はインドからインドネシア、オーストラリアに分布域を持ち、国内のカンエンガヤツリはその変種と考えられ、元は朝鮮から持ち込まれたものらしい。本州の北中部に分布し、関東に産地が多い」と記している。攪乱された場所に突然大きな群落を形成したり、突然見られなくなったりする。

[特記事項] 細井(2010)は「古瀬(栃木市)は上野の国立科学博物館主催の第20回腊葉公開陳列会(1954)につがる市(旧木造町)館岡で採集した標本を出品し、東京・埼玉・茨城に次いで青森県が第4の分布地として知られるようになった。古瀬は、つがる市(旧車力村)の田光沼の岸に生えていて、古老の話によればこれで筵をあんだとしてある(私信)。井上(1971)も「……昔はどんどんこの植物をふやし、この茎でゴザを編んだものだ……」と述べている。つがる市館岡の田圃のあぜ道には1980年頃までであったようである。」と記している。和名は江戸時代末期の本草学者、岩崎灌園にちなむという。(齋藤信夫)

被子植物キク目 キク科

EX

和名 ヤナギタウコギ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Bidens cernua* L.

【形態的特徴】 北地の湿地に生える1年草。葉は披針形で対生し、長さは8～17cm。葉の先端は鋭尖頭、基部は次第に狭くなる。葉縁にはまばらに微凸鋸歯がある。茎の高さは25～90cm。花は8～9月頃に咲く。頭花には不稔性の舌状花と稔性の筒状花があり、舌状花の花冠は黄色で長さは12mm、筒状花は長さ3mm。

【選定理由】 細井（2010）は「佐藤耕次郎（1943）の大正年代の採集記録以降には不明となり、多産地であった尾上町（現平川市）の猿賀池は改変されて絶滅したと見られる」と述べている。

【分布と生態の概要】 本州（青森）・北海道・北半球北部に分布する。北海道でも胆振・石狩・釧路・根室などと分布域は限られている。

【特記事項】 細井（2010）は「岩川友太郎が平川市（旧尾上町）猿賀神社の池でとった標本（Aug.22.1880）が東京大学に残されている。これを松村（1886）が取り上げ、中井（1939）も引用した。佐藤耕次郎は着色写生図を残し、これは県立郷土館に入っている」と記載している。タウコギに似るが、葉がシダレヤナギの葉のようだというので命名されたという。

(齋藤信夫)

被子植物キク目 キク科

EX

和名 ヒメヒゴタイ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Saussurea pulchella* (Fisch. ex Hornem.) Fisch.

【形態的特徴】 草丈1mほどの多年草で、一見アザミを思わせる。茎は直立し、上部で幾つにも分枝して多数の頭花をつける。頭花は紅紫色でよく目立ち、総苞片の先端には円形で膜質の付属物がある。この付属物は類似種には見られない形状なので、種類の特定が容易である。

【選定理由】 10年間に渡って県内全域に足を運び、実地調査と情報収集を行ったが、全く確認出来ず、分布情報も全く無い。また、本年の夏～秋には、以前に自生を確認している3地点へ赴き、丹念に調べたが確認することが出来なかった。そのため、県内では絶滅したと判断した。

【分布と生態の概要】 50年前には、津軽西海岸の黒崎草原や岩木山麓の長平高原、大鱈スキー場高原などで確認している。

【生存に対する脅威と保存対策】 本種の生育環境となる向陽山地草原が殆ど無くなっている。このような生育環境を意識して残存させることが望まれる。

【特記事項】 津軽植物の会では「絶滅種探索チーム」を組織して継続調査をしている。(木村啓)

被子植物マツムシソウ目 スイカズラ科

EX

和名 ハナヒョウタンボク

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lonicera maackii* (Rupr.) Maxim.

【形態的特徴】 山地に生える落葉小高木。他のヒョウタンボク類は低木であるので見分けられる。樹皮は縦裂してはがれる。葉は長さ5～8cm、卵状長楕円形で、先は鋭くとがる。花はスイカズラに似ており、白色から橙黄色に変わる。花期6月上旬。果実は球形、2個合着せず、赤熟する。

【選定理由】 県内唯一の産地階上町に隣接する岩手県洋野町・軽米町に小群が残っており、その生育環境を参考に調査を行ってきたが、開田やスギ植林地化などで生育適地はほとんど残っていない。発見から100年以上報告がないことから絶滅したものと考える。

【分布と生態の概要】 本州（青森・岩手・群馬・長野）、朝鮮・中国（北部）・アムール・ウスリーに分布する。県内では階上町階上岳に産することが知られていた。牧野富太郎が山崎良甫の採集した標本に基づいて、1903年（明治36年）日本に産することを初めて発表したものである。生育地は明るい谷川のほとりから谷頭の落葉広葉樹林である（青森県, 2007）。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

(須藤智道)

ヒカゲノカズラ類ヒカゲノカズラ目 ヒカゲノカズラ科

A

和名 スギラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Huperzia cryptomerina* (Maxim.) Dixit

【形態的特徴】 主に樹上に着生する常緑性シダ。生育地では落葉広葉樹上にスギの小枝が突き刺さっているように見える。茎は叉状に分岐し、県内のものは全長10～20cmくらいの個体が多い。葉は密生し、線状披針形、長さ1～2cm。胞子のうは枝端近くにつき、胞子葉は栄養葉よりも少し小さい。

【選定理由】 本種は全国的にも珍しい種であること、また、着生に適する落葉広葉樹の伐採が深山にまで及び、急激に減少していることから、生育地の確認や保護策に緊急を要する種である。

【分布と生態の概要】 北海道（東部）から屋久島、朝鮮（済州島）・台湾・インドに分布する。県内では津軽半島・白神山地他のブナ帯のトチノキ・サワグルミ・ブナなどの落葉広葉樹の大木に着生していることが多い。空中湿度、着生木の樹皮の状態他の微妙な生態的条件が分布を左右しているようで、県内での報告例はきわめて少ない。近年の山岳域の大規模な伐採が本種の分布に大きなダメージを与えている。

【生存に対する脅威と保存対策】 森林の伐採がそのまま生存地の消滅に直結する。伐採前の生育確認と保全策の検討が必要。（齋藤信夫）

ヒカゲノカズラ類ヒカゲノカズラ目 ヒカゲノカズラ科

A

和名 チシマヒカゲノカズラ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Lycopodium alpinum* L.

【形態的特徴】 高山帯のコケが生えている陽光地の斜面に生える小型の常緑性シダ植物。茎は地上や落葉の下を這う匍匐茎と地上から立ち上がる直立茎に区別できる。直立茎は高さ3～15cmほどになり、3～4回叉状に分岐し、葉は4列に並び2形で、腹面の葉は背面の葉より短い（類似種タカネヒカゲノカズラは同形の葉が5列に並ぶ）。胞子のう穂は頂生する。

【選定理由】 希産で個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（福井県以東）、ロシア（極東）、中央アジア、朝鮮、中国、モンゴル、ヨーロッパ、北米（北部）などの北半球の温帯に広く分布する。県内では八甲田山と岩木山に産する。

【特記事項】 岩槻（1992）は側葉が小枝と基部で合着して上半部が内曲し、小枝の裏側へかけて横に巻く程度の低いものをミヤマヒカゲノカズラとして区別すれば、日本のものはほとんどこの型になるが、明確に区別できるものではないと記している。（齋藤信夫）

大葉シダ植物ハナヤスリ目 ハナヤスリ科

A

和名 イブリハナワラビ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Botrychium microphyllum* (Sahashi) M.Kato

【形態的特徴】 アカハナワラビによく似た小型の冬緑性シダ植物。アカハナワラビのように冬季に葉が著しく紅変することはない。葉身の先端が細く伸び鋭頭となる。裂片の縁に微鋸歯がある。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森）に分布する。県内では六ヶ所村・三沢市に生育する。

【生存に対する脅威と保存対策】 開発・採取等の危険性がある。

【特記事項】 北海道南部の胆振地方で発見され、その名がある。日本固有種である。従来は青森県が分布南限種であったが、近年、宮城県で生息が確認された（岡, 2019）。（須藤智道）

大葉シダ植物ハナヤスリ目 ハナヤスリ科

A

和名 アカハナワラビ

環境省：該当なし

学名 *Botrychium nipponicum* Makino var. *nipponicum*

[形態的特徴] 陽当たりの良い林下に生育する小型の冬緑性シダ植物。栄養葉は長い柄を持ち、葉は3回羽状に分岐し、裂片の縁には鋭鋸歯（フユノハナワラビは鈍鋸歯）がある。冬季に葉が著しく紅変するので、アカハナワラビと名付けられた。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国に分布する。県内では三沢市六川目・浜三沢・平畑に産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 採取の防止が必要である。

[特記事項] 県内で、ホノオハナワラビ（アカハナワラビ×エゾフユノハナワラビ）・ムツハナワラビ（アカハナワラビ×イブリハナワラビ）・ミチノクハナワラビ（アカハナワラビ×ヤマハナワラビ）などの雑種が記録されている。
(須藤智道)

大葉シダ植物ヘゴ目 キジノオシダ科

A

和名 キジノオシダ

環境省：該当なし

学名 *Plagiogyria japonica* Nakai

[形態的特徴] 地上生の常緑シダ。葉は単羽状でそう生し、栄養葉の葉身長は30～50cm、幅15cmほど。孢子葉は栄養葉より長く、羽片は線形となる。

[選定理由] 東北地方では極めて少なく本県が北限分布種。1936年“西郡”分布の記録があるが、長らく確認できず“不明種”とされていた。58年後の1994年1月に西郡深浦町黒崎地区で確認されたが、個体数は極めて少ない。その後、同地区の他地点でも記録されたが、個体数が少なく、生育環境も厳しい。

[分布と生態の概要] 本県の分布は西津軽郡深浦町黒崎地区だけで、スギ植林地でミズナラ・トチノキが混生する林床に少数株が生育している。

[生存に対する脅威と保存対策] 日本分布の最北限地で、スギ植林地の一角に僅かに生育している。個体数が極めて少なく減少傾向にあり、生育環境も大変きびしい。

[特記事項] 本県が北限の植物。標本は津軽植物の会植物標本庫に収納。
(木村啓)

大葉シダ植物ウラボシ目 チャセンシダ科

A

和名 チャセンシダ

環境省：該当なし

学名 *Asplenium trichomanes* L.

[形態的特徴] 岩の割れ目や村落の石垣などに生える常緑性シダ植物。枯れた葉の葉柄と生きた葉を多数叢生する。葉は単羽状で20対以上つく。葉柄は光沢のある紫褐色。葉が枯れても細い葉柄が沢山残るので、茶筌（せん）シダと名付けられた。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。乱獲により激減している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・関東地方以西）・四国・九州、世界の温帯から暖帯に広く分布する。東北地方では本県だけに産し、東通村尻屋の石灰岩地に生育する。

[生存に対する脅威と保存対策] 乱獲の防止が必要である。
(須藤智道)

被子植物スイレン目 スイレン科

A

和名 ネムロコウホネ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Nuphar pumila* (Timm) DC. var. *pumila*

[形態的特徴] 池沼に生える多年草の水草である。根茎は肥厚して太く、泥の中を這う。水上葉は根茎の先から出て、長い葉柄があり、水面に浮かぶ。花期は7～8月、径2～3cmの黄色の花をつける。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 国内では北海道（東部）・本州（北部）の山地、沼池中に生える。国外では欧州・シベリアに分布する。県内では南八甲田の黄瀬菴（細井, 2010）に生息する。また、須藤（2018, 私信）は田型菴の池沼で確認している。

[生存に対する脅威と保存対策] 水環境及び自然遷移の変化に注意するとともに、園芸採取の防止が急務である。（齋藤信夫）

被子植物オモダカ目 サトイモ科

A

和名 ヒンジモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lemna trisulca* L.

[形態的特徴] 池沼などに生える沈水性の浮遊植物。葉状体は卵状長楕円形で、長さ7～10mm、細長い柄で連なる。水面上に3個ずつ「品」字形を描いて連なる様子から和名がきている。

[選定理由] 希産種で水質悪化等により生育地が失われる恐れがある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州、南米以外の全大陸に分布する。県内ではフォーリーの採集した標本等で記録されていたが、その後消息不明となっていた。2000年に今らにより小川原湖・仏沼に生育していることが確認された。

[生存に対する脅威と保存対策] 仏沼の生育地は停滞水状で良好と思われないが、水質条件の研究が必要である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）今回の調査で三沢市仏沼で生育が確認できた。（須藤智道）

被子植物オモダカ目 トチカガミ科

A

和名 トチカガミ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Hydrocharis dubia* (Blume) Backer

[形態的特徴] 湖沼・ため池や用水路などに生える浮遊性の多年草。走出葉が水底を横に這い、その先端から新しい株が形成される。葉は円形で基部心形、直径4～7cm、裏面中央には盛り上がった部分がある。浮葉には3～15cmの長い柄がある。雌株と雄株がある。花卉は3個で白色、長さ1～1.5cm。花期は8～10月。

[選定理由] 生育地が失われ個体数が激減している。

[分布と生態の概要] 国内では本州・四国・九州、国外では東南アジア・オーストラリアに分布する。細井（2010）は「県内では終戦後しばらく農薬があまり使われていない頃は水田地帯には広く分布していたが、いまでは激減して見つけることが難しくなった」と述べている。石戸谷（2017, 私信）はつがる市で確認している。

[生存に対する脅威と保存対策] 農薬や生活廃水等による水質悪化を防止する。（齋藤信夫）

被子植物オモダカ目 トチカガミ科

A

和名 イトリゲモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Najas gracillima* (A.Braun ex Engelm.) Magnus

[形態的特徴] ため池や水路、水田などに生育する沈水性の1年草。全長は10～30cm。茎は細く、よく分岐する。葉は長さ1.5cm、幅0.2mm、各節に5個ずつ輪生する。トリゲモ類のうちでもっとも葉が細い。雌雄同株で、各節に1個の雄花と2個の雌花がつく。果実は常に2個並んでつく。

[選定理由] 生育地が失われ個体数が激減している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国・九州、東アジアに分布する。細井（2010）は「県内では全域に産したが、今では自然度の高い池沼にしか残っていない」と述べている。石戸谷（2017, 私信）は弘前市やつがる市で確認している。また、須藤（2017, 私信）はむつ市で確認している。

[生存に対する脅威と保存対策] 農業や生活廃水等による水質悪化を防止する。

(齋藤信夫)

被子植物オモダカ目 シバナ科

A

和名 ホソバノシバナ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Triglochin palustris* L.

[形態的特徴] 湿原に生える多年草。根茎は短く、走出枝を出す。葉は細かく幅約1mm。花期7～8月。果実は長さ9mm、線形で下部が細まり、直立する。同じ仲間のオオシバナは塩性湿地に生え、果実は長さ3～5mmで、長楕円形から卵形である。

[選定理由] 目立たないが産地の限られた種で、高山のものは保護状態にあるが、低地では湿原開発・護岸工事などで減少が進行している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（関東以北）、北半球に広く分布する。県内では八甲田山および太平洋側の海岸や湖沼周辺の湿原に点在する。高瀬川河口部などの塩性湿地にオオシバナと混生することもある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で十和田市谷地湿原・青森市田代湿原で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物オモダカ目 ヒルムシロ科

A

和名 ガシャモク

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Potamogeton lucens* L. subsp. *sinicus* (Migo) H.Hara var. *teganumensis* Makino

[形態的特徴] 湖沼やため池に生育する多年生の沈水植物。草丈は20～50cm、葉は互生する。葉身は狭長楕円形で長さ5～12cm、幅1.2～2.5cm、先端は棒状突起となる。葉面の凹凸が明らか。葉縁は微鋸歯縁で波立つ。葉柄はほとんどないか、あっても短い。葉の基部は茎を抱く。茎は匍匐茎のように伸び、発根する。花柄の長さは4～9cm、花穂は長さ2～5cm。冬は地下茎の先端に殖芽を形成する。日本固有種。花期は6～9月。

[選定理由] 本県で生育確認されるまでは、全国で唯一の自生地は福岡県のお糸池だけと言われていた。

[分布と生態の概要] 昔は利根川水系・琵琶湖・九州に分布し、特に関東地方では肥料に使われるほど生育していたとされていたが、水質汚濁などにより生育地が激減し、福岡県北九州南部のお糸池だけが自生地とされていた。殖芽は環境悪化に強く、条件が良くなると芽を出すという。中国にも分布するという。本県ではつがる市の沼で確認されている（Shutoh *et al.*, 2019）。

[生存に対する脅威と保存対策] 福岡県の場合、池底への微細な泥土の堆積、水位の不安定さ、池周辺の樹木の繁茂及びそれに伴うリター供給量の増加や池内への透過日射量の減少などが生存に対する脅威として挙げられていることから、本県においてもそれらを参考に早急な対応策を講じることが必要と思われる。

[特記事項] 福岡県のお糸池では地元の小学校が保護活動を行っている。本県でも遺伝子保存の観点から分散栽培と、行政やボランティア団体、及び学校教育活動などとの連携した保護活動が必要と思われる。

(齋藤信夫)

被子植物オモダカ目 ヒルムシロ科

A

和名 ツツイトモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Potamogeton pusillus* L.

[形態的特徴] 湖沼、河川、水路などに生育する繊細な沈水植物。葉には柄がなく、線形で長さ2～5cm、幅0.5～1mm。イトモに似ているが、托葉の両側が合着して筒状になる。花茎は長さ1.5～2cm、花は離れて上下2段に付く。角野（1994）は本種の同定は「托葉が筒状であることを確認するより、花の付き方または殖芽の形態に着目した方が容易である」と述べている。

[選定理由] 開発によって生育地が失われてきている。

[分布と生態の概要] 北半球に広く分布し、県内では津軽地方の限られた沼や小川原湖・鷹架沼・尾駈沼に産する。石戸谷（2017, 私信）は五所川原市の十三湖・つがる市のガシャ沼で確認している。Shutohらもつがる市の沼で確認している（Shutoh *et al.*, 2019）。また、須藤（2017, 私信）はむつ市で確認している。

[生存に対する脅威と保存対策] 分布は水深や水質に左右され、自然遷移や乾燥化、水質悪化などへの対策が必要である。（齋藤信夫）

被子植物オモダカ目 ヒルムシロ科

A

和名 ササエビモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Potamogeton × nitens* Weber

[形態的特徴] 冷涼地の湖沼や河川に生育する多年生の沈水植物で、エゾノヒルムシロに似ているが、浮葉がないことで区別される。上部の葉は短い柄を持つことがあるが、下部の葉はやや茎を抱く。葉身は倒披針形～狭長楕円形、長さ2.5～8cm、幅5～15mm。花期は7～9月。

[選定理由] 産地が限られ水質悪化等により減少している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・九州に分布し、北半球に広くみられる。県内では十和田湖、小川原湖に産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 水質悪化の防止が必要である。（齋藤信夫）

被子植物オモダカ目 カワツルモ科

A

和名 カワツルモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Ruppia maritima* L.

[形態的特徴] 海岸の潮だまり（タイドプール）や湖沼など、淡水と海水の混ざる所に生える多年生の沈水植物。細い地下茎が横に延び、各節から水中茎が伸びる。茎の上方は分岐する。葉は針状で長さ5～10cm、互生する（花序の出る節は対生）。葉腋から伸びた花柄の先に2個の花をつける。花期は6～8月。

[選定理由] 生育地が次第に失われており、残った所でも個体数が減少している。

[分布と生態の概要] 世界中に広く分布しているといわれるコスモポリタン種（広布種）であるが、各地で産地は失われつつある。植物体は細く、密生する。県内では八戸市鮫町・小川原湖に生育するほか、須藤（2017, 私信）は六ヶ所村で、石戸谷（2016, 私信）は五所川原市で、それぞれ確認している。

[生存に対する脅威と保存対策] タイドプールは海岸でも多くはない。海岸地帯の生育環境の改変が一番のリスクといえることから海岸での防波堤や消波ブロックなどの設置には十分な配慮が必要である。

[特記事項] 細井（2010）は「小川原湖には花が咲いても果実が熟さない群落もあり花梗が緩く巻く。ネジリカワツルモとの関係は不明である」と記している。（齋藤信夫）

被子植物ユリ目 シュロソウ科

A

和名 ウラゲキヌガサソウ

環境省：該当なし

学名 *Kinugasa japonica* (Franch. et Sav.) Tatew. et C.Sutô var. *tomentosa* Miyabe et Tatew.

【形態的特徴】 茎頂に大きい葉が8～10枚輪生する多年草。外花被片は黄白色で8枚ほど輪状となり、輪生葉の中心から立ち上がる。和名のように、葉裏に毛がある。

【選定理由】 秋田県境に近い弘前市相馬地区の雑木林床に小群落で見られ、本県唯一の自生地である。生育現場は、急斜面谷地のミズナラやトチノキやホオノキを中心とした雑木林であり、崩壊や伐採による環境悪化や消滅が心配される。

【分布と生態の概要】 当該種が発見されて以来、生育環境が類似している県内各地へ足を運び、分布の確認を行っているが確認することが出来ない。分布の情報も全く無い。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育地への道のりは、複雑で厳しく容易に到達出来ないが、花も葉も大きく見事な美しさなので、採取されて絶滅に至る心配が大きい。生育地への進入禁止と定期的な監視体制が必要である。

【特記事項】 日本固有種。本県が北限の植物。

(木村啓)

被被子植物ユリ目 シュロソウ科

A

和名 クロミノコジマエンレイソウ

環境省：該当なし

学名 *Trillium smallii* Maxim. var. *atropurpureocarpum* J.Samej.

【形態的特徴】 草丈10～30cmの多年草。茎の頂に3枚の葉を輪生させる。葉は広卵円形で、茎頂から花柄を伸ばし1個の花をつける。花には3枚の萼と紫色の花弁がある。花弁の数は1～3枚で、形状も小～大、狭～広があり、一定していない。果実は球形の液果で黒紫色となる。

【選定理由】 コジマエンレイソウの変種で、2010年5月17日に、つがる市屏風山で群落が発見され分布上注目されている。本州唯一の北限群落であるが、生育環境は極めて厳しく、絶滅が心配される。

【分布と生態の概要】 近年、弘前市大和沢川流域と南郡大鰐町自然公園でも発見され、内陸での分布が確認された。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育地はクロマツ・エゾイタヤ・ウワミズザクラを中心とした雑木林の林床で、伐採や開発などによる消滅の危険を感じる。発見から10年近く経っているが、生育地の伐採が一度行われ、林床の株数が減少したように思われる。

【特記事項】 本県が南限の植物。標本は東京大学と弘前大学と津軽植物の会に収納されている。

(木村啓)

被子植物ユリ目 ユリ科

A

和名 ヒメユリ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Lilium concolor* Salisb. var. *portheneion* (Siebold et Vriese) Baker

【形態的特徴】 草地に生える多年草。茎は高さ30～80cm。葉は線形。花は朱赤色、小型で上向きに咲く。花期7月中旬。変異が多く、産地などで園芸上区別されることがあり、土地ではミチノクヒメユリ・ナンブヒメユリ・エゾアカヒメユリなどの呼び名がある。

【選定理由】 産地が限られており、環境変化により最近ほとんど確認されていない。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、朝鮮・中国・アムールに分布する。県内では太平洋側の南部町から五戸町にいたる丘陵地の草地や林縁にみられる。戦後自生地の採草地やカヤ刈場が中止されるとともにヒメユリも減少に転じた。1980年代にはススキ草原から転じたアカマツ林縁にやっと見出される程度になり、今ではアカマツ林伐採跡地にも出現を見ない。かつては切り花のほとんどが自生品であったといわれる。ススキ草原の刈り取り・火入れにより生存が保たれてきたもので、減少の要因は採取よりも時代の流れによる植生の変化にある。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)

(須藤智道)

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 フジチドリ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Amitostigma fujisanense* Sugim.

[形態的特徴] 山地の苔むした古木の樹幹上に着生する小型の多年草。茎は斜上し高さ6～8cm。葉は根元近くに1枚つき、披針状楕円形、長さ4～5cm。花は3～5個まばらにつき、淡紅色、長さ5～6mm。唇弁は舌状で、小さな側裂片がある。花期7月。

[選定理由] 希産種であり個体数も少ない。深山の森林伐採の進行、マニアによる盗掘などで激減している。

[分布と生態の概要] 本州（青森・秋田・岩手・神奈川・静岡）に隔離分布する。県内では奥羽山系と白神山地に希産する。深山の大木の樹幹および枝上にコケ類やシダ植物とともに着生する。空中湿度がある程度保たれている場所に生育する傾向がある。

[生存に対する脅威と保存対策] 古木の保存と園芸採取の防止が必要である。（齋藤信夫）

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 ミスズラン

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Androcorys pusillus* (Ohwi et Fukuy.) Masam.

[形態的特徴] 亜高山帯の針葉樹林下に生える。茎は高さ7.5～9cm、地下に塊根があり、基部は鞘葉に包まれる。葉は1個つき倒披針状楕円形、長さ2～3cm。花は淡緑色で穂状に数個つく。花期は6～7月。

[選定理由] 希少種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 本州（青森・栃木・群馬・長野・静岡）に分布する。細井（2010）は「県内では八甲田山のアオモリトドマツ林下に生育が確認された」と記している。成田（2017, 私信）は「八甲田山の自生地は消滅、その後の確認記録は今のところない」と述べている。

[生存に対する脅威と保存対策] 登山者による踏圧をはじめ環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。（齋藤信夫）

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 サルメンエビネ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Calanthe tricarinata* Lindl.

[形態的特徴] 草丈30～50cmの多年草。葉は2～4枚束生して立ち、束生葉の中心から花茎を直立させる。花茎の上方に花を8～10個の総状につける。花色は、萼片と側花弁は黄緑色、唇弁は朱紅褐色。唇弁の朱紅褐色が、猿面を思わせるのが特徴である。

[選定理由] 50年ほど前までは、各地の里山落葉樹林下に普通に見られたが、急激に減少が続いている。その原因の多くは、観賞用や販売のために人為的に採取されたことである。また、生育地となっている樹林が伐採されたことにも原因がある。現在は、個体数の回復傾向にあるが、まだまだ少ない。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本・中国・インド北部。日本の分布は北海道・本州・四国・九州でブナ帯の落葉樹林下。本県分布は津軽と下北を中心とし、越冬時は長大な緑葉を横伏している。

[生存に対する脅威と保存対策] 当該種の花が美しいので栽培観賞のため採取されている。また、生育に適した樹林が減少している。採取禁止と里山樹林の保存対策が必要である。

[特記事項] 日本固有種。本県が北限の植物。（木村啓）

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 ヒメホテイラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Calypso bulbosa* (L.) Oakes var. *bulbosa*

[形態的特徴] 針葉樹林下に生える多年草。葉は1枚、長さ2.5～4.5cmほどの卵状楕円形、裏面は紫色を帯びる。花茎は10cm前後、先端に紅紫色の花を1個咲かせる。花を正面から見た時に2裂した距の先端が唇弁より下に突き出ないことでホテイランと区別される。花期5月上旬。

[選定理由] ヒバ林の伐採が進んで生育地が次第に失われるとともに、盗掘のため激減している。

[分布と生態の概要] 北海道（西南部）・本州（青森）、世界的にはシベリア・ヨーロッパ・北アメリカなどに広く分布する。日本での分布域は狭い。県内ではヒバ林にしばしば産するが、かつてのような群生はみられなくなっている。

[生存に対する脅威と保存対策] 園芸採取及び登山者による踏圧をはじめ環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。
(齋藤信夫)

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 モイワラン

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Cremastra aphylla* T.Yukawa

[形態的特徴] サイハイランに似ているが、根が肥厚してサンゴ状に分枝し、葉がなくて暗紫色の花茎を伸ばして花を咲かせる。花は花茎より明るい色である。花期は5～6月。

[選定理由] 希少種であり、乱獲が心配される。

[分布と生態の概要] これまでサイハイランと混同されていたこともあり、分布・生態についてはまだ十分解明されていない。成田（2017, 私信）は下北半島・深浦町・平川市などで確認している。

[生存に対する脅威と保存対策] 園芸採取及び伐採による環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

[特記事項] 細井（2010）は「学名は佐井村産の生品に基づき、新種として発表されたものである」と記している。
(齋藤信夫)

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 トケンラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cremastra unguiculata* (Finet) Finet

[形態的特徴] 草丈30～40cmの多年草。葉は根元から2枚出て、地面に伏している。花茎は直立し、上方に6～12個の花を総状につける。花被片は線状で半開し、黄色で淡褐色を帯び、紫色の斑点を散布している。

[選定理由] 深山の落葉樹林下に生育しているが、10年ほど前からは姿を見ることが困難となっている。県内の数地点に、僅かに見られるのみである。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国の落葉樹林下に生育するが、普通には見ることが出来ない。本県にあっては、八甲田地区と深浦地区の分布が知られている。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育場所が限られ、個体数も少ない。また、花姿が美しく魅力的で、観賞用としての価値が高く採取されることもある。絶滅が迫っているように思われるので、生育地点の確認と保護対策が必要である。

[特記事項] 日本固有種。
(木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 アツモリソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cypripedium macranthum* Sw.var.*speciosum* (Rolfe) Koidz.

【形態的特徴】 山地に生える多年草。茎は高さ20～40cm。葉は互生し長楕円形、長さ8～20cm。花は茎頂に1個つき淡紅色、径3～5cm。側萼片は2枚合着する。唇弁は袋状で球形。花期6月。

【選定理由】 草地の減少により生育地が失われるとともに、乱獲が加わって激減した。

【分布と生態の概要】 本州（中部以北）、朝鮮・中国に分布する。県内に散在していたが現状はほとんど消息不明である。原因は遷移進行・採取もあるが、かつてしばしばみられた山の斜面の採草地・放牧地および疎林地が、戦後馬の飼育が行われなくなって放置化されるにいたり、格好の生育適地が失われたものと考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

(須藤智道)

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 ベニシュスラン

環境省：該当なし

学名 *Goodyera biflora* (Lindl.) Hook.f.

【形態的特徴】 常緑の樹林下に生える草丈8cmほどの多年草。茎の基部は地表を這い、上部は斜上する。葉は卵形～長卵形で3～4個互生し、葉面には白い網状の模様がある。茎の先端に淡紅色で筒状の大型花を1～2個つける。花の形状は蟹のハサミを思わせる。

【選定理由】 暖地系の植物で、本県には分布記録が無かったのを1980年6月14日に十二湖で発見された。以後、津軽植物の会では県内各地に足を運び、分布調査を行っているが十二湖以外では認める事が出来ない。十二湖の特定地点だけに僅かに見られ、増加する傾向は無い。

【分布と生態の概要】 世界的分布は朝鮮半島と日本。日本分布は本州の関東以西～九州であったが、秋田県の文献記録もある。十二湖の場合はヒバ林床に僅かに見られるのみ。

【生存に対する脅威と保存対策】 個体数が数株と少ないので、僅かな環境変化で消滅する心配がある。立ち入り禁止が必要と思われる。

【特記事項】 本県が北限の植物。

(木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 ヒロハツリシュスラン

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Goodyera pendula* Maxim. f. *brachyphylla* (F.Maek.) Masam. et Satomi

【形態的特徴】 深山の苔むした古木の樹幹などに着生する。茎は下垂する。葉は狭卵形または卵形、ツリシュスランより短くて幅が広いところから和名がきている。花は白色で一方にかたよって多数つく。

【選定理由】 希産種で森林の伐採や採取により減少している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）に分布する。県内では津軽半島・下北半島・十和田山系に産する。成田（2017, 私信）は十和田湖周辺で確認している。

【生存に対する脅威と保存対策】 古木の保存と園芸採取の防止が必要である。

(齋藤信夫)

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 ヒメミズトンボ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Habenaria linearitolia* Maxim. var. *brachycenta* H.Hara

[形態的特徴] 湿原に生える多年草。よく似たミズトンボより小型で高さ20～40cm。花もひとまわり小さい。唇弁は十字型で、側裂片が水平かやや下向き、中裂片と側裂片がほぼ同長（ミズトンボでは側裂片が湾曲して斜上し、中裂片が長い）。花期6～7月でミズトンボより少し早い。

[選定理由] 産地に限られ個体数も少ない。現在生育地は原子力発電所の敷地内にあり、生存に対して配慮されているが、湿原の富栄養化・木本類の進出等による減少の危険性がある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・群馬・新潟）・千島に分布する。県内では東通村に産し、生育地は海岸後背地の湿原で、戦後付近に入植が行われたが、開墾までに至らなかった所で、寒冷地湿原植物群落が残っている。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で東通村小田野沢南通で生育が確認できた。（須藤智道）

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 クシロチドリ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Herminium monorchis* (L.) R.Br.

[形態的特徴] トンボソウに似ているが、地下に塊根がある。茎は高さ10～15cm。葉は狭長楕円形で茎の下部にふつう2枚つく。花は穂状につき淡緑色で小さい。唇弁は全緑で距がない。花期7月。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）、朝鮮・中国・ヒマラヤ・シベリア・ヨーロッパに分布する。県内では東通村の石灰岩地のやや湿った草地に希産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 北海道の釧路では乱獲にあつて絶滅したという（細井, 2010）。花が人目をひかない地味なものがかえてマニアに好まれる傾向があるので、乱獲の防止が必要である（細井, 2010）。成田（2017, 私信）によると東通村の自生地では盗掘と思われる場所が多くあり、減少しているという。園芸採取及び踏圧をはじめ環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。（齋藤信夫）

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 フガクスズムシソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Liparis fujisanensis* F.Maek. ex F.Konta et S.Matsumoto

[形態的特徴] 主として苔むした古木の樹幹上に着生する。全体がきわめて小さく、高さ3～10cm、葉の長さ1.5～5cm位である。スズムシソウとクモキリソウの自然雑種と考えられる。花期6～7月。

[選定理由] 園芸採取により産地・個体数が激減している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国・九州に分布する。県内では奥羽山系・白神山地・津軽半島・下北半島・十和田湖周辺に産する。成田（2017, 私信）は本種が十和田湖周辺のブナなどの大木の苔むした幹に着生していることを確認している。

[生存に対する脅威と保存対策] 戦後のブナの大規模伐採とその後の乱獲が減少要因である（細井, 2010）。園芸採取及び伐採による環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。（齋藤信夫）

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 ヤチラン

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Malaxis paludosa* (L.) Sw.

[形態的特徴] 高層湿原のミズゴケの中に生える。茎は高さ5～10cm。葉は2～3枚つき、花後先端にムカゴをつける。花は淡緑色で径約3mm。他のランと違い唇弁が上側にあって直立するのが特徴である。花期7～8月。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 国内では北海道、本州（中部以北）、国外では南千島・樺太・シベリア・ヨーロッパ・北アメリカなどの、主として北半球の温帯に分布する。細井（2010）は八甲田山の限られた湿原に産するとする。須藤（2018, 私信）は十和田市の湿原で確認している。

[生存に対する脅威と保存対策] 湿原への立ち入りを禁止するとともに、自然遷移を注意深く見守る必要がある。（齋藤信夫）

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 サカネラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Neottia nidus-avis* (L.) Rich. var. *mandshurica* Kom.

[形態的特徴] 草丈20～30cmの多年生腐生植物で、光合成をして栄養をつくることは無く、植物体は汚れた黄白色をしている。茎は太く多肉質で直立し、下部には数個の鞘状葉を互生し、上部には密生した多数の花を総状につける。根茎は地中に直立し、肉質で先が上向する根を束生する。根が下向するのが普通であるが、当該種は逆に上へ向かうので、和名の由来となった。

[選定理由] 自然度の高い落葉樹林下に見られる腐生植物であるが、目にすることは極めて少ない。探して見つかるというものではなく、偶然に遭遇するというのが一般的である。

[分布と生態の概要] 世界的分布は中国東北部・朝鮮半島・サハリン・シベリア東部。日本の分布は北海道・本州中部以北・九州の落葉樹林下。本県分布は全域であるが確認地点の報告は限られている。

[生存に対する脅威と保存対策] 自生確認場所は県内各地であるが、出会うことは殆ど無い。生育地点を確認し、地域全体の保護対策が必要である。

[特記事項] 2018年9月9日に津軽植物の会で、岩木山弥生登山道において当該種を確認した。

（木村啓）

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 タカネトンボ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Platanthera chorisiana* (Cham.) Reichb.f.

[形態的特徴] 高山帯の草地や湿地に生える。茎は高さ8～15cm。葉は深緑色で地表近くにつき、広楕円形、2枚接近し長さ2～6cmで厚くて光沢がある。花は黄緑色で径3～4mm、10個内外つく。花期7～8月。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、千島・サハリン・カムチャッカ・アリューシャンに分布する。県内では八甲田山・岩木山に産する。成田（2016, 私信）は八甲田山で確認している。

[生存に対する脅威と保存対策] 園芸採取及び伐採による環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。（齋藤信夫）

被子植物キジカクシ目 ラン科

A

和名 イイヌマムカゴ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Platanthera iinumae* (Makino) Makino

【形態的特徴】 山地の針葉樹の林床に生える。茎は高さ30cm内外。茎の中ほどにやや接近して長さ8～15cmの長楕円形の葉を2～3枚つけ、その上方に数個の披針形の鱗片葉がつく。葉の縁はやや波打つ。花は穂状に多数つき、小さくて黄緑色。花期7～8月。

【選定理由】 産地・個体数が少なく、森林伐採による減少が考えられる。

【分布と生態の概要】 北海道（渡島）・本州・四国・九州に分布する。成田（2016, 私信）は大鰐町・弘前市のスギ林で確認している。生育環境や生育地など不明な点が多い。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び伐採による環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

(齋藤信夫)

被子植物キジカクシ目 アヤメ科

A

和名 ヒオウギ

環境省：該当なし

学名 *Iris domestica* (L.) Goldblatt et Mabb.

【形態的特徴】 山地の草地に生える多年草。茎は高さ60～100cm。葉は剣状でやや粉白色を帯びる。花は放射相称、径3～4cm。花被片は同形同大、橙色で暗赤色の斑点がある。花期7月下旬～8月。種子は黒色で光沢があり「うば玉」、「ぬば玉」と呼ばれる。観賞用とされる。

【選定理由】 産地が限られており、個体数がきわめて少ない。採取や自然災害等により消滅の危険性がある。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州・沖縄、朝鮮・中国・インドに分布する。県内では鱒ヶ沢町と八戸市南郷に希産する。日当たりの岩場の草地に生育する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市南郷区島守で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キジカクシ目 ヒガンバナ科

A

和名 シロウマアサツキ

環境省：該当なし

学名 *Allium schoenoprasum* L. var. *orientale* Regel

【形態的特徴】 高山の岩場に生える多年草。アサツキによく似ており、高さ15～50cm。葉は円筒形、径3～5mm。花は淡紅紫色、花被片は長さ6～8mm（アサツキは8～10mm）。雄しべは花被片とほぼ同長（アサツキの雄しべは花被片よりずっと短い）。花期7～8月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。高山生であるが山地にみられる点で貴重である。植生遷移・自然災害により減少の恐れがある。

【分布と生態の概要】 国内では北海道・本州（中部以北）、国外では朝鮮・サハリン・シベリア（東部）に分布する。県内では白神山地に産する。岩場の岩隙や草地に生える。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育地の自然遷移や攪乱に注意する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を主に引用）

(齋藤信夫)

被子植物イネ目 ホシクサ科

A

和名 カラフトホシクサ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Eriocaulon sachalinense* Miyabe et Nakai

[形態的特徴] 高層湿原に生える無茎で小型の1年草。葉は線形で、長さ4～5cm、幅1mm。花茎は5～10cm。頭花は小さく径2mmぐらい、黒藍色。花は2数性で萼片・花弁・子房・花柱は各2個。雄蕊は4個。

[選定理由] 希産種で個体数は少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）・サハリンに分布する。県内では八甲田山に産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育地の自然遷移や攪乱に注意する必要がある。

[特記事項] 最近の研究では八甲田山の本種はクシロホシクサに含まれる可能性が提示されている。ホシクサ属の分類はまだ不明確な部分があることから、ここでは従来の見解にしたがった。

(齋藤信夫)

被子植物イネ目 イグサ科

A

和名 ミクリゼキショウ

環境省：該当なし

学名 *Juncus ensifolius* Wikstr

[形態的特徴] 亜高山帯の湿原や流れのほとりに生える多年草。根茎は横に這う。茎は高さ30～50cm。茎と葉は扁平。葉は幅3～6mm。小頭花は普通2個つき、球形で径7～10mm。花期は8～9月。

[選定理由] 高山生の希産種で個体数は少ない。

[分布と生態の概要] 国内では北海道・本州（中部以北）、国外では千島・北アメリカ北西部に分布する。県内では南八甲田に産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

(齋藤信夫)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 タルマイスゲ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Carex buxbaumii* Wahlenb

[形態的特徴] 高層湿原に生える多年草。地下に長い匍枝がある。花茎がまばらに出て高さ30～50cm。小穂は3～4個。上部に集まってつき、頂小穂だけ雌雄性で他は雌性。花期は6～7月。

[選定理由] 希産種で、確認された生育地は干拓により消息不明となっている（細井, 2010）。

[分布と生態の概要] 国内では北海道・本州（青森・長野）、国外では千島・シベリア・中央アジア・ヨーロッパ・アフリカ・北アメリカ・オーストラリアに分布する。細井（2010）は「県内では三沢市仏沼（西村, June 8, 1959）に産する」と記している。

[生存に対する脅威と保存対策] 攪乱や自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

(齋藤信夫)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 ジョウロウスゲ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Carex capricornis* Meinsh. ex Maxim

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。叢生し、茎は高さ40～70cm。葉は幅4～6mmで硬い。小穂は茎の上方に集まってつき、長さ1.5～3cm。果胞は反り返り、狭長披針形、長い嘴の先が2裂して反曲するのが特徴。花期6～7月。

[選定理由] 湿地開発により減少している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、朝鮮・中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内に点在するが、太平洋側の六ヶ所湖沼群・小川原湖周辺に比較的産地が多い。湖沼・湿原の干拓・埋め立て等の土木工事や水害などによる攪乱地に先駆的に出現することもある。姿を消しても条件が整えば出現し消息がつかみにくい。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査でつがる市山田川・三沢市仏沼・小田内沼で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 クリイロスゲ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Carex diandra* Schrank

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。茎は高さ50～80cm。小穂は茎頂に密に集まってつく。果胞は長さ3mm、卵円形で縁辺に小刺があり、革質で熟すと栗褐色となり光沢がある。花期6月。類似種ミノボロスゲ・オオカワズスゲは果胞が4～5mmと大きいので見分けられる。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。生育地周辺の森林伐採・牧草地化等による土砂の流入・水質悪化が生育に影響を及ぼしている。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・秋田・長野・新潟）、北半球北部に広く分布する。県内では東通村荒沼に産し、湿原にツルスゲ・ムジナスゲ・ミツガシワ・タチギボウシなどと共に生育する。八戸市北沼のものは開発により1960年代に消滅した。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村荒沼で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 オクタマツリスゲ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Carex filipes* Franch. et Savat. var. *kuzakaiensis* (M. Kikuchi) T. Koyama

[形態的特徴] 山地に生える多年草。タマツリスゲの変種とされる。茎は高さ30～60cm。根茎は短く、葉は一部は越年して残る。果胞の嘴が短いのが特徴である。

[選定理由] 希少種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 本州（東北地方）に分布する。岩手県区界の標本に基づいて記録された（細井, 2010）。岩手県では宮古市・花巻市・滝沢市で記録されている。細井（2010）は「本県では川内町で大きい株が一度見つかっただけで詳しいことは解っていない。適潤な明るい林床に生える」と記している。

[生存に対する脅威と保存対策] 登山者による踏圧、自然遷移を注意深く見守る。

(齋藤信夫)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 アオバスゲ

環境省：該当なし

学名 *Carex insaniae* Koidz. var. *papillaticulmis* (Ohwi) Ohwi

【形態的特徴】 葉は細長く常緑でやや硬い多年草。葉長は19～30cm、葉幅は2～5mm。匍枝は無く、疎らに叢生する。有花茎は葉と同長かやや長い。雄小穂は棍棒状で、花茎先端に1個つき、鱗片は褐色。雌小穂は2～3個が離れてつく。果胞には明瞭な脈が多数あり、毛が密生している。

【選定理由】 これまでの分布は関東地方以西であったが、2009年5月5日に五所川原市神山地区で採集し、6年間に渡って研究調査を重ね2015年6月11日に新分布の発表をした。本県初発見で、東北地方初記録でもある。自生地は頻繁に崩落があり、20株より残存していない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は南千島。日本分布は本州の関東以西・四国・九州。本県分布は五所川原市。山地の尾根岩場や林縁などの崩落地に生育する。

【生存に対する脅威と保存対策】 山地林道の崩落地にだけ生育し、毎年の崩落により株数が年々少なくなっている。崩落防止の対策が必要である。

【特記事項】 標本は岡山理科大学星野研究室と津軽植物の会の標本庫に収納。本県が北限の植物。

(木村啓)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 クジュウツリスゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Carex kujuzana* Ohwi

【形態的特徴】 草地や明るい林内に生える多年草。根茎は横に這い、茎は疎生して高さ30～60cm。基部の鞘は濃赤紫色であるのが特徴。葉はやや軟らかく、白緑色、幅3～5mm。雌小穂は垂れ下がり、果胞をまばらにつける。果胞は長さ6mm、広倒卵形で、長い嘴がある。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。1960年代頃から草地の減少により生育地が次第に失われ、最近では落葉広葉樹林に潜在していたのが、伐採跡地に出現するのを見るだけである。

【分布と生態の概要】 本州（中部以北）・九州（北部）、朝鮮（南部）に分布する。県内では八戸市に希産する。生育地は採草地・放牧地（1960年）、落葉広葉樹林縁（1975年）、落葉広葉樹林伐採跡地（1996年）と変遷している。分布域は太平洋側の岩手県北にかけて藩政時代に馬の放牧が行われていた範囲である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

(須藤智道)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 ハタベスゲ

環境省：絶滅危惧 I B類

学名 *Carex latisquamea* Kom.

【形態的特徴】 湿り気のある所に生える多年草。全体に毛のあるのが特徴。やや叢生し高さ40～70cm。基部の鞘は赤褐色。葉は幅3～6mm。果胞は硬い膜質、卵形で長さ5～6mm、脈があり、無毛、先は嘴となる。

【選定理由】 希産種で個体数も少ない。1960年代頃から生育地の牧野・採草地が放置され遷移が進んで減少し、さらに養鶏場・養豚場の進出により沢沿いのものは消息不明となっている。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）・九州、朝鮮・中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内では太平洋側の八戸市・三沢市に産する。湿地周辺や流れのほとりに生育する。分布域はクジュウツリスゲと同じく、かつて牧野の展開していた範囲である。1978年に同じ分布域の岩手県洋野町の放牧地でサクラソウとともに小群をなしているのを見たが、今はそこも落葉広葉樹林に遷移し、わずかに残るだけである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

(須藤智道)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 イトナルコスゲ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Carex laxa* Wahlenb.

[形態的特徴] 高層湿原に生育する多年草。細い匍枝があり疎生する。茎は高さ20～40cm。頂小穂は雄性で長さ1～2cm、側小穂は雌性で長さ0.5～1cm、長い柄があって垂れ下がる。果胞は微細な乳頭状突起を密布して灰青色。

[選定理由] 希産種で本県唯一の生育地である。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・岩手・栃木）、朝鮮・中国（東北部）・千島・シベリア・ヨーロッパ北部の周北極地域に分布する。県内では東通村小田野沢南通の湿原にサギスゲ・ミツガシワ・ヤチスゲ・トキソウなどと共に生育する。

[特記事項] 以前に三沢市仏沼（菊地政雄, June 15, 1959）で記録されてから報告がなく、絶滅が危惧されていた。根市益三が小田野沢南通の湿原で採集し（July 16, 2015）、県内で唯一の生育地が確認された。（須藤智道）

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 ホソバオゼヌマスゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Carex nemurensis* Franch.

[形態的特徴] 湿原に生える多年草。密に叢生し、茎は高さ40～70cm。葉は濃緑色で幅2～3mm。小穂は長さ5～7mm、やや離れてつき、栗褐色でやや光沢があるのが特徴。花期は6～7月。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、千島・サハリンに分布する。細井（2010）は「県内ではつがる市（旧車力村牛潟）で井上守が採集した（June 2, 1970）以外に記録はない」と記している。

[生存に対する脅威と保存対策] 湿地の開発、自然遷移を注意深く見守る。（齋藤信夫）

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 クグスゲ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Carex pseudocyperus* L.

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。叢生し、茎は高さ40～70cm。雌小穂は長さ2～5cm、幅6～8mm、點頭する。果胞は長さ4～5mm、熟すと反曲し、口部は2深裂し、裂片は真っすぐでジョウロウスゲのように反曲することはない。花期7月。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。水質悪化等の環境変化により危険性が増大している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・群馬・長野）、シベリア・ヨーロッパ・北アメリカに分布する。県内では東通村荒沼と三沢市小田内沼に産し、沼の岸辺に生育する。

[生存に対する脅威と保存対策] 荒沼は付近に原子力発電関係の開発が進行している。寒冷地湿原植物の希少な生育地として全体の保存を考える必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村荒沼・三沢市小田内沼で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 ウシオスゲ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Carex raminskii* Kom.

【形態的特徴】 塩湿地に生える多年草。横走する根茎がある。茎は高さ30～50cm。基部の鞘は赤紫色。小穂は3～5個直立してつく。雌花鱗片は紫褐色で中肋が淡緑色。果胞は卵形で凸レンズ状、灰緑色。

【選定理由】 本州唯一の生育地で個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森）、千島・サハリン・カムチャッカ・アリューシャン・アラスカに分布する。三沢市天ヶ森射撃場の海水が流入する塩湿地に産する。

【生存に対する脅威と保存対策】 塩湿地の攪乱、自然遷移を注意深く見守る。

【特記事項】 細井（2010）は「この地の1998年と1999年の調査の際にアゼスゲに似た形態のスゲを得た。後日北海道大学所蔵の、カナダ産の標本と比較しウシオスゲと同定した。本州では初記録である」と記している。
(齋藤信夫)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 イッポンスゲ

環境省：該当なし

学名 *Carex tenuiflora* Wahlenb.

【形態的特徴】 湿原に生える多年草。茎は高さ20～60cm、まばらに叢生する。葉は細く、幅1～1.5mm、灰緑色。茎頂に2、3個密に集まった小穂をつける。小穂は長さ3～6mm、雌雄性で基部に雄花がつく。果胞は長さ3～3.5mm、灰緑色、多数の細脈がある。

【選定理由】 産地が限られており、個体数はきわめて少ない。生育地の湿原にはハンノキなどの木本類の進入が目立ち、消滅の危険性が増大している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森・栃木・長野）、北半球に広く分布する。県内では三沢市仏沼に産する。仏沼は干拓されてしまったが、かつて周辺に発達していた湿原がわずかに残っている。イッポンスゲはそのミズゴケ湿原にツルコケモモと一緒に生育する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
(須藤智道)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 マシケスゲモドキ

環境省：該当なし

学名 *Carex scitaeformis* Kük.

【形態的特徴】 山地の水湿斜面に生える多年草。タヌキランに似ているが、小穂は楕円状円柱形で幅7～8mm。果胞は狭卵形で長さ4～5mm、短い柄がある。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 本州（中部以北）に分布する。県内では鱒ヶ沢町芦菔付近の河岸で採集されたのみで藤原陸夫の同定による（細井, 2010）。

【生存に対する脅威と保存対策】 自然遷移を注意深く見守る。

【特記事項】 細井（2010）は「オオタヌキランとも呼ばれる。勝山（2005）はタヌキランとアズマナルコカナガエスゲの雑種と推定している」と記している。
(齋藤信夫)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 ヒメウシオスゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Carex subspathacea* Wormsk.

[形態的特徴] 塩湿地に生える多年草。地下茎は横走り群生する。茎は高さ5～20cm。葉は茎より高く伸び、やわらかで幅1～2mm。雌小穂は無柄で直立する。果胞は卵形で灰緑色。

[選定理由] 本州唯一の産地である。開発による危険性が增大している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）、千島・サハリン・ヨーロッパ北部・北アメリカ北部に分布する。県内では太平洋側の六ヶ所村と三沢の高瀬川河口部の塩湿地に産する。ウミミドリ・ヒメキンポウゲ・エゾツルキンバイ・イヌイなどと混生あるいは小群をなして生育する。北岸では干潟公園建設や護岸工事で一部消滅したが、生育状況から踏み付け・車輛立入り・ゴミの堆積がなければ保存可能と考えられる。南岸部は米軍天ヶ森射撃場内にあり立入禁止区域となって保存されている。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で六ヶ所村尾駮沼・高瀬川河口で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 チシママツバイ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Eleocharis acicularis* (L.) Roem. et Schult. var. *acicularis*

[形態的特徴] 水田などに生育する普通のマツバイによく似ており、外観では区別できないが、刺針が1～3個で果より短い（マツバイは刺針が3～4個で果より長い）。細井（2010）は「マツバイの母種になっているが、進化上はマツバイから変わったものであろう」と述べている。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国、北半球の暖帯から温帯に広く分布する。細井（2010）は「県内では六ヶ所村市柳沼で確認されただけであるが、精査すれば他にも発見される可能性がある」と記している。

[生存に対する脅威と保存対策] 湿地の開発、自然遷移を注意深く見守る。

(齋藤信夫)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 チャボイ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Eleocharis parvula* (Roem. et Schult.) Link ex Bluff, Nees et Schauer

[形態的特徴] 海水の出入りする辺りに生える小型の多年草。マツバイによく似ているが、茎は高さ3～5cm、やや太くてやわらかい。

[選定理由] 海岸開発により生育地が失われてきている。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州、ヨーロッパ・シベリア・北アメリカ・南アメリカ・北アフリカに分布する。県内では尾駮沼・鷹架沼・高瀬川流出口付近に産する。満潮時に海水に浸り、干潮時には露出する平坦な砂泥地に小群で生育する。

[生存に対する脅威と保存対策] 目立たない植物であるが、産地の限られた貴重種であることを啓発し、開発にあたって十分注意する。

[特記事項] 1999年尾駮橋の上流部のチャボイの群生地が浚渫されていた。ここは国内で最も確実な産地である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）

今回の調査で六ヶ所村尾駮沼のツルヒキノカサ・ウミミドリ群集の裸地で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 スジヌマハリイ (ヒゲヌマハリイ)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Eleocharis equisetiformis* (Meinsh.) B.Fedtsch.

[形態的特徴] 湖沼などの湿地に生える多年草。匍匐する根茎がある。茎は叢生し、高さ30～50cmやや硬くてトクサのような縦すじがある。equisetiformis (トクサの型をした) はそこから命名された。小穂は1個頂生する。

[選定理由] 産地が限られ開発等により減少している。

[分布と生態の概要] 本州 (中部以北)・九州 (北部)、朝鮮・中国東北部・中央アジアに分布する。細井 (2010) によると「県内では小川原湖・姉沼周辺に産する。やや砂質の湿地に小群で生育する。休耕田に見られることもある」という。石戸谷 (2017, 私信) はつがる市で確認している。Shutohらはつがる市の沼で確認している (Shutoh *et al.*, 2019)。

[生存に対する脅威と保存対策] 湿地の開発には充分注意すべきである。 (齋藤信夫)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

A

和名 ヒメワタスゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Trichophorum alpinum* (L.) Pers.

[形態的特徴] 稈は高さ10～30cm、小穂は長さ5～7mm、刺針は6個、糸状で花後は白色で著しく伸び、小穂から飛び出して風になびくため、糸くずのように見える。花期は6～7月。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州 (北部)、朝鮮北部・千島・北半球の北部全般に分布することから、周極要素と呼ばれるグループに入る。県内では八甲田山に産する。自然遷移を注意深く見守る。

[生存に対する脅威と保存対策] 登山者による踏圧、自然遷移を注意深く見守る。 (齋藤信夫)

被子植物イネ目 イネ科

A

和名 ザラツキヒナガリヤス

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Calamagrostis nana* Takeda subsp. *hayachinensis* (Ohwi) Tateoka

[形態的特徴] 高山帯の岩場に生育する多年草。本州中部以北の高山に生育するヒナガリヤスに似ているが、花序の枝や小穂柄がざらつく点で区別される。茎は高さ40cm以下、芒は短く小穂の外に伸び出さない。

[選定理由] 希産種で本県唯一の生育地である。

[分布と生態の概要] 岩手 (早池峰山)・山梨 (北岳) に産する。県内では佐井村縫道石山 (626m) の岩石地で発見された (根市, 1989, 未発表)。高山生の植物が低山地で生育しており、貴重である。

[生存に対する脅威と保存対策] 付近は特殊植物群落として国の天然記念物に指定されている。

[特記事項] 青森県北限種で日本固有種である。 (須藤智道)

被子植物イネ目 イネ科

A

和名 エゾカモジグサ

環境省：該当なし

学名 *Elymus pendulinus* (Nevski) Tzvelev var. *yezoense* (Honda) Tzvelev

[形態的特徴] 山地の林内に生える多年草。他のカモジグサ類に比べて茎は繊細で、高さ50～100cm。花穂は細く、弯曲して先が垂れる。小花の基盤に短毛があるのが特徴。花期6～7月。

[選定理由] 産地が限られており個体数が少ない。県内の生育地は地形・地質から土砂崩壊等の自然災害の危険性がある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州 (青森・岩手・長野)、朝鮮 (北部)・中国 (北部)・シベリア (東部) に分布する。県内では太平洋側の南部町・三戸町に希産する。生育地は馬淵川に面した砂岩地斜面の落葉広葉樹林の林縁である。(青森県レッドデータブック2010年改訂版 (根市, 2010) を引用) 今回の調査で南部町諏訪ノ平で生育が確認できた。 (須藤智道)

被子植物イネ目 イネ科

A

和名 オオトボシガラ

環境省：該当なし

学名 *Festuca extremiorientalis* Ohwi

【形態的特徴】 山地に生える多年草。ウシノケグサ類としては大型で高さ70～100cm。地下茎を伸ばし単生または疎生する。葉は幅5～12mm。花序は大きく散開し、まばらに小穂をつけて垂れ下がる。護穎には長さ4～7mmの芒がある。花期6～7月。

【選定理由】 希産種で個体数も少ない。同属の外来種オニウシノケグサとは生態が違い競合は考えられないが、森林の伐採や落葉広葉樹林のスギ植林地化により生育地が失われてきている。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、朝鮮（北部）・中国（北部）・シベリア（東部）に分布する。県内では南部町名久井岳に希産し、谷間の林内に生える。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
(須藤智道)

被子植物イネ目 イネ科

A

和名 タチイチゴツナギ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Poa nemoralis* L.

【形態的特徴】 深山に生える多年草。高さ40～60cm。葉は幅1～2.5mm、最上部の茎葉の葉身は葉鞘の3～4倍長い点で同属の他種と区別される。葉舌は微小である。株は作らない。

【選定理由】 希産種で個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州、北半球に分布する。国内での分布はよく分かっていない。細井（2010）は「県内では南八甲田の路傍の石礫地と十和田湖畔の岩上に生育する」と記している。

【生存に対する脅威と保存対策】 花は目立たないが、開発に当たっては注意すべきである。

【特記事項】 館岡亜緒の同定による（細井, 2010）。

(齋藤信夫)

被子植物キンポウゲ目 ケシ科

A

和名 エゾキケマン

環境省：該当なし

学名 *Corydalis speciosa* Maxim.

【形態的特徴】 ミヤマキケマンと外見はよく似ており、区別しにくい。種子の表面はミヤマキケマンでは小さい円錐状に尖って隆起しているが、本種は全く尖らず小疣状の突起を有する（凹点とみるのは誤り）。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森・岩手）、シベリア東部・サハリン・中国・朝鮮に分布する。県内では東通村尻屋の海岸部に小群がある。生態はミヤマキケマンと変わらない。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）

今回の調査で東通村尻屋で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キンポウゲ目 ケシ科

A

和名 オサバグサ

環境省：該当なし

学名 *Pteridophyllum racemosum* Sieb.et Zucc.

【形態的特徴】 草丈20～40cmの多年草。葉は根出し櫛状で、シダ植物のシシガシラの葉に似ている。花は白色4弁で花茎の先に、総状につく。

【選定理由】 全国的な希産種で、本県では津軽半島と下北半島に僅かに残存しているのみであったが、2017年5月7日に津軽西海岸深浦町で発見された。しかし、生育範囲が極限され個体数も少ない。新産地も含め、生育範囲も個体数も極限されている。

【分布と生態の概要】 現在のところ、津軽半島も下北半島も深浦海岸も生育場所を伏せているので、採取されていない。

【生存に対する脅威と保存対策】 新産地は、畑地や風力発電敷地と隣接している雑木地で、開発による消滅が心配される。加えて、採取による絶滅も考えられる。

【特記事項】 以前、大群落を形成していた津軽半島算用師峠のオサバグサが採取され、現在は絶滅してしまった。本県が北限の植物。1属1種の日本固有種。
(木村啓)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

A

和名 オキナグサ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Pulsatilla cernua* (Thunb.) Berchtold et J.Presl

[形態的特徴] 草丈10cmほどの多年草。全体に白長毛を密生し、葉は深く裂け、根生葉には柄がある。根は太く真っ直ぐに伸びる。花は暗赤紫色の鐘形で、包葉の中心から抜き出た花茎の先に一個を下向きにつける。花後、白い毛をつけた果実が毛槍を思わせる。

[選定理由] 2010年改訂版で触れたように、減少傾向が現在も続いている。そのため、自生現場に出会うことは極めて困難である。近年の自生種確認地点は、黒石市黒森山や岩木山麓弥生、八戸市糠塚など、極限され、個体数も極めて少ない。

[分布と生態の概要] 黒森山・岩木山麓・糠塚の個体数は数株に過ぎない。

[生存に対する脅威と保存対策] 自生生育の条件となる自然状態の向陽原野が殆ど無くなっており、姿を見ることが困難となっている。自然向陽原野を回復するためには、昔ながらの野焼きや草刈を定期的に行って、原野を維持する方法が必要と思われる。

[特記事項] 本県が北限の植物。万葉集に詠われる「根都古草（ねつこぐさ）」は本種。（木村啓）

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

A

和名 シコタンキンポウゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Ranunculus grandis* Honda var. *austrokurilensis* (Tatew.)H.Hara

[形態的特徴] 海岸の草地に生える多年草。地下に走出枝を出す。茎は高さ30～60cm。茎や葉柄の毛はねていて少ない。染色体数は $2n=28$ の4倍体である。花期6月。よく似たウマノアシガタ（キンポウゲ）は地下に走出枝を出さず、 $2n=14$ である。

[選定理由] 本州唯一の産地であり、環境変化のいかんによっては生存の危険が考えられる。現在シコタンキンポウゲの生育する草地は寒立馬などの放牧地となっているが、幸いウマノアシガタ・シコタンキンポウゲを食草としないので、むしろ生育状態は良好である。しかし、今後馬の減少に伴って自然の牧野が放置されたり、牧草地化されることになればシコタンキンポウゲは急激に減少すると考えられる。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）、千島・サハリン・カムチャツカに分布する。県内では東通村尻屋崎の海岸草地に産し、南限である。桑畑山産アイヌキンポウゲ（菊地, 1961）も同種と考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村尻屋崎で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

A

和名 チトセバイカモ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Ranunculus yesoensis* Nakai

[形態的特徴] バイカモに似ているが、托葉、花床、そう果にはまったく毛がない。葉は水中に展開する。水中の葉腋から伸びる花茎の先に5枚の花弁を持つ直径6～8mmの白い花を水上に咲かせる。根は水底に張り、茎は水の流れに揺らしながら伸ばしており、40cmほどになる。花期は7～8月。

[選定理由] 産地が限られており、水質悪化・開発等により減少している。

[分布と生態の概要] 北海道や東北地方北部の浅い清流や湖沼に生育する沈水植物。北海道の千歳川で初めて確認された。細井（2010）は「県内では小川原湖と奥入瀬川流域に確認されているが、角野（1994）は津軽半島・深浦町（十二湖・麩木）を記録している」と記している。

[生存に対する脅威と保存対策] 水質汚染に弱く、農薬や生活用水の流入が生育地の水環境の変化に大きな影響を与えている。（齋藤信夫）

被子植物ユキノシタ目 ポタン科

A

和名 ベニバナヤマシャクヤク

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Paeonia obovata* Maxim.

【形態的特徴】 林下に生える多年草。形態はヤマシャクヤクに似ており、茎は高さ30～50cm。葉は裏面に軟毛がある（毛のないものをケナシベニバナヤマシャクヤクという）。花は淡紅色、雌しべの柱頭は長く、外に巻くように曲がる（ヤマシャクヤクの柱頭は短く少し曲がる）。花期5～6月。

【選定理由】 ヤマシャクヤクより個体数はずっと少ない。落葉広葉樹林の伐採、スギ植林地化および園芸採取などにより著しく減少している。生育地の保存と採取の防止が必要である。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国（東北部）・サハリンに分布する。落葉広葉樹林内に生え、石灰岩を好む傾向がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で階上町寺下で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ユキノシタ目 ベンケイソウ科

A

和名 チチツパベンケイソウ

環境省：該当なし

学名 *Hylotelephium sordidum* (Maxim.) H.Ohba

【形態的特徴】 山地の岩上まれに樹上にはえる多年草。葉は長さ2.5～4.5cmで、互生あるいは対生し、普通は汚赤紫色で、葉形は卵形、広卵形、卵円形と変化がある。葉縁は波状またはまばらに低い鈍鋸歯がある。花茎は斜上し長さ10～40cmで、花序は散房状で、花弁は5数性で白色～薄黄緑色。花期は9～10月。

【選定理由】 産地が非常に少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州中・北部（長野・新潟・山形・福島・宮城・岩手・青森各県の山地と岩手県の海岸）の多雪地帯に分布する日本の固有種である。県内では十和田湖畔の岩上や十二湖崩山に産する。一般に明るい岩上に生える。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取の防止が必要。

【特記事項】 細井（2010）は「チチツパは上州の方言で葉の汚れた感じのくすんだ色からきている。しかし、県内産は淡い緑色でくすんではない」と記している。

(齋藤信夫)

被子植物ユキノシタ目 ベンケイソウ科

A

和名 レブンイワレンゲ

環境省：該当なし

学名 *Orostachys furusei* Ohwi

【形態的特徴】 岩上に生える多肉質の多年草。全体粉白を帯びた緑色。葯は黄色。よく似たコイワレンゲは帯粉せず緑色で、葯は赤紫色である。

【選定理由】 北海道の海岸にやや広く分布しているが、本州では八戸市の海岸以外に見られず、減少傾向にある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森）に分布する。県内では八戸市の海岸の岩上や岩隙に生える。しばしばコイワレンゲと混生することもある。

【生存に対する脅威と保存対策】 マニアの乱獲を防止する必要がある。

【特記事項】 本種の研究の歴史は八戸海岸の材料が最初であった。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市鮫町小舟渡平・中須賀・白浜・深久保・大久喜・金浜で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ユキノシタ目 ベンケイソウ科

A

和名 アズマツメクサ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Tillaea aquatica* L.

【形態的特徴】 草丈5cmほどの一年草で、茎葉は肉質。茎は単一あるいは分枝し、薄緑色をしているが紅を帯びることもある。葉は柄がなく対生し、線状で先が尖る。対生する2枚の葉の基部は連結している。花は小形白色4弁で左右の葉腋に交互して1個ずつ付く。

【選定理由】 北海道と本州の海浜泥地などに希に見られる種類で、本県では1975年6月22日に六ヶ所村尾駮沼で発見された。翌年、開発による環境変化で尾駮沼の個体は消滅した。しかし、2007年8月16日に東通村尻屋地区で30余年振りに再発見され、現在に至っている。県内から一度消えた種類が30余年ぶりに別地点で再発見され、県内唯一の自生地となっている。

【生存に対する脅威と保存対策】 個体数が少なく、生育環境も極めて厳しい。生育地が開発されれば、一瞬にして消滅してしまう状況にある。

【特記事項】 尾駮沼の標本は東京大学に収納され、尻屋地区の標本は津軽植物の会に保存されている。(木村啓)

被子植物バラ目 バラ科

A

和名 ミヤマダイコンソウ

環境省：該当なし

学名 *Geum calthifolium* Menzies ex Sm. var. *nipponicum* (F.Bolle) Ohwi

【形態的特徴】 亜高山帯から高山帯の岩場に生える多年草。高さ10~30cm。茎や葉柄に黄褐色の剛毛がある。根生葉の頂小葉は円形で大きく、側小葉はごく小さい。花は黄色で、径2~2.5cm。花柱はまっすぐ(他のダイコンソウ類のようにかぎ状に曲がらない)、長さ10mm内外。花期は6~7月。

【選定理由】 県内の生育地は1か所だけで、個体数も少ない。高山生の植物であるのに高度の低い所にみられるのは特殊で貴重である。生育環境の保全と採取の防止が必要である。

【分布と生態の概要】 北海道・本州(中部以北)・四国(愛媛)、千島に分布する。県内では佐井村縫道石山(626m)に産する。風衝地の岩隙や岩礫地に生息する。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)(須藤智道)

被子植物バラ目 バラ科

A

和名 エゾノウワミズザクラ

環境省：該当なし

学名 *Padus avium* Mill.

【形態的特徴】 ウワミズザクラに類似するが、花が大きく疎らに着くので、一見して違いが分かる。落葉高木であるが、本県自生の個体は生育地が岩木川氾濫地という環境の関係で大きくない。

【選定理由】 北海道のみの分布であったが、1977年5月13日つがる市木造地区の岩木川河川敷で発見され、本県はもちろん本州初記録となった。その後、稲垣地区や藻川地区や板柳地区で記録された。本県では、岩木川中流部の河川敷に限って自生分布している。

【分布と生態の概要】 岩木川河川敷の自生地の他に、内陸に本種生育の情報がある。調べてみたら、北海道からの移植株であることが分かった。交雑を避けたい。

【生存に対する脅威と保存対策】 岩木川河川敷の本種は、何れの地点も繁殖力が旺盛である。そのため、自然状態での絶滅の心配は無いと思われる。但し、河川改修などで自生地が改修されたり樹木が伐採されると、絶滅へ向かう心配がある。

【特記事項】 本県が南限の植物。(木村啓)

被子植物バラ目 バラ科

A

和名 ホロムイイチゴ

環境省：該当なし

学名 *Rubus chamaemorus* L.

【形態的特徴】 草丈10～20cmで、トゲの無い雌雄異株の多年草。花は白色5弁であるが4弁も見られ、花径2cmほど。果実は黄赤色に熟し、長楕円形で長さ2cmほどである。

【選定理由】 北海道と本州北部に分布し、本県では1973年6月16日に五所川原市長富溜池の浮島で初発見された。その後、小川原湖地区でも記録されている。高層湿原を生育環境とするので、県内各地の同環境地域を長年に渡って津軽植物の会が調査しているが、上記2地点以外での確認も情報も無い。

【分布と生態の概要】 長富溜池の場合は、健全な状態で生育し、個体の増加が見られる。

【生存に対する脅威と保存対策】 高層湿原の良好なミズゴケ層に生育するので、微妙な環境変化により消滅が心配される。長富浮島の場合は他から運んできた小舟でないと辿りつけないので、人間の進入は全く無い。加えて、長富溜池全体が五所川原市指定の自然保護地ともなっている。

【特記事項】 長富溜池のホロムイイチゴ群落は、五所川原市の天然記念物指定を受けている。標本は東京大学植物標本庫に収納されている。
(木村啓)

被子植物バラ目 バラ科

A

和名 エゾシモツケ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Spiraea media* F.W.Schmidt var. *sericea* (Turcz.) Regel ex Maxim.

【形態的特徴】 山地の岩石地に生える落葉低木。高さ1m内外。若枝は赤褐色で軟毛がある。葉は長さ2～3cm、長楕円形、鈍頭、先にだけ少数の鋸歯がある。枝先に散房花序をつけ、花は白色、径5～6mm。花期5月中～下旬。他のシモツケ類とは葉の形で見分けられる。

【選定理由】 産地が限られ個体数も少ない。生育地は崩壊斜面で、自然災害の危険性があり、また、高木類の進出による環境変化で消滅する恐れもある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森）、アジア東北部に分布する。県内では東通村尻屋に産する。石灰岩地の日当たりの崩壊斜面に、他の低木類と一緒に小面積で生育する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査でむつ市宇曾利山湖で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物バラ目 バラ科

A

和名 ホザキシモツケ

環境省：該当なし

学名 *Spiraea salicifolia* L.

【形態的特徴】 湿地周辺に生える落葉低木。高さ1～2m。茎にやや稜がある。葉は互生し、長さ6～10cm、狭長楕円形、鋭鋸歯がある。花は淡紅色、枝先に円錐花序につき、花弁は長さ2～3mm。花期は6～8月。

【選定理由】 本州では産地の限られた種である。県内の生育地は1か所だけで、付近では開発が進行している。開発はともすれば湿地優先となりやすいので、保存を計る必要がある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森・岩手・栃木・長野）、北半球北部に分布する。県内では階上町に産する。八戸ー久慈道建設に伴う調査（2001年）で小群が確認された。生育地はかつての牧野の凹地に残された沼沢地状の場所である。日当たりのよい湿地周辺に生え、地下茎を伸ばして繁殖する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で階上町蒼前平で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ウリ科 ウリ科

A

和名 スズメウリ

環境省：該当なし

学名 *Zehneria japonica* (Thunb.) H.Y.Liu

[形態的特徴] 蔓性の1年草。茎は細長く、卷鬚で他物に絡み延長する。葉は卵円形で薄く、頭部が鋭く尖り表面はざらつく。花冠は白色で5裂し、径5mmほど。果実は径1～2cmの球形で、糸状の柄に下垂している。

[選定理由] 暖地系植物で、九州・四国・本州に分布するが本県での記録は無かった。それを1966年9月4日に深浦町吾妻川下流部で発見され、北限種となった。繁殖力が低いようである。その後の継続調査で、深浦町の他地点でも確認されたが、拡散されることはなく深浦町に留まっている。

[分布と生態の概要] 一年草であるためか、生育地の環境変化で発芽しないこともあるようで、姿が見られない年もある。また、近隣地に突然群落を形成したこともある。詳細な生態観察が必要である。

[生存に対する脅威と保存対策] 吾妻川下流部の河川側帯にみられるので、河川改修や河川整備が行われると、消滅する心配がある。河川域全体の保存が必要である。

[特記事項] 本県が北限の植物。

(木村啓)

被子植物キントラノオ目 スミレ科

A

和名 キバナノコマノツメ

環境省：該当なし

学名 *Viola biflora* L.

[形態的特徴] 葉の表裏の縁や裏面脈状に毛を散生する。茎は斜めに立ち、高さ5～20cm。まばらに3～4個の葉がつく。葉は全体が明るい緑色で、長さ1～2cm、幅1.5～3.5cm、円腎形、先が円く、基部は深い心形、葉柄は長さ葉の2～6倍で2～10cm。根出葉は少数。花期は6～7月。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）・四国・九州（屋久島）に分布する。北半球の亜寒帯に広く分布する。県内では南八甲田乗鞍岳・横岳に産する（細井, 2010）。須藤（2018, 私信）は南八甲田乗鞍岳で再確認した。高山の湿った草地や砂礫地に生える。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育地の保存と園芸採取の防止が必要。

(齋藤信夫)

被子植物キントラノオ目 スミレ科

A

和名 エイザンスミレ

環境省：該当なし

学名 *Viola eizanensis* (Makino) Makino.

[形態的特徴] 草丈10cmほどで、葉が深く3裂しているのが基本の多年草。葉が深裂しているスミレ属は本県には本種だけなので、誤認することは無い。花は淡紅色であるが、濃かったり薄かったりの差がある。側弁の基部に毛を備えている。

[選定理由] 県内では太平洋側の低山地を生育域としているが、八戸地区と五戸地区の2地域だけでしか確認されていない。個体数が少なく、道端を生育場所としているので、道路の拡張や整備などの工事が行われると、一瞬にしての消滅が心配される。

[分布と生態の概要] 長年に渡って、当該種の分布調査をしているが上記2地点以外での生育は認められず、分布情報も無い。

[生存に対する脅威と保存対策] 自生地点の五戸町手倉橋も階上町赤保内も株数が限られ、増加する傾向は認められず、辛うじて生き延びている状況である。地域指定の保護対策が必要と思われる。

[特記事項] 日本固有種。本県が北限の植物。

(木村啓)

被子植物キントラノオ目 アマ科

A

和名 マツバニンジン

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Linum stelleroides* Planch.

【形態的特徴】 日当たりのよい草地に生える1年草。茎の高さは40～60cm。枝分かれした茎の先に淡紫色で径約1cmの花をつける。花弁は5枚。花はしぼむことなく、咲いたその日の午後に落花する。葉は狭長楕円形で幅2～4mm、3脈がある。葉茎はやや粉っぽい淡緑色。花期は8～9月。

【選定理由】 1960年代から激減し消息不明となっている。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、東アジアに分布する。県内では、かつて全域の草地に分布していたが、戦後牧野がなくなるに従って影を潜めるようになった。最近三沢市の米軍基地内で見つかっているが、今は代わって形態がよく似て花が黄色の外来種キバナノマツバニンジンが進出してきている（細井, 2010）。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取を防止する必要がある。人間の生活様式の変化と自然遷移に伴う適地の減少が著しい。（齋藤信夫）

被子植物フトモモ目 アカバナ科

A

和名 ケゴンアカバナ

環境省：該当なし

学名 *Epilobium amurense* Hausskn.

【形態的特徴】 イワアカバナに似ているが、茎は低く6～40cm、2列の稜線上に伏毛がある点で区別される多年草。葉は長楕円形～卵状披針形。花弁は淡紅色、倒卵形、茎上部の葉腋からでる。柱頭は頭状。花期は7～8月。

【選定理由】 最近報告もなく消息不明となっている。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国、アムール・ウスリー・中国（東北）・台湾・朝鮮北部・樺太・オホーツク・カムチャツカに分布する。県内では八甲田大岳の石礫地で原寛によって確認されたが、その後見つかっていない（細井, 2010）。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取・登山者の踏み付けを防止する必要がある。

【特記事項】 細井（2010）は「アカバナ類は分類が難しいので、引用標本がない過去の記録は再確認が難しい。最近「Flora of Japan」では県内に広く分布しているイワアカバナは本種の亜種 *E. amurense* subsp. *cephalostigma* (Hausskn.) Chen et al.として取扱われている」と記している。

（齋藤信夫）

被子植物フトモモ目 アカバナ科

A

和名 アシボソアカバナ

環境省：該当なし

学名 *Epilobium anagallidifolium* Lam.

【形態的特徴】 高山の礫地や草地に生える小さな多年草。茎は高さ3～15cm、しばしば株状になる。葉は下部では対生、上部では互生し、長楕円形～卵状披針形、縁に低鋸歯がある。花は淡紅色。柱頭は棍棒状。花期は7～8月。

【選定理由】 希産種で個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 国内では北海道・本州（中部以北）、国外では南千島、北半球の周極地域に広く分布する。細井（2010）によると県内では八甲田大岳噴火口のあたりに見られる。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取・登山者の踏み付けを防止する必要がある。（齋藤信夫）

被子植物フトモモ目 アカバナ科

A

和名 ヒメアカバナ

環境省：該当なし

学名 *Epilobium fauriei* Lévl.

[形態的特徴] 亜高山帯の砂礫地や岩場に生える小型の多年草。茎は高さ3～20cmで稜線はない。全体に短毛があり、ほとんど枝分かかれしない。葉は線形～線状長楕円形、縁に1～4対の鋸歯がある。花弁は淡紅色。柱頭は棍棒状。花期は7～9月。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北、鳥取大山が南限）、千島に分布する。県内では岩木山に産し、山頂の岩石地にみられる。

[生存に対する脅威と保存対策] 園芸採取・登山者の踏み付けを防止する必要がある。（齋藤信夫）

被子植物ムクロジ目 ムクロジ科

A

和名 クロビイタヤ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Acer miyabei* Maxim.

[形態的特徴] 山地に生える落葉高木。高さ15～20m。樹皮は灰黒色、縦に不規則に裂ける。葉は掌状に5中裂し、裂片に鈍歯牙があり、先は尾状に伸び鈍端（他のイタヤカエデ類は鋭先端）。花は淡黄色。花期5月。翼果は水平に開く。

[選定理由] 産地・個体数が少ない。生育適地の谷沿いの開田・植林が進んで著しく減少した。今は溪流のほとりにわずかに残るだけである。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・岩手・秋田・長野）に分布し、日本固有。県内では八戸市南郷と平川市碓ヶ関に産する。本州北部では北上山地が分布の中心で、八戸市南郷ではその北端部に相当する。岩手県北部ではしばしば小群がみられる。谷川沿いに生育することが多い。エゾイタヤなどと同様に扱われて伐採されるおそれがあるので、貴重種であることを啓発する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市南郷区島守相畑・平川市葛川で生育が確認できた。（須藤智道）

被子植物アブラナ目 アブラナ科

A

和名 タカネゲンバイ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Noccaea cochleariformis* (DC.) A. et D.Löve

[形態的特徴] 草丈15cmほどの小型多年草。根生葉は有柄で楕円形、茎葉は卵形で茎を抱き左右が矢尻形に張り出している。花は白色4弁で果実は軍配形となる。

[選定理由] 日本特産で北海道だけに分布するとされていたが、1996年7月9日に西津軽郡深浦町の吾妻川の上流で発見され、本州初記録となった。その後、津軽植物の会が現在まで県内全域を巡り確認調査をしているが、他地点での確認は全く無い。また、他県からの分布情報も無く、本州唯一の産地となっている。

[分布と生態の概要] 生育範囲は極めて狭く個体数も極めて少ない。そして、小規模な崩壊が毎年認められていて、一部の生育個体が埋まったり、流されたりしている。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育地点は深山溪谷の断崖礫地で岩礫や砂礫の崩落が見られる。大きい崩落があると一瞬にして絶滅する危険がある。絶滅をふせぐために崩落防止などの対策が必要である。

[特記事項] 本県が南限の植物。

（木村啓）

被子植物ナデシコ目 タデ科

A

和名 ヤナギヌカボ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Persicaria foliosa* (H.Lindb.) Kitag. var. *paludicola* (Makino) H.Hara

【形態的特徴】 水に浸された湿地に生える一年草。茎は下部は斜めに倒れ、上部は斜上して枝を分け、高さは30～60cm。葉は披針形～長卵形で葉の裏には多くの腺点がある。腺点は出っ張っている。花は9～10月に咲く。

【選定理由】 個体数が減少傾向にある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・九州、ヨーロッパ・シベリヤ・アムール・ウスリー・中国（東北）に分布する。細井（2010）は本種の生態を先人の記録を引用して次のように紹介している。すなわち、県内では佐藤（1943）が写生図を残し「山野ノ沼沢地、溜池ノ底、水湿路傍、湿潤ノ畑地等ニ発生。溜池ニ発生スルモノハ長期間水中ニ沈生スルモヨク生存ス。貯水池雑草ノ著シキモノナリ」とある。攪乱を受けている陽光地の湿地、沼畔、休耕田などに稀に生える。

【生存に対する脅威と保存対策】 生息地の環境維持を計る。

【特記事項】 細井（2010）は本種の確認経緯について次のように紹介している。すなわち、村井（1936）・菊地（1967）・Mizushima & Mori（1958）が記録している。その後、各地で見出された。本種の等価基準標本Sept.1903 TI-Syntypeは木梨延太郎が青森で採ったものである。近年は低湿地の生育池が開発で激減している。青森市大野の標本（Oct.24, 1955）の生育地は消失したが、この個体は下半分が倒伏して上半分が立ち上がり高さ15～20cmで分枝しない。（齋藤信夫）

被子植物ナデシコ目 タデ科

A

和名 コガネギシギシ

環境省：該当なし

学名 *Rumex maritimus* L. var. *ochotskius* (Rech.f.) Kitag

【形態的特徴】 海岸や内陸の砂地に生える1年草または越年草。茎は直立、高さ20～30cm、上部は分岐する。花は7～8月に咲く。果実には翼の長い刺とこぶのような突起が目立つ。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森）、ヨーロッパ・シベリア・モンゴル・中国北部・ロシア（東部地域）に分布する。本県での分布の確認経緯について細井（2010）は次のように記している。すなわち、本州では八戸のみであったが、最近むつ小川原港建設に伴う堀削残土堆積地に出現し数年で消滅した。しかし、米倉浩司（2000）が六ヶ所村尾鮫沼付近で見出し、県内で確実な産地が確認された。

【生存に対する脅威と保存対策】 本種の生態は不明部分が多いことから、生態を明らかにしたうえで対応策を考える必要がある。

【特記事項】 細井（2010）は「松村（1912）はMutsuの産と記録しているが、詳しいことは分からない。八戸市鮫海岸で山田玄太郎が1912年（明治45年）に採集した標本が岩手大学農学部に残されていることを菊地（1965）が記録したが、その後佐藤耕次郎が津軽雑草図説に本種の果の図を残している」と記している。（齋藤信夫）

被子植物ナデシコ目 ナデシコ科

A

和名 クシロワチガイソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Pseudostellaria sylvatica* (Maxim.) Pax

【形態的特徴】 山地の林下に生える多年草で、紡錘状の根がある。茎は細長く、高さ5～25cmで、多くの枝を分ける。葉は線形～線状披針形で対生し、葉柄はない。5～6月に花を咲かせる。花弁は5枚で、白く倒卵形、先は2つに切れ込みが入る。閉鎖花をつける。外観はエゾフスマに似る。

【選定理由】 特殊な限られた環境に分布し、希産である。

【分布と生態の概要】 細井（2010）は「北海道のほか本州では栃木県と岩手県北上山地にも産することが知られている。朝鮮・中国（東北）・アムール・ウスリー・ウダに分布する。県内では白神山の尾根すじの半陽地に生育し、数は少ない。青森・岩手両県では花崗岩類の風化土にのみ分布する」と記している。

【生存に対する脅威と保存対策】 乱獲を防ぐ。

（齋藤信夫）

被子植物ナデシコ目 ナデシコ科

A

和名 チシマツメクサ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Sagina saginoides* (L.) Karst.

[形態的特徴] 全体無毛、肉質で、寒地、高山に生える越年草あるいは多年草。茎は株状で多くの枝を張る。高さは3～5cm。葉は長さ0.5～1.5cm、細い線形で先が尖る。根出葉はロゼット状である。花期は5～9月。花は5数性で直径3mm、茎上に単生、時に腋生。小花柄は糸状で、花後に曲がるが、果時には再び直立する。

[選定理由] 国内では北アルプスと北海道に離れて分布していて、途中に岩木山だけで杉本（1965）によって記録されている（細井, 2010）。

[分布と生態の概要] 北海道・本州中部以北に稀に見られ、ヨーロッパ・カフカス・中央アジア・シベリア・中国（東北）・朝鮮・樺太・千島・カムチャツカ・北アメリカに分布する。

[生存に対する脅威と保存対策] 踏圧を受けやすい場所に生える。目立つ花でないが、マニアの乱獲から守りたい。

[特記事項] 細井（2010）は「杉本（1965）の記録以来、岩木山頂一帯から再確認の報告がない」と記している。
(齋藤信夫)

被子植物ナデシコ目 ナデシコ科

A

和名 エンピセンノウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Silene wilfordii* (Regel) H.Ohashi et H.Nakai

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。茎は高さ50～80cm。葉は対生し、狭長卵形。花は緋赤色で、花弁の先は燕尾状に細裂する。花期は8月上旬。類似種フシグロセンノウは林縁などに生え、花が大きくてくすんだ朱赤色、花弁は裂けない。

[選定理由] 生育地は現在陸・海上自衛隊の基地となっている。かつての生育地であった辺りには木本類の進出が目立ち、2003年の立入り調査では植生遷移が進行し、個体数がきわめて少なくなっている。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・埼玉・山梨・長野）、朝鮮・中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内では八戸市北沼に産することが古くから知られ、八太郎雑記（小井川, 1973）に明治の頃の状況が記されている。沼の周辺、背後の段丘および斜面の湿地に、サワギキョウ・タチギボウシなどと共に生育していたが、現在は段丘状の湿地にわずかに残っているだけである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査では陸上自衛隊八戸駐屯地の協力が得られず現地調査を実施することができなかったが、生育している可能性があるのでこのままのランクとする。
(須藤智道)

被子植物ナデシコ目 ナデシコ科

A

和名 イトハコベ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Stellaria filicaulis* Makino

[形態的特徴] 茎は四角で細く、そう生し、糸のように伸び、高さ30～80cm。葉は対生し、線形で長く尖り、長さ1～4cm。幅1～3mm。葉質は薄く、無毛。花は白色5弁で長さ6～8mm、深く2裂し、花柄の頂につく。花弁は萼の1倍半長。萼は披針形で先は鋭頭。

[選定理由] 本州の宮城県仙台平野と関東平野の低湿地に希に見られる種類であったが、1976年6月13日に、つがる市車力地区の低湿地で発見され、日本最北限種となった。発見以来、現在まで全県調査を継続しているが、他地点では確認されず、分布情報も全くない。

[分布と生態の概要] 生育地への進入道は無く、熟練した案内人がなければ辿り着くことが出来ない。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育地点の低湿地環境が、発見時に比べて乾燥化が極端に進んでおり、当時の群落状態が見られなくなっている。

[特記事項] 発見時の標本は、東京大学に収納されている。2017年3月31日発行の『北東北維管束植物分布図』には文献記録として、当該地が印されている。
(木村啓)

被子植物ナデシコ目 ナデシコ科

A

和名 エゾハコベ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Stellaria humifusa* Rottb.

【形態的特徴】 塩性湿地に生える多年草。茎は基部が這い、直立して高さ5～10cm。葉は狭長楕円形で鋭頭、質やや厚くて無毛。花は葉腋につき、花柄の長さ1～3cm。花期6月下旬～7月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。生育地の尾駮沼周辺は、近年原子力関連の開発が進んでおり、海岸・湿原開発のいかんによっては消滅の危険性が大きい。現在の生育状況から、環境が維持されれば繁殖の可能性もある。本州では貴重な北方塩性湿地植物群落全体の保存を考える必要がある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森）、北半球北部に分布する。県内では六ヶ所村尾駮沼河口部南岸に発達したウミミドリ・ヒメキンボウゲ・エゾツルキンバイ・オオシバナ・ヒライなどからなる塩性湿地植物群落中に、局所的に小面積で生育している。本州唯一の産地で南限である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村尻屋崎・六ヶ所村尾駮沼で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ナデシコ目 ヒユ科

A

和名 ミドリアカザ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Chenopodium bryoniifolium* Bunge ex Trautv.

【形態的特徴】 山野の林縁などの半日陰に生える一年草。茎は細く、高さ60cmほどになる。葉は長い柄があり、三角状卵形、菱状卵形などで葉先は鋭形、基部は広いくさび型～切形。花期は8～9月。花序はまばらに花をつける。花期は8～9月。

【選定理由】 限られた環境で、希産種。開発により減少している。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、アジア東北部に分布する。全国的に希産である。県内では三戸町目時に産する。八戸市南郷区の新井田川沿いにも見られたが、ダム建設により水没した。イワアカザともよばれ川沿いの岩石地に生える（細井, 2010）。須藤（2018, 私信）は八戸市櫛引で確認している。

【生存に対する脅威と保存対策】 一年草であることから、種子形成・散布時期を的確にとらえながら、管理していく必要がある。開発に当たっては十分留意すべきである。

(齋藤信夫)

被子植物ツツジ目 ハナシノブ科

A

和名 エゾハナシノブ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Polemonium caeruleum* L. subsp. *yezoense* (Miyabe et Kudô) H.Hara var. *yezoense* Miyabe et Kudô

【形態的特徴】 高山または山地の岩場や草原に生える多年草で日本の固有種。茎にはわずかに稜線がある。葉はシダ植物のシノブのように分かれ、奇数羽状複葉で、小葉は8～12対ある。茎は高さ30～80cm。青紫色の花を茎の上部に散房状に咲かせる。花冠は青紫色で5裂し、径3cmぐらい。花期は5～8月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森）に分布する。県内では白神山地の一部に産する。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び踏み付けの防止が必要である。

(齋藤信夫)

被子植物ツツジ目 サクラソウ科

A

和名 サクラソウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Primula sieboldii* E.Morren

【形態的特徴】 湿り気が多い所に生える多年草。全体にちぢれた毛がある。葉は長さ4～10cm。長卵形から楕円形、しわが多い。花茎は15～40cm。花は先端に7～10個散形につき紅紫色、径2～3cm。花期5月。栽培され多くの園芸品種がある。

【選定理由】 草地の減少、遷移の進行、落葉広葉樹林の伐採および外来種との競合などにより著しく減少している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・九州、朝鮮・中国（東北部）・シベリア（東部）に分布する。県内では太平洋側に偏った分布を示す。かつては海岸草原から内陸部の牧野・採草地の湿地周辺に広く分布していたものと考えられる。今は七戸町・三沢市以南にややまれに産するだけである。日当たりの湿地周辺に生えるが、川岸の春日光のよく差し込む落葉広葉樹林内にも見られる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市鮫町中須賀・松館蟹沢・大久保金吹沢、階上町追越で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ツツジ目 ツツジ科

A

和名 チシマツガザクラ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Bryanthus gmelinii* D.Don

【形態的特徴】 高山帯の岩石地に生える常緑の小低木。茎は分岐しながら地面を這いマット状に広がる。葉は互生し、線形で厚い。概形がガンコウラン（ツツジ科）に似ている。枝先に花茎を伸ばし、上部に2～10個の淡紅色の花をつける。花冠は離弁性で径5～7mm。花弁は4個。花期は7～8月。

【選定理由】 希産種である。盗掘により激減している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森・岩手）、千島・カムチャッカに分布する。県内では南八甲田山に産する（細井, 2010）。

【生存に対する脅威と保存対策】 盗掘の防止と生育地の保存が必要である。

(齋藤信夫)

被子植物ツツジ目 ツツジ科

A

和名 エゾノツガザクラ

環境省：該当なし

学名 *Phyllodoce caerulea* (L.) Bab.

【形態的特徴】 高山に生える常緑の小低木。高さは10～15cm、茎はよく分枝する。葉は線形で互生し、縁に微小な鋸歯がある。外観はアオノツガザクラに似る。花冠は壺状で紅紫色。蒴果に残る花柱は果体より長い。花柄、萼、花冠の表面などに腺毛がある。花期は7～8月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森・岩手・山形）、北半球北部に分布する。県内では岩木山だけに産する。雪田の周辺の草地や礫地に生える。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取、乱獲を防止する必要がある。

【特記事項】 細井（2010）は「岩木山のものは典型的なエゾノツガザクラと異なり、一集団があるのみである」と記している。

(齋藤信夫)

被子植物ツツジ目 ツツジ科

A

和名 カラフトイチヤクソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Pyrola faurieana* Andres

【形態的特徴】 葉は根生し、葉柄は長さ1.5～3.5cmで狭い翼がある。葉身は長さ2.5～4cm、幅2～3cmで、広い楕円形である。葉縁には小さな鋸歯がある。葉の間から長さ10～20cmの花茎を伸ばし10～20個の赤みを帯びた白色の花を下向きに咲かせる。花弁はあまり開かない。花柱がやや短く湾曲しない。総状花序である。花期は7～8月。

【選定理由】 県内では非常にまれである。

【分布と生態の概要】 国内では北海道・本州（東北地方）、国外では千島列島・サハリン・カムチャツカに分布する。県内では八甲田大岳、赤倉岳ほかに産する。亜高山帯から高山帯の常緑の小低木が覆う場所や、草地・砂礫地などに生える。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取・登山者の踏み付けを防止する必要がある。（齋藤信夫）

被子植物ツツジ目 ツツジ科

A

和名 キバナシャクナゲ

環境省：該当なし

学名 *Rhododendron aureum* Georgi

【形態的特徴】 高山に生える常緑低木。茎は普通横に這い、枝は斜上して高さ20～100cm。葉は枝の先に集まり、柄があり基部は楔形。花は黄色、枝の先に集まってつき、径3cm前後。花期は7月頃。県内に広く分布するハクサンシャクナゲは、葉の基部が円いか浅く心形になることで区別される。

【選定理由】 本県ではきわめて珍しい植物で、盗掘のため自生地ではほとんど確認できなくなっている。マニアの採取を防止する必要がある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、千島・サハリン以北の寒帯に分布する。高山のハイマツ林や礫地に生える。県内では、かつて、白神山地・八甲田山・岩木山などで生育が確認されているが、その後の報告がきわめて少ない。花期には花の色で分かるが、花のない時期は葉の形態で判断するしかない。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取・登山者の踏み付けを防止する必要がある。（齋藤信夫）

被子植物ツツジ目 ツツジ科

A

和名 バイカツツジ

環境省：該当なし

学名 *Rhododendron semibarbatum* Maxim.

【形態的特徴】 高さ2mほどになる落葉低木で、若い枝や葉柄には長く開出した腺毛と短い毛がある。葉は互生。葉身は楕円形で長さ2.5～5cm、幅1～2cm、基部は円い。葉柄は長さ5～10mmほどである。葉の表面には毛が散在し、裏面の葉脈には長い腺毛が生える。花冠は白色、大きさは2cm前後で、枝先の葉芽の下に1～数個咲く。花期は6～7月。

【選定理由】 県内ではきわめてまれである。

【分布と生態の概要】 北海道（南部）・本州・四国・九州に分布する。県内では深浦町（旧岩崎村）の山地に産するが、詳しいことは分かっていない（細井, 2010）。日本の固有種で、山地の林縁などに生育する。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取を防止する必要がある。（齋藤信夫）

被子植物リンドウ目 リンドウ科

A

和名 ムラサキセンブリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Swertia pseudochinensis* H.Hara

【形態的特徴】 草地に生える1年草または越年草。茎は高さ10～50cm、暗紫色を帯びる。葉は対生し長さ2～4cm、線上披針形。花は青紫色で、濃紫色の脈がある。花冠裂片の密腺溝の毛に乳頭突起がある（類似種センブリの毛は平滑）。花期9月下旬～10月。

【選定理由】 生育環境が狭められ著しく減少している。「青森県レッドデータブック」（2000年3月）で絶滅EXとされたが、2000年10月に八戸市のアカマツ林伐採造成地に発見され、普及版（2001年）ではカテゴリーEXからAに変更された。その後八戸-久慈道建設調査（2001年）で、最近では2007年に東通村野牛の新設道路脇で三上により発見されている。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、朝鮮・中国（東北部）・アムールに分布する。県内では太平洋側に希産する。かつては牧野のススキ草地などに生育していたが、1960年代から消息不明となっていた。最近、以前の生育地であった辺りの攪乱地にまれに出現することが分かった（青森県、2007）。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村猿ヶ森・八戸市鮫町大須賀で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物リンドウ目 マチン科

A

和名 アイナエ

環境省：該当なし

学名 *Mitrasacme pygmaea* R. Br.

【形態的特徴】 草丈5cmほどの矮小な1年草で葉は2～4対が対生する。花は細い花梗の先につき、白色鐘形で先端が4裂する。

【選定理由】 県内唯一の自生地である五所川原市の湿気のある原野の植生遷移が進み、個体数が減少傾向にある。このままでは絶滅することが明らかなので、ランクをBからAへ上げ、緊張感を持って見守ることにした。

【分布と生態の概要】 世界的分布は、東南アジア・中国・朝鮮半島・日本。日本では本州・四国・九州に分布。県内分布は五所川原市狼野長根自然公園のみである。

【生存に対する脅威と保存対策】 自生地は、五所川原市が管理する自然公園になっており、定期的に除草が行われ、生育環境が辛うじて保たれている。定期的除草が止まれば、絶滅するものと思われる。津軽植物の会では、自生地に毎年足を運び生育状態を見守っている。

【特記事項】 本県が北限の植物。

(木村啓)

被子植物リンドウ目 キョウチクトウ科

A

和名 バシクルモン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Apocynum venetum* L. var. *basikurumon* (H. Hara) H. Hara

【形態的特徴】 海岸の草地に生える。茎は帯赤色、高さ40～80cmで枝分かれが多い。葉は長さ2～5cm、幅7～15mmで対生するが、主幹部分では互生する。茎葉ともに無毛。花冠は鐘形で淡紅紫色、長さ6～7mm。花期は7月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 国内では北海道（西南部）・本州（青森から新潟までの日本海側）、国外では南欧・ロシア・モンゴル・中国東北部・朝鮮に分布する。県内では夏泊半島だけに産する。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

【特記事項】 宮部（1949）はアイヌ語で「Paskuru-mun」（長い地下茎を出す草）からきており、これは驚くべき長い地下茎を以てはびこる草の意であるとしている（細井, 2010）。

(齋藤信夫)

被子植物リンドウ目 キョウチクトウ科

A

和名 コカモメヅル

環境省：該当なし

学名 *Tylophora floribunda* Miq.

【形態的特徴】 山野に生えるつる性の多年草。葉は対生し、卵状披針形、基部心形、長さ3～6 cm、幅1～3 cm。花は暗紫色。

【選定理由】 希産種で個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、朝鮮・中国に分布する。県内では原田幸雄が南部町（旧名川町）で採取した標本（Aug 11, 1975）が1点あるだけで、以来同方面で注意して見たが未だに再確認できていない。北限種である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）

今回の調査で階上町茨島のヨシ低層湿地で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ムラサキ目 ムラサキ科

A

和名 ムラサキ

環境省：絶滅危惧 I B類

学名 *Lithospermum erythrorhizon* Siebold et Zucc.

【形態的特徴】 山地の草原に生える多年草。全体に粗毛が多い。茎は高さ40～70cm。葉は披針形、表面にへこんだ平行脈が目立つ。花は白色で径4 mm、喉部に黄味を帯びた突起がある。花期7月。分果は白色で平滑。

【選定理由】 生育地である草地の減少・遷移進行・外来種との競合などにより、産地・個体数の減少が著しい。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・アムールに分布する。県内では全域に分布するがまれである。かつては草地にまれでなかったが、牧野・採草地の廃止と共に1960年代頃から激減した。日当たりの排水のよい土壌を好むので、石灰岩地が適合し、今でも東通村尻屋および八戸市・階上町の石灰岩地でみられる。

【特記事項】 根は昔から紫根染めに用いられ、かつては各地で栽培が行われ、南部地方のものは特に「南部紫」として有名であった。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で深浦町松神・鱒ヶ沢町山田野・五所川原市前田野目・東通村尻屋で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ムラサキ目 ムラサキ科

A

和名 ツルカメバソウ

環境省：絶滅危惧 I B類

学名 *Trigonotis iinumae* (Maxim.) Makino

【形態的特徴】 林下の湿り気のある所に生える多年草。茎は高さ10～20cm。花が終る頃葉腋から走出枝を長く伸ばし新苗を生じる。葉は卵形、下部のものには長柄がある。花は淡青色から白色、直径1 cmぐらい。花期5月下旬～6月。類似種タチカメバソウは山地生で走出枝を出さない。

【選定理由】 生育地はむしろ里山の範囲にあり、これまで開田や環境改変で失われてきたものと考えられ、開発等により減少は進行している。

【分布と生態の概要】 本州（中部以北）に分布する。日本固有。県内では太平洋側南部の八戸市・階上町に産し、北限である。丘陵地の沢沿いの林下や流れのほとりに小群で点在する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市沢里・松館蟹沢で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物シソ目 オオバコ科

A

和名 マルバノサウトウガラシ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Deinostema adenocaulum* (Maxim.) T.Yamaz.

【形態的特徴】 湿地に生える1年草。サウトウガラシによく似ているが、葉は卵円形で柄がなく、長さ4～10mm、幅3～5mm、明瞭な5～7脈がある。茎は下部で分岐し、直立したり斜上し、高さ10～18cm。花は上部の葉腋につき長さ4mm。正常花と閉鎖花がある。同じ部位に正常花と閉鎖花がある場合には正常花のほうが結実が早い。花期は8～9月。

【選定理由】 湿地の埋立て、耕地整理、除草剤散布で激減している（細井, 2010）。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、朝鮮南部に分布する。細井（2010）は「県内では鶴田町の休耕田とつがる市平滝沼に産するが、他にも精査を要する」と記している。葛西（2018）は青森市で群生を確認している。また、八戸市でも確認報告があるという。

【生存に対する脅威と保存対策】 花が小さく目立たないので、採取の心配はないが、保護していくべきである。（齋藤信夫）

被子植物シソ目 オオバコ科

A

和名 スギナモ

環境省：該当なし

学名 *Hippuris vulgaris* L.

【形態的特徴】 湖沼や池塘に生育する沈水～抽水の多年草。流水中では流れになびき、止水中では茎の上部が気中に立つ。直立茎で分枝せず、高さ30cmほどで葉が多数輪生。花は葉腋につき、雄蕊1本雌蕊1本から構成。花被片は退化して目立たない。果実は先がやや尖った卵形で、大きさは2～3mm。

【選定理由】 全国的に分布が限られており、県内では八甲田田代地区の一地点だけで確認されているのみである。津軽植物の会では、長年に渡って県内各地の類似環境地点に足を運んで調査しているが、当該種の確認は無く、分布情報も無い。

【分布と生態の概要】 世界的には周北極地域に分布する。日本では北海道と本州中部以北に見られる。県内では、八甲田田代地区に生育しているのみである。

【生存に対する脅威と保存対策】 湧水環境の清流に生育しているので、微妙な環境変化により、絶滅へ進むことが心配される。生育地の環境保全が必要である。

【特記事項】 本県が北限の植物。日本では1属1種、世界では1属3種が知られている。（木村啓）

被子植物シソ目 オオバコ科

A

和名 キクモ

環境省：該当なし

学名 *Limnophila sessiliflora* (Vahl) Blume

【形態的特徴】 水中葉と水上葉を持つ多年草で浅い沼や池などに生育する。水中葉は柔らかく水になびくような茎と葉を持ち、水上葉は堅く肉質でごわごわした感じである。水上葉は秋に薄紫色の小さな花を咲かせるが、水中葉は閉鎖花をつけて結実する。水上葉は5～8個が輪生し、羽根状に深く裂ける。水中葉は糸状に裂ける。

【選定理由】 県内各地に見られてもいい筈だが、つがる市の2地点だけで知られるのみである。しかも、生育環境が悪化し、個体の減少傾向にある。このままでは、絶滅へと急速に進むと判断し、ランクをBからAへと変更して見守ることにした。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本を含むアジア。日本分布は本州～沖縄。本県ではつがる市。

【生存に対する脅威と保存対策】 水湿地の水位が以前のように良好でなく、水没期間が長くなっているようで、当該種の姿が少なくなっている。生育に適した水管理が必要である。

【特記事項】 本県が北限の植物。（木村啓）

被子植物シソ目 オオバコ科

A

和名 ヒシモドキ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Trapella sinensis* Oliv.

【形態的特徴】 池や沼に生える多年生の水草。茎は細長く水中を伸び、節から根や葉を出す。水中葉と水上葉を持つ。細井（2010）は「日本水生植物図鑑」（大滝・石戸, 1980）22頁に線画があると紹介している。

【選定理由】 2012年8月、青森県学校教育センターが同センターの奈良岡隆樹指導主事が津軽地方の池で発見したと発表した。そのことからランクEXからAに変更した。

【分布と生態の概要】 北限種。本州（青森県・秋田県・宮城県・山形県他）・九州、朝鮮・中国に分布する。

【特記事項】 細井（2010）は「県内では栃木県の古瀬義（フルセ ヨシミ）がつがる市（旧木造町）武田の田光沼（タツピヌマ）で採集した標本を国立科学博物館主催の第20回おしば展（1956）に出品した。長尾（1978）は花期が7～9月として記録している。「秋田県植物分布図2000」では、八郎潟の南の潟上市（旧昭和町）付近に1か所記録されている」と記している。（齋藤信夫）

被子植物シソ目 オオバコ科

A

和名 クワガタソウ

環境省：該当なし

学名 *Veronica miqueliana* Nakai

【形態的特徴】 明るく湿った林縁や林床に生える多年草。短い地下茎から数本の茎が直立あるいは斜上し、高さは10～20cm。茎に曲がった毛が散生する。葉は卵型で対生し、長さ1～5cm、幅0.7～2.5cm。茎上部の葉腋から花序をだし花をつける。花は淡紅色で紅紫色の条がある。花期は5～6月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 東北地方から関東地方・中部地方の太平洋側や紀伊半島に分布する。県内では八戸市南郷区の市民の森に産する。日本の固有種。

【生存に対する脅威と保存対策】 採取を防止する。（齋藤信夫）

被子植物シソ目 ゴマノハグサ科

A

和名 ヒナノウスツボ

環境省：該当なし

学名 *Scrophularia duplicatoserrata* (Miq.) Makino

【形態的特徴】 山地の谷間に生える多年草。茎の高さは40～100cm、4稜がある。葉は膜質で柔らかい、鋸歯は粗くやや重鋸歯。円錐花序は花柄がやや長く、まばらに多くの花をつける。花冠は暗赤紫色。雌しべ先熟。花期6～8月。

【選定理由】 希産種で個体数は少ない。生育地の新井田川流域は北上山地の北端部に相当し、たかの巢溪流と呼ばれる景勝地であったが、1950年代に溪流沿いに道路が開通してからは採石場が林立するようになり、道路工事で生育地が失われた所もあり、採石場の拡張で消滅の恐れがある。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州に分布する。県内では太平洋側南部の八戸市の新井田川流域に希産する。北限である。溪流沿いの林縁のやや湿った場所に生育する。付近には北限種のハナビゼリもみられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市南郷区巻ノ下で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物シソ目 シソ科

A

和名 カイジンドウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Ajuga ciliata* Bunge var. *villosior* A.Gray ex Nakai

[形態的特徴] 林縁や明るい林内に生える多年草。全体に白い毛がある。茎は直立して高さ30～40cm、下部は帯紫色。葉は狭卵形で、しばしば帯赤紫色、あらい鈍鋸歯がある。花は紫色で上部に集まってつく。花冠の上唇は2裂してごく短い。花期6～7月。

[選定理由] もともと個体数の少ない種であったが、生育地である落葉広葉樹林の減少、開発および外来種との競合などにより産地・個体数が激減している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・九州に分布する。日本固有。県内では太平洋側に希産する。やや乾いた落葉広葉樹林内や林縁に生育する。個体数が少なく目立たない植物であるが、落葉広葉樹林の伐採跡地に出現することもあるので注意したい。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)
(須藤智道)

被子植物シソ目 シソ科

A

和名 ルリハッカ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Amethystea caerulea* L.

[形態的特徴] 日当たりの良い草地や林床に生える1年草。茎は四角形で高さ40～80cm、上部は分岐する。葉には長さ1～2cmの葉柄があり、葉身は普通3全裂するが、下部の大きな葉では5全裂することもある。花冠はルリ色で小さな花が多数つく。花期は9～10月である。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 国内では北海道・本州・四国・九州、国外では朝鮮・中国・トルコに分布する。細井(2010)は「県内では八戸市南郷区に産することが1999年に確認されたが、その後ダム建設(青葉湖)により生育地は水没した。乾いた裸地状の環境に最大90cmの株を含めて数株生育していた。全国的にも産地がまれな種類で、岩手県に割合産地が多く、南郷区も隣接しているので再確認を期待する」と記している。

[生存に対する脅威と保存対策] 園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

(齋藤信夫)

被子植物シソ目 シソ科

A

和名 ムシャリンドウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Dracocephalum argunense* Fisch. ex Link

[形態的特徴] 草丈15～40cmの多年草。茎は直立し四角形で葉は対生。葉は細長く2～5cm、幅2～5mm、葉質はやや厚く表面は光っている。花は大きく茎の頂に数個つけ、青紫色で唇形をしている。一見、リンドウ科のリンドウの花を思わせる。

[選定理由] 自生場所である向陽原野が殆どなくなり、絶滅が心配される。深浦町の自生株を追跡調査しているが、増加することはない、減少傾向にある。県内の他地区の自生地でも同じ傾向となっている。

[分布と生態の概要] 世界的分布は、日本・朝鮮・中国東北部・東シベリアである。日本では北海道～本州中部まで見られる。生育場所は、日当たりのよい原野なので、原野の減少に比例して当該種の姿も少なくなっている。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育環境である向陽原野が年々少なくなっている。加えて、採取の痕跡も見られる。生育地の保存と当該種の管理も必要と思われる。

[特記事項] 深浦町では、当該種の自生原野を守るために、火入れや刈り払いを行って経過観察をした。
(木村啓)

被子植物シソ目 シソ科

A

和名 ヒメハッカ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Mentha japonica* (Miq.) Makino

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。細長い地下茎がある。茎は直立し高さ20～40cm。節に短い軟毛があるほかは全体はほとんど無毛。葉は卵状長楕円形で長さ1～2cm、幅3～8mm、葉柄はほとんどない。花は枝先に集まって咲き、淡紅紫色または白色。ハッカと同じ芳香がある。花期は8～10月。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 細井（2010）は「北海道・本州（中部以北）の主に太平洋側に分布し、県内では東通村の湿地で確認したがその後の記録はない。東通村にあった小群生地は道路整備で失われた」と記している。

[生存に対する脅威と保存対策] 湿地の乾燥化や開発に注意が必要。

(齋藤信夫)

被子植物シソ目 シソ科

A

和名 エゾナミキソウ

環境省：該当なし

学名 *Scutellaria yezoensis* Kudo

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。茎は高さ30～60cm、4稜があり、稜上にちぢれ毛がある。葉は長卵形～長楕円状披針形、先はややとがる。花は淡青紫色。花期7～8月。類似種ナミキソウは海岸の砂地や草地に生え、全体やや小さく、葉は長楕円形で先は丸い。

[選定理由] 六ヶ所・東通原子力関連開発等で生育地の湿原が次第に失われている。残された所も開発や植生遷移の進行等により危険が増大している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・長野・岐阜）、朝鮮・千島・サハリンに分布する。県内では海岸部の湿原から湖沼周辺・河岸等の湿地にみられる。太平洋側に産地が多い。陽性の湿地に生えるがハンノキ林内にも生育する。溜池周辺や水路脇に見出されることもあり、これまで開田により失われた所も多いと考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で六ヶ所村鷹架沼・三沢市仏沼で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物シソ目 シソ科

A

和名 イヌニガクサ

環境省：絶滅危惧 I A類

学名 *Teucrium veronicoides* Maxim. var. *brachytrichum* Ohwi

[形態的特徴] 母種のエゾニガクサに似ているが、開出毛が短くて少なく、葉の鋸歯が粗大である（細井, 2010）。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 本州（東北地方）に分布する。県内では青森市合子沢（木村悦子, July 26, 1998）・八戸市尻内町張田（細井幸兵衛, July 28, 2000）で採集されている（細井, 2010）。

[生存に対する脅威と保存対策] 園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

(齋藤信夫)

被子植物シソ目 タヌキモ科

A

和名 ミミカキグサ

環境省：該当なし

学名 *Utricularia bifida* L.

【形態的特徴】 水位の変化がある溜池などの縁に見られる多年生の食虫植物。浅い地中に白色で糸状の地下茎を伸ばし、補虫囊をつける。7～9月にかけて、高さ10cmほどの花茎を伸ばし、先端に黄色い花を数個つける。花は唇形で、基部には真下に向けた距がある。

【選定理由】 水位変化のある浅い溜池が少なくなり、つがる市平滝沼など、ごく一部の溜池でしか生育が確認されていない。生育しているどの溜池も生育環境が悪化し、絶滅が心配される。

【分布と生態の概要】 津軽植物の会では、長年に渡って県内各地に足を運び分布調査をしているが、新しい生育地を確認していない。また、分布情報も無い。

【生存に対する脅威と保存対策】 つがる市平滝沼では、生育溜池への進入が容易で、車両や人々の踏跡が常時見られ、当該種や多くの貴重な湿生植物が踏み付けられている。このままの状態が続くと、間もなく絶滅してしまうと思われる。進入禁止の保護対策が必要である。

【特記事項】 本県が北限の植物。

(木村啓)

被子植物シソ目 タヌキモ科

A

和名 フサタヌキモ

環境省：絶滅危惧 I B類

学名 *Utricularia dimorphantha* Makino

【形態的特徴】 水中に浮遊する。植物体の一部が泥に埋もれたとしても地中葉を分化することはない。水中葉は毛のような裂片に細かく分裂する。水中葉の裂片の先には2～3本の刺があるが、縁にはない。捕虫のうは小さく、少ない。花軸の基部や軸のところどころに閉鎖花をつける。花期は7～8月。

【選定理由】 2016年12月14日、弘前市みどりの協会臨時職員渡辺宏巳氏が弘前市のため池で同年7月に発見したことを発表した。そのことからランクEXからAに変更した。

【分布と生態の概要】 日本特産である。上記の発表を報じた2016年12月15日の東奥日報では、同定をされた神戸大学の角野康郎教授のコメントとして「フサタヌキモは全国的に生息が厳しく危機的水準にある。青森県は北限の自生地として特に興味のある地域となるので守り続けてほしい」との談話を掲載している。細井(2010)はかつて「小宮(1995)は全国の詳細な分布を調べたが、現存しているのは2～3か所であると述べている。角野(1994)も分布図を出しているが、いずれも本県は抜けている」と記載していたことなどから、貴重な発見といえる。

【特記事項】 細井(2010)は「杉本(1965)は「…本州(青森～近畿)池沼…」と青森県を記録しているが県内のどこかは分からない。標本の所在も確認できない。鈴木(1978)は「同定自信なし」と断っているが、「草秀寺の池で採集した植物の立派な線画を残し、貴重な記録である」と記している。

(齋藤信夫)

被子植物シソ目 タヌキモ科

A

和名 オオタヌキモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Utricularia macrorhiza* Le Conte

【形態的特徴】 浅い池沼などに生え、根がなく浮遊水生をする多年生の食虫植物。長さは1m以上にもなる。水中葉の裂片は基部で大小2つに分かれる。捕虫囊は中型～大型で多数。長さ10～40cmの花茎を伸ばし黄色の花を多数つける。距は下唇よりも長く、先がやや上を向いて尖る。花期は7～9月。

【選定理由】 生育地である池沼の減少、水質の悪化などにより減少している。

【分布と生態の概要】 国内では北海道・本州(青森・秋田)、国外ではサハリン・アムール・シベリア・カムチャツカ・モンゴル・中国(北部)・北アメリカ(中部以北)に分布する。細井(2010)によると、県内では小宮ら(2001)はつがる市(旧木造町)の9か所の標本を記録した。また、細井の標本には東北町向山の小川原湖(July 25, 1992花あり)とつがる市(旧森田村)(Aug 7, 1990花なし)の2点が含まれているという。石戸谷(2017, 私信)はつがる市と東通村で確認している。

【生存に対する脅威と保存対策】 分布は水深や水質に左右され、自然遷移や乾燥化、水質悪化などへの対策が必要である。

(齋藤信夫)

被子植物シソ目 タヌキモ科

A

和名 ヤチコタヌキモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Utricularia ochroleuca* R. Hartm.

【形態的特徴】 浅い池沼などに生え、根がなく浮遊水生をする多年生の食虫植物。コタヌキモに似ているが水中茎の葉が捕虫囊を持つことや、葉裂片の先端が鋭頭であることで区別できるとされる。水中葉には1～2個の捕虫囊をつける。葉の全体形は扇型。黄色の花をつける。花茎の長さは5～15cm。花期は6月～9月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 国内では北海道・本州に、国外では朝鮮・千島・北半球北部に分布する。県内では八甲田山の湿原に産する。石戸谷（2017, 私信）は青森市で確認している。

【生存に対する脅威と保存対策】 分布は水深や水質に左右され、自然遷移や乾燥化、水質悪化などへの対策が必要である。
(齋藤信夫)

被子植物キク目 キキョウ科

A

和名 モイワシャジン

環境省：該当なし

学名 *Adenophora pereskiiifolia* (Fisch. ex Roem. et Schult.) Fisch. ex Loudon

【形態的特徴】 山地の岩場に生える多年草。茎は高さ30～60cm。根生葉は卵心形で長柄がある。茎葉は互生から輪生、長さ2～8cm、披針形から卵形。花は総状花序につき、花冠は鐘形、青紫色から白色、花盤は高さよりも幅が広いが同長。花期7～9月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。減少傾向にあり、採取の防止等が必要である。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森・岩手・宮城）に分布する。日本固有。県内では下北半島と白神山地に産する。山地から高山の岩場に生育し変異が多い。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村尻屋で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キク目 キキョウ科

A

和名 バアソブ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Codonopsis ussuriensis* (Rupr. et Maxim.) Hemsl.

【形態的特徴】 林縁などに生えるつる性の多年草。ツルニンジン（ジイソブ）に似ているが全体小型で、葉裏に毛が多い。花冠は鐘形で長さ2～2.5cm（ツルニンジンは2.5～3.5cm）。花期8～9月。種子は黒褐色で翼がない（ツルニンジンは淡褐色で翼がある）。

【選定理由】 産地・個体数がきわめて少ない。もともとまれな種であったが、森林伐採・開発等により最近見掛けなくなっている。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、中国（東北部）・ウスリー・アムールに分布する。県内ではごくまれで、分布状況は明確でない。ツルニンジンによく似ているので見過ごされることもある。林縁や林内に生息するが、落葉広葉樹林の伐採跡に出現することもあるので注意したい。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で鶴田町富士見湖で生息が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キク目 キク科

A

和名 ヒメガンクビソウ

環境省：該当なし

学名 *Carpesium rosulatum* Miq.

【形態的特徴】 やや乾いた山林内に生える多年草。茎は細く高さ15～45cm、軟毛を密生し、上部で枝を分ける。枝先に5mmほどの頭花を1個ずつ点頭する。根出葉は花時にも存在し、葉縁に不揃いな波状の鋸歯がある。茎葉はまばらである。

【選定理由】 希産種で個体数も少ない。

【分布と生態の概要】 国内では本州・四国・九州、国外では朝鮮半島の済州島に分布する。細井(2010)は「県内では日本海側の低山地に希産し、深浦町十二湖のヒバ広葉樹混交林下・小泊村のヒバ林下・今別町のスギ人工林下などに生育が確認されている」と述べている。

【生存に対する脅威と保存対策】 開発等による減少の危険性がある。(齋藤信夫)

被子植物キク目 キク科

A

和名 ムカシヨモギ

環境省：該当なし

学名 *Erigeron acris* L. var. *kamtschaticus* (DC.) Herder

【形態的特徴】 山地の岩石地に生える多年草。茎は高さ30～60cm。葉は倒披針形～長披針形。緩い散房状～円錐状の花序で多数の頭花をつける。花には尾花と雌花があるが、雌花には舌状花と筒状花の二形が見られる。頭花は白色で径約1.5cm。総苞片に粉状の細毛がある(よく似たエゾムカシヨモギの総苞片には剛毛がある)。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 国内では北海道・本州(中部以北)、国外では朝鮮・千島・サハリン・カムチャッカ・アラスカに分布する。細井(2010)によると「県内では青森市東岳で豊田剛により採集されている。古くは村井(1936)の記録がある」という。

【生存に対する脅威と保存対策】 開発等による減少の危険性がある。(齋藤信夫)

被子植物キク目 キク科

A

和名 アキノハハコグサ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Pseudognaphalium hypoleucum* (DC.) Hilliard et B.L.Burt

【形態的特徴】 山野のやや乾いた所に生える1年草。茎は高さ30～60cm、上部で分枝し、白い綿毛がある。葉は披針形、表面緑色で裏は白綿毛が密にある。花は散房状につき、頭花は黄色、外片は短い。花期9～10月。

【選定理由】 産地・個体数がきわめて少ない。環境変化により生育適地が失われてきている。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、朝鮮・中国・東南アジア・インドに分布する。県内ではまれに産するが、分布状況は明らかでない。八戸市で2004年に道路新設と既設道路の遊歩道化に伴って7km隔てて複数の場所で出現している。いずれも攪乱地の境界付近で、在来の植物が残っていてすぐには外来種1年草の進入しにくい場所である。先駆植物で2～3年で消息不明となることが多い。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用) (須藤智道)

被子植物キク目 キク科

A

和名 ナガバキタアザミ

環境省：該当なし

学名 *Saussurea riederii* Herder subsp. *yezoensis* (Maxim.) Kitam.

【形態的特徴】 高さ15～40cmの多年草。葉は3角状卵形で質がやや厚く、茎の上部でも小さくならない。総苞片の先は尾状に伸びる。

【選定理由】 産地が限られ個体数は少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州(青森・岩手)に分布する。細井(2010)は「県内では東通村尻屋に産する(細井, 1994)。生育地は石灰岩の崩壊斜面草地である(一般には亜高山帯から高山帯に生える)」と記している。

【生存に対する脅威と保存対策】 岩石の崩落など自然災害による危険性がある。

【特記事項】 細井(2010)は「本州では古くから早池峰山にのみ分布していることが知られていた」と記している。(齋藤信夫)

被子植物キク目 キク科

A

和名 エゾトウヒレン

環境省：該当なし

学名 *Saussurea riederii* Herder subsp. *yezoensis* (Maxim.) Kitam. var. *elongata* Kitam.

〔形態的特徴〕 海岸の草地に生える多年草。高さ30cm内外。ナガバキタアザミに似ているが、総苞片は尾状に伸びず鋭頭である。

〔選定理由〕 産地が限られ個体数が少ない。

〔分布と生態の概要〕 北海道・本州（青森）に分布する。細井（2010）は「県内では下北半島の大間町の海岸近くに1か所の産地がある。ここでは北海道産よりも小形であり、今のところ南限産地である」と記している。

〔特記事項〕 細井（2010）は「Flora of Japan III b (Iwatsuki *et al.* 1994) ではカラフトアザミ *S. acuminata* Trucz. subsp. *sachalinensis* (F. Schmidt) Kitam. にあてられている」と記している。（齋藤信夫）

被子植物マツムシソウ目 レンブクソウ科

A

和名 ハゴロモニワトコ

環境省：該当なし

学名 *Sambucus racemosa* L. subsp. *kamtschatica* (E. Wolf) Hultén f. *lacera* (Nakai) H. Hara

〔形態的特徴〕 日当たりの良い場所に生える落葉低木。母種のエゾニワトコは奇数羽状複葉であるが、当該種は羽状となっている各小葉が更に深裂して、羽衣状となっている。

〔選定理由〕 2011年9月23日、つがる市屏風山地区で発見された。エゾニワトコの品種で葉身が羽衣状に深裂している。分布の記録は北海道だけなので、県内初記録種となる。発見以来、7年間に渡って県内全域調査と県外情報収集を行っているが、実物確認も分布情報も無い。本州唯一の産地でもある。

〔分布と生態の概要〕 世界的分布は日本だけで、日本分布は北海道と本県。本県の分布はつがる市屏風山の1地点である。

〔生存に対する脅威と保存対策〕 屏風山のカシワやエゾニワトコやハリギリやヤマウルシを中心とした林中に自生している。この屏風山林は定期的に伐採されるという情報があるので、地元の管理者に頼んで保護管理をしてもらっている。

〔特記事項〕 別和名はハゴロモエゾニワトコ。本県が南限の植物。（木村啓）

被子植物マツムシソウ目 スイカズラ科

A

和名 エゾヒョウタンボク

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lonicera alpigena* L. subsp. *glehnii* (Fr. Schm.) H. Hara

〔形態的特徴〕 山地に生える落葉低木。高さ2～3m。若い枝は茶褐色で4稜がある。葉は長さ5～14cm、卵形から卵状長楕円形、先は鋭くとがり、表裏面に毛や腺毛がある。葉腋から3～5.5cmの花柄を伸ばし、淡黄緑色または赤紫色を帯びた花を2個つける。花期5～6月。果実は液果で赤熟し、2個合着する。

〔選定理由〕 目立たないが分布の限られたきわめて珍しい植物である。風穴という特殊環境に生育し、周辺的环境変化に敏感であることから、生育地周辺の植生の保全が必要である。

〔分布と生態の概要〕 北海道・本州（中部以北）、南千島・サハリンに分布する。県内では黒石市黒森山に産し、白神岳、釜臥山にも報告がある。山地の岩塊の堆積した風穴周辺に生育する。近年、下北半島でも確認された。

〔生存に対する脅威と保存対策〕 園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

（齋藤信夫）

被子植物マツムシソウ目 スイカズラ科

A

和名 ケヨノミ

環境省：該当なし

学名 *Lonicera caerulea* L. subsp. *edulis* (Regel) Hultén

【形態的特徴】 亜高山帯に生える落葉低木。高さ1 m内外。毛が多いものから少ないものまで変異があり、毛のきわめてすくないものをクロミノウグイスカグラとして区別することもある。葉は長さ2.5～6 cm、楕円形で鈍頭。花は葉腋に2個ずつ下向きにつき、黄白色。花冠は5裂し、長さ11～13 mm。花期は5～6月。果実は液果で黒紫色に熟す。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。生育地が登山道近くで立入り等により植生が変わると消滅の危険性がある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、北半球に分布する。県内では新郷村戸来岳に希産する。上部のミヤマヤナギ・マルバシモツケ・チシマザサなどの低木林中に生息する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で新郷村戸来岳で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物マツムシソウ目 スイカズラ科

A

和名 ベニバナヒョウタンボク

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lonicera sachalinensis* (F.Schmidt) Nakai

【形態的特徴】 亜高山帯に生える落葉低木。その名のように紅色の花を咲かせるヒョウタンボクの一類である。樹高は2～3 m、枝は鈍4角形で無毛、中実である。葉は卵形～長楕円形で先端がとがり、対生、長さ3～7.5 cm、幅1.5～4 cm、葉縁と裏面にやや長い毛が散生する。枝先の葉腋に長さ3～5 mmの葉柄を伸ばし、先端に2花をつける。果実は球形で半ば以上合着し、8～9月に赤熟する。花期は6～7月。

【選定理由】 希産種で個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 国内では北海道・本州（青森）、国外では南千島・サハリンに分布する。県内では八甲田山群の一部に希産する。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

【特記事項】 細井（2010）は「北海道では高さが2～3 mになるが、本県では1 m以下である。山形県西置賜郡高島町小湯山（コヨウザン）で大高滋・山田實爾の両氏によって発見されたウゼンベニバナヒョウタンボク *Luzenensis* Kadotaとの関係について検討を要する」と記している。

(齋藤信夫)

被子植物マツムシソウ目 スイカズラ科

A

和名 マツムシソウ

環境省：該当なし

学名 *Scabiosa japonica* Miq.

【形態的特徴】 山地の草原に生える越年草。茎は高さ60～90 cmで直立し分枝する。葉は対生し有毛、中部や下部の葉は羽裂する。裂片の先は鈍頭。花は長い花柄の先につき、淡青紫色。多くの花が集まった頭状花序で、直径4 cm前後。中心部の花は筒状、周辺部の花の花冠の先端は5つに分かれる。花期は8～10月。

【選定理由】 産地が少なく開発等により激減している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州に分布する日本の固有種。細井（2010）は「県内では三沢市に産する。その生育地は現在三沢米軍基地となっている。津軽半島竜飛崎の風衝地にはエゾマツムシソウが知られているが、これも減少傾向にある」と述べている。

【特記事項】 裂片の先が鋭くとがるものをエゾマツムシソウ（トウマツムシソウ）という（細井, 2010）。

(齋藤信夫)

大葉シダ植物サンショウモ目 デンジソウ科

B

和名 デンジソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Marsilea quadrifolia* L.

【形態的特徴】 冬には地上部が枯れてしまう夏緑性で多年性のシダ植物。細い根茎から下ろした根を泥の中にはると共に、根茎から長さ5～30cmほど伸びた葉柄の先に四つ葉のクローバーを小さくしたような葉をつける。葉は水面上に出ることが多いが、水中にも展開する。果柄の一部が葉柄と合着する。夏から秋にかけて、葉柄の基部から胞子をつける器管が出る。

【選定理由】 県内では水田やため池などに生育していたが、農薬が多量に使用されるようになってから急激に減少し、現在では生育の確認が難しくなっている。

【分布と生態の概要】 国内では北海道・本州・四国・九州・沖縄、国外では東アジア・インド（北部）・ヨーロッパに分布する。
(齋藤信夫)

大葉シダ植物サンショウモ目 サンショウモ科

B

和名 サンショウモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Salvinia natans* (L.) All.

【形態的特徴】 水生の1年草で水面に浮かぶ。葉は3輪生するが、2枚は浮かび1枚は沈んでいる。浮葉は楕円形で表面に突起や毛があり、沈葉は細長く細かく裂けている。この沈葉は根のように見えるが、真の根は無い。秋に沈葉の基部に球形の胞子嚢をつける。

【選定理由】 50年ほど前までは、県内各地の沼や田圃の水路などに普通に見られたが、現在は殆どみることが出来ない。見られても、個体が少なく絶滅が心配される。

【分布と生態の概要】 世界的分布はアジア・ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ。日本分布は本州・四国・九州。県内分布は西郡・北郡。南郡・東郡・三戸郡の記録があるが、現時点では黒石市・つがる市だけの確認である。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育場となっている沼や水路が整備されたり無くなったり、農薬の影響などで、生育環境が悪化してしまっている。この環境変化が消滅の原因と考えられる。少ない個体を維持し、増加させるためには、生育地全体の水環境を健全なものにする必要がある。

【特記事項】 本県が北限の植物。
(木村啓)

大葉シダ植物ウラボシ目 イノモトソウ科

B

和名 リシリシノブ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Cryptogramma crispera* (L.) R.Br. ex Richards. subsp. *acrostichoides* (R.Br. ex Richards.) Hultén

【形態的特徴】 根茎は短く、株をつくり、葉は叢生する落葉多年草。葉長は20cmほど、栄養葉よりも胞子葉が2倍近くも長い。葉身は2～3回羽状に分裂して細く長楕円形。胞子嚢群は裂片の縁につく。胞子嚢の形状は長楕円形である。

【選定理由】 白神山地と津軽半島の1地点だけに確認されている。株数の増加は無い。県内各地の類似環境地を調査しているが確認することが出来なかった。植物研究者からの分布情報も無い。

【分布と生態の概要】 日本を含む世界的分布はアジアの温帯・北アメリカ・ヨーロッパの高山帯。日本分布は北海道・本州中部以北。県内分布は向白神岳と津軽半島三厩地区。

【生存に対する脅威と保存対策】 人が近づくことが困難な岩場に生育するので、人為的な消滅の心配は少ない。しかし、生育地点の崩落が考えられるので、定期的な確認調査が必要である。

【特記事項】 県内分布は向白神岳も津軽半島三厩地区の現場も、容易に辿りつける場所ではなく、危険を伴うので、要注意である。
(木村啓)

大葉シダ植物ウラボシ目 チャセンシダ科

B

和名 イチョウシダ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Asplenium ruta-muraria* L.

【形態的特徴】 石灰岩地の岩隙に生える小型の常緑性シダ植物。葉は1～2回羽状に分岐し、側羽片は倒卵形から楕円形で、イチョウの葉を小さくしたような形から銀杏（いちょう）シダと名付けられた。

【選定理由】 石灰岩地にしか生育しないので、生育地が限られ個体数も少ない。石灰岩の採掘により生育地が次第に失われている。また、他県では小型で葉のおもしろい形が好まれて、園芸採取され絶滅した産地もある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、ロシア・朝鮮・中国・中央アジア・台湾・南アジア・南西アジア・ヨーロッパ・北米（東部）と北半球に広く分布する。県内では東通村桑畑山・階上町金山沢の石灰岩地に希産する。
(須藤智道)

大葉シダ植物ウラボシ目 ウラボシ科

B

和名 オオエゾデンダ

環境省：絶滅危惧 I B類

学名 *Polypodium vulgare* L.

【形態的特徴】 岩上などに着生する常緑性シダ植物。根茎は灰色、鱗片は卵状披針形で淡褐色。葉身は三角状長楕円形で、羽状に全裂する。孢子囊群は円形で裂片の中肋と縁辺の中間からやや中肋寄りにつく。

【選定理由】 開発・環境変化により減少している。八戸市では道路工事で消滅したところもある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・（青森・秋田・鳥取・島根隠岐）、ロシア・朝鮮・中国・ヨーロッパに分布する。北欧では路傍にも生える普通種とされているが、日本では産地が限られ個体数も少ない。県内では東通村桑畑山と八戸市鮫町の海岸部に点在する。
(須藤智道)

裸子植物ヒノキ目 ヒノキ科

B

和名 ネズミサシ

環境省：該当なし

学名 *Juniperus rigida* Sieb. et Zucc.

【形態的特徴】 葉は鋭い針葉のみからなり3輪生する。常緑の大低木～小高木、雌雄異株。

【選定理由】 本県では分布のまれな針葉樹である。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、朝鮮北部に分布する。県内では下北半島大間町屏風立岩・むつ市（旧大畑町）燧岳・深浦町見入山観音・鱒ヶ沢町然ヶ岳に産し北限である。丘陵地や山地の尾根や岩場に生える。いずれも強い日照を受けている立地である。本県では大きくなれず、2m以下である（細井, 2010）。

【生存に対する脅威と保存対策】 開発および自然災害などによる生育地の攪乱の危険性がある。

(齋藤信夫)

被子植物コショウ目 ドクダミ科

B

和名 ハンゲショウ

環境省：該当なし

学名 *Saururus chinensis* (Lour.) Baill.

【形態的特徴】 草丈50～100cmの多年草。葉には柄があり互生し、長卵形で先端が尖り、基部が頭耳状心形。葉表面は淡緑色で滑らかで5本の葉脈が目立っている。初夏には葉の表面が白くなり、白面に向き合って穂状の白色小花を多数咲かせる。根茎は白色で泥の中を横に延びている。

【選定理由】 県内分布地点は少なく個体数も限られている。加えて、生育地の環境悪化も認められ、急速に絶滅へ進むことが予想される。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・朝鮮半島・中国・フィリピン。日本分布は本州・四国・九州・沖縄。本県分布は、つがる市森田・つがる市車力・小川原湖など。低湿地を生育地としている。

【生存に対する脅威と保存対策】 本来、群生状態で生育しているものであるが、数株のみの生育である。この要因は、生育地の湿潤地帯が畑地拡張などで狭められているためと思われる。生育している湿潤地帯の確保と個体保護の対策が望まれる。

【特記事項】 本県が北限の植物。

(木村啓)

被子植物オモダカ目 サトイモ科

B

和名 ヒメカイウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Calla palustris* L.

【形態的特徴】 水辺に生える多年草。根茎は太くて長く這う。葉身は心形、長さ幅ともに7～14cm。葉柄は10～25cm。花序は長さ1.5～3cm。仏炎苞は長さ4～6cm、白色で、果時に緑色となり残る。花期6～7月。液果は赤く熟す。

【選定理由】 分布が限られ、個体数も少ない。低地の生育地は開発が進んで消滅する危険性がある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、北半球に広く分布する。県内ではむつ市宇曾利山湖・東通村に産する。山地の湖岸および湿原の流れのほとりに生育する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査でむつ市宇曾利山湖・東通村小田野沢で生育が確認できたが、小田野沢では乾燥化が進んでいる。
(須藤智道)

被子植物オモダカ目 オモダカ科

B

和名 マルバオモダカ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Caldesia parnassifolia* (Bassi. ex L.) Parl.

【形態的特徴】 水中に生える1年草。葉は根生し葉柄がある。葉柄の長さは生育している水深により異なり、長いものでは70cmにもなる。葉形は腎臓形が普通であるが、初期の浮葉は卵形になっている。夏には長さ80cmほどの花茎を水上に伸ばし、枝を3個ずつ輪生する円錐花序をつくる。各枝は3～5個ずつ花を輪生する。花は両性で白色の花弁を3個つける。花弁は卵形で縁に微鋸歯がある。

【選定理由】 県内分布は、西津軽郡の屏風山地区の池沼に限られ、株数は減少傾向にある。生育している池沼が少なくなっている。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・中国・インド・オーストラリア・マダガスカル。日本分布は本州・四国・九州・奄美大島。本県の分布はつがる市屏風山の池沼7か所。水深のある池沼を生育地としている。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育している池沼の環境悪化が進み、個体の増加は見られない。生育池沼の保全対策が必要である。

【特記事項】 本県が北限の植物。

(木村啓)

被子植物オモダカ目 オモダカ科

B

和名 アギナシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Sagittaria aginashi* Makino

【形態的特徴】 水田や浅い池に生える草丈60cmほどの多年草。地下に走出枝をつくらず、秋に葉柄基部の内側に多数の小珠芽をつける。葉は根出し、長い柄があり、葉身は基部が2つに裂けた矢じり形で、上部は尖がり、下部の2つの裂片は尖らず丸まっている。

【選定理由】 酷似種のホソバオモダカは普通に見られるが、アギナシの分布地点は極めて限られていて、容易に対面することが出来ない。また、生育株が年々少なくなっている傾向にある。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・朝鮮半島。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布はつがる市屏風山の出来島2号溜池・下北郡東道村の荒沼。生育環境に極めて敏感な種類と思われる。

【生存に対する脅威と保存対策】 水田に生育していた個体は見られなくなってしまった。これは、農薬の影響と思われる。農薬の影響がない生育地を確保したい。

【特記事項】 同科同属で近似種のオモダカの品種であるホソバオモダカと酷似するので、見分けを慎重に行うことである。
(木村啓)

被子植物オモダカ目 トチカガミ科

B

和名 イトイバラモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Najas yezoensis* Miyabe

【形態的特徴】 湖沼やため池に生える沈水性の一年草。茎はよく分枝し長さ10～30cm。葉は輪生し、線形で長さ1.5～3.5cm、縁に細かい鋸歯がある。葉鞘の先はとがらない(類似種ホッスモの葉鞘の先は耳状に突き出る)。種子表面の模様は縦長短柵状になる。植物体は全体的に柔らかい。

【選定理由】 産地が限られ水質汚染等により減少している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州(青森・秋田・群馬)に分布する。県内では田茂木沼・鷹架沼・十和田湖他に産する(細井, 2010)。石戸谷(2017, 私信)はつがる市ガシャ沼で確認している。Shutohらはつがる市の他の沼でも確認している(Shutoh *et al.*, 2019)。また、須藤(2017, 私信)はむつ市で確認している。

【生存に対する脅威と保存対策】 生活廃水の流入や開発などによる水質汚染が生育を脅かしている。継続的なモニタリング調査が必要である (齋藤信夫)

被子植物オモダカ目 アマモ科

B

和名 コアマモ

環境省：該当なし

学名 *Zostera japonica* Asch. et Graebn.

【形態的特徴】 河口などの干潮時に露出することのある砂泥地に生える多年草。根茎は細くて横に這い、節から根と枝を出す。枝は葉だけを出すのと、葉と花序を出すのとがある。葉は糸状で、長さ10～40cm、幅1.5～2mmで、花序は長さ約2cmで、仏炎苞の葉鞘に包まれる。花期7～8月。

【選定理由】 産地が少なく、海岸開発・護岸工事および水質悪化などにより、生育地が失われる危険性がある。

【分布と生態の概要】 北海道から沖縄、東アジアの亜寒帯から熱帯に広く分布する。県内では日本海側は十三湖の前潟、太平洋側は尾駱沼・鷹架沼・高瀬川の河口部に産することが知られている。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)

今回の調査で六ヶ所村尾駱沼・鷹架沼で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物オモダカ目 ヒルムシロ科

B

和名 イトモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Potamogeton berchtoldii* Fieber

【形態的特徴】 池沼・水路などに生える沈水性の多年草。茎は細長くて分岐する。葉は線形、幅0.7～1.5mm、長さ2～6cm。花序は長さ4～5cm。花柄の長さ1～2.5cm、花穂は長さ3～5mm。花期7～8月。秋に枝の先端が1.5～2.5cmの殖芽となり、水底に沈んで越冬する(角野, 1994)。

【選定理由】 環境変化に応じて消長があり、生育場所の定まらない植物で、減少傾向にある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、全世界に広く分布する。県内では全域に産し、ため池・水路などの浅水で水流が緩やかな場所にみられる。開発や自然災害でできた水溜りにも出現する。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)

つがる市の沼で確認されている(Shutoh *et al.*, 2019)。今回の調査でむつ市田名部赤川、六ヶ所村尾駱沼・鷹架沼、八戸市長根で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物オモダカ目 ヒルムシロ科

B

和名 コバノヒルムシロ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Potamogeton cristatus* Regel et Maack

[形態的特徴] 湖沼・ため池・水路に生息する小型の浮葉植物。葉は長楕円形の浮葉と線形の沈水葉の2種類がある。浮葉は明るい黄緑色。ミズヒキモに似ているが、瘦果の背中側に突起があり、雌しべの花柱が長く突き出ていることで区別できる。花期は6～9月。

[選定理由] 希産種で水質汚染や開発により消滅の危険性がある。

[分布と生態の概要] 国内では本州から琉球列島まで、国外ではウスリー・中国・朝鮮に分布する。県内では青森市油川に産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育地の富栄養化の進行が急減の理由とされていることから、計画的・継続的な水質のチェックが必要である。

[特記事項] 細井（2010）は「大滝末男氏の同定による。青森・秋田県方面の湖沼の水草はまだまだよくわかっていない。コバノヒルムシロは裏日本に多いようなので、青森県にあっても不思議はない（大滝末男氏、私信）」と記している。
(齋藤信夫)

被子植物オモダカ目 ヒルムシロ科

B

和名 リュウノヒゲモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Potamogeton pectinatus* L.

[形態的特徴] 湖沼、ため池、河川などに生育する多年生の沈水植物。普通、淡水または川口の近くなどの淡水と海水が混ざり合う所に生えているが、内陸部に生育することもある。葉はすべて沈水葉だけで狭線形、長さ2～10cm、幅1/2～1mm、全縁で鋭頭である。花期は7～9月。

[選定理由] 開発や水質汚染等により減少している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国・九州、欧亜大陸・北米・アフリカ・オーストラリアに分布する。県内では太平洋側の湖沼と十和田湖の記録があるが、全県的な分布はまだはっきりしない。石戸谷（2017, 私信）は五所川原市明神沼で確認している。また、須藤（2018, 私信）は六ヶ所村や三沢市で確認している。

[生存に対する脅威と保存対策] 沈水であることから河川整備や清掃などで除去されやすい。また、土地造成・海岸開発などの様々な開発による生育地の攪乱が減少の原因となる。モニタリング調査が必要である。
(齋藤信夫)

被子植物オモダカ目 ヒルムシロ科

B

和名 イトクズモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Zannichellia palustris* L.

[形態的特徴] 沿海地の湖沼や塩湿地に分布する一年草または越年草。完全な沈水植物で水中で開花受粉結実する。花柄は伸びる。果実は三日月状で葉腋に直接付くのでミカヅキイトモの別名がある。

[選定理由] 開発によって激減している。

[分布と生態の概要] 国内では北海道から琉球列島まで、国外では南北両半球の冷温帯に分布する。細井（2010）は「県内では尾駮沼・鷹架沼及び五所川原市（旧市浦村）前潟（土屋和三 Aug 28, 1982 KYO.TI）である」と記している。須藤（2018, 私信）は六ヶ所村で確認している。

[生存に対する脅威と保存対策] 沿岸地の護岸整備や埋め立て、水質汚染などについての情報収集及びモニタリング調査体制の確立が必要である。
(齋藤信夫)

被子植物ユリ目 ユリ科

B

和名 ホソバナアマナ

環境省：該当なし

学名 *Lloydia triflora* (Ledeb.) Baker

【形態的特徴】 山地の草地や溪畔に生える多年草。根生葉と花茎は1個、高さ10～25cm。葉は幅1.5～3mm。花茎には1～3個の葉がつく。花は1～数個つき、花被片は6個で、長さ1～1.5cm、白色で緑条がある。花期5～6月。

【選定理由】 産地・個体数が少なく、開発などにより人知れず姿を消してしまう恐れがある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・千島・サハリン・カムチャツカ・北アメリカに分布する。県内では全域に産するが、ややまれである。花期でないで見逃してしまう目立たない植物である。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)

今回の調査で深浦町大間越・南部町名久井岳で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 コアニチドリ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Amitostigma kinoshitae* (Makino) Schltr.

【形態的特徴】 山地の湿った岩場や低地の湿原に生える多年草。小型で茎は高さ10～20cm。葉は茎の中ほどから下に1、2個つき、白色から紅色、唇弁の基部近くに紅紫色の斑紋がある。花後に茎頂に数個のむかごをつける。花期6～7月。

【選定理由】 産地・個体数が少なく、園芸採取・湿原開発等により減少している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州(中部以北)、南千島に分布する。積雪1m以上の地域に分布するとされている。県内では山地に点在し、低地の湿原にもまれに産する。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

(齋藤信夫)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 キンセイラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Calanthe nipponica* Makino

【形態的特徴】 エビネに似ている多年草。葉は3～5個つき、長さ15～30cm、幅1.5～3.5cm無毛。花茎は高さ30～60cmで子房と共に短毛がある。花は6～7月、まばらに5～12個つき、色は淡黄緑色である。

【選定理由】 最近、愛好家の乱獲により生育数が少なくなった。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・九州の山中にややまれに産す。県内ではヒバ林に生える。成田(2017, 私信)は大鰐町、深浦町で確認しており、生育場所の基本はヒバ林で、スギ植林地でも確認できるという。

【生存に対する脅威と保存対策】 森林の伐採や開発などによる環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

(齋藤信夫)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 ナツエビネ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Calanthe puberula* Lindl. var. *reflexa* (Maxim.) M.Hiroe

【形態的特徴】 草丈40cmほどの多年草。葉は3～5枚束生し、長さ10～30cm、幅3～6cmの狭長楕円形で先端は鋭く尖り、表面の横皺が多く目立つ。花茎は基部の葉腋から直立し、長さ30cmほどで、10～20個ほどの淡紫色の花を総状につけ、下から上へ順に咲いていく。

【選定理由】 県内分布域は限られており、生育個体も少ない。加えて、エビネ類の花色としては異国的なので、採取されることが多く、消滅してしまった生育地点もある。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・朝鮮の済州島・台湾・中国南部。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は黒石市中野もみじ山遊歩道・西津軽郡深浦町十二湖王池・津軽半島小泊・津軽半島蟹田。やや湿気のある落葉樹林下やヒバ林下に生える。

【生存に対する脅威と保存対策】 十二湖では群落で生育していたが、現在は殆ど見られなくなっている。これまで記録の無かった黒石市中野もみじ山で、津軽植物の会の観察調査会で確認した。

【特記事項】 北海道奥尻島でも記録されて北限が本県よりも北上した。

(木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 ユウシュンラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cephalanthera erecta* (Thunb.) Blume var. *subaphylla* (Miyabe et Kudo) Ohwi

【形態的特徴】 草丈10～30cmの多年草。ギンランの変種で、葉が退化して鱗片状になっている個体。もし葉があっても、小型で2cm以下となっている。また、花被片と花被片の間に少し隙間が見える。

【選定理由】 県内分布は、全域であるが確認地も確認株も極めて少ない。どの生育地点でも株数が少なく、増える傾向にはない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州・九州。本県分布は全域であるが、生育地点は極めて少ない。落葉樹林下の林道端や歩道に生育している。

【生存に対する脅威と保存対策】 黒石市の田代山林道で1株を確認したが、小さく弱々しかった。その後の追跡調査では確認できなかった。生育地を確認したら、詳細な位置の特定をして、追跡調査が出来るように、記録を残して置きたいものだ。生育地点が人為的に攪乱されたりすると、個体の消滅が考えられるので、進入禁止などの保存対策も必要である。

【特記事項】 和名は植物分類学者工藤祐舜に由来。

(木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 キンラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cephalanthera falcate* (Thunb.) Blume

【形態的特徴】 草丈20～40cmの多年草。葉は互生して5～8個をつける。葉の形は広い披針形で、長さ8～15cm、幅2～4cm、先端は鋭く尖がり基部は茎を抱いている。茎の先に金色の花を数個つけ、花は全開することはなく、半開きのままで終わる。

【選定理由】 つがる市や大鰐町での自生記録もあったが、現在は確認することは出来ない。今でも自生確認ができるのは深浦町の数地点だけである。しかし、見られる個体数は限られている。また、生育地の植生遷移が進み、生育株が減少傾向にある。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・朝鮮半島・中国。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は深浦町岡町・深浦町十二湖・深浦町松神。丘陵や林下の比較的乾燥した場所に生育している。

【生存に対する脅威と保存対策】 当該種は同属のギンランやササバギンランに比べ、生育できる環境の幅が狭いようで、里山の荒廃に伴って姿を消している。昔ながらの、里山環境を維持することである。

【特記事項】 本県が北限の植物。

(木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 クゲヌマラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cephalanthera longifolia* (L.) Fritsch

【形態的特徴】 海岸近くの林下に生える多年草。高さ10～40cm。全体的な姿はギンランに似ているが、もっとも違う点は、唇弁の距がほとんど突出しないことである。茎の先に長さ1cm程度の白色の花を数個つけ、平開することはない。花期6月。

【選定理由】 海岸クロマツ砂防林の普及に伴って産地も増えてきたが、植林も一段落し、今後はクロマツの老齢化により林床環境が変化して、生育に影響を及ぼす恐れがある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国の主として太平洋側に分布する。県内では太平洋側に多いが、日本海側にも産する。海岸のクロマツ林に生えることが多いが、落葉広葉樹林にもみられることもある。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

(齋藤信夫)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 コアツモリソウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Cypripedium debile* Reichb. f.

【形態的特徴】 草丈15cmほどの多年草。茎頂に光沢のある広卵形の葉を2枚対生し、葉の中心から花柄を伸ばし、垂れさがった1花を咲かせる。花は黄緑色をした袋状で、淡紫色をした何本もの縦筋が目立つ。根茎は短く横に這っている。

【選定理由】 県内分布は、西津軽郡・北津軽郡・南津軽郡・下北郡と広域に渡っているが、生育している個体数は少ない。更に、生育地の環境変化で株が消失してしまっている。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・中国。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は西津軽郡深浦町岩崎地区の白神山地・南津軽郡大鰐町早瀬野など。深山の落葉樹林下を生育場所としているが、環境変化に極めて敏感なようである。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育を確認して、数年後に訪ねると見当たらないことが多い。植生遷移による消失と思われる。個体の保存対策が必要である。

【特記事項】 同属のアツモリソウに比べ、著しく小型である。 (木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 クマガイソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cypripedium japonicum* Thunb.

【形態的特徴】 草丈20～40cmの多年草。根茎は地中を横に這い、節から少数の太い根を出す。地上茎は直立し先端部に扇子状の葉を対生させる。葉の中心から花柄を直立させ、先端に卵形状の1花をつける。茎は有毛で、葉には放射状の多数の脈があり、縦皺が目立っている。

【選定理由】 県内全域に渡って分布するが生育地点は限られている。花が美しく群落で生育しているので、採取による消滅が目立つ。また、生育地の環境変化で株が激減している。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・朝鮮半島・中国。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は全域に渡っているが生育地点は限られている。里山の落葉林下や杉林下に群落を形成する。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育地点が広く知られると、訪れる人が多くなり、踏み付けや採取などで個体減少が続く。生育地の保護対策が必要である。

【特記事項】 和名は鎌倉時代の武将熊谷直実が背負っていた母衣（ほろ）に由来している。同属のアツモリソウは平敦盛に由来する。 (木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 サワラン

環境省：該当なし

学名 *Eleorhis japonica* (A.Gray) F.Maek.

【形態的特徴】 草丈20～30cmの多年草。偽鱗茎は緑色で球形、ここから直立した花茎を出す。花茎の基部には少数の鞘状葉をつけ、その上方には線状披針形の葉を1枚つける。葉の基部は鞘となり花茎を包んでいる。先端には紅紫色で6花弁の花を1個つける。花は全開するととはなく、横向きになって紅紫色を強調している。

【選定理由】 山中のミズゴケ湿地に限ってみられるが、生育個体は年々減少傾向にある。これは、湿地が乾燥化へ向かっているためと思われるので、絶滅危惧指定にして追跡調査が必要である。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・千島列島南部。日本分布は北海道・本州中部以北。本県分布は全域に渡っているが生育地点は少ない。山地に形成されている良好なミズゴケ湿地に生育し、微妙な湿地環境の変化が生育状態を左右するようだ。

【生存に対する脅威と保存対策】 トキソウと同じ湿地に生えるが、トキソウに比べて個体数は断然少ない。湿地環境変化に、より敏感な種類だと思われる。湿地環境保全の諸対策をとりたい。

【特記事項】 白花個体の品種をシロバナサワラン（白花沢蘭）と呼ぶ。 (木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 ハマカキラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Epipactis papillosa* Franch. et Savat. var. *sayekiana* (Makino) T. Koyama et Y. Asai

【形態的特徴】 海岸のクロマツ林下に生える多年草。落葉広葉樹林に生えるエゾスズランの変種とされている。茎は高さ50～70cm。葉は卵状楕円形から広披針形。花は萼片が帯黄緑色、唇弁が白色から黄緑色である。エゾスズランは萼片・唇弁共に淡緑色である。花期7月。

【選定理由】 今後クロマツ林の林床変化による競合や間伐・更新等が影響し、減少に向かうと考えられる。

【分布と生態の概要】 本州（青森～愛知）の太平洋側に分布する。県内では太平洋側のクロマツ砂防林下にまれならず産し、津軽海峡東部海岸までみられる。クロマツ砂防植林の普及により北上してきた種である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で六ヶ所村尾駈で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 ミズトンボ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Habenaria sagittifera* Reichb. f.

【形態的特徴】 草丈30～50cmの多年草。茎は直立し縦に溝があり中部以下に2～3葉をつけ、上部には総状を出し10個ほどの花をつける。葉は線形で先端は次第に尖り、下部は長い葉鞘となる。花は緑白色で、唇弁はずば抜けて大きく十字形となり、距は長く垂れる。

【選定理由】 つがる市ベンセ湿原や三沢市仏沼などで、継続観察しているが個体数の増加はみられない。更に、生育環境が年々厳しくなって、個体減少の傾向にある。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・中国。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は西津軽郡・東津軽郡・上北郡・下北郡。日当たりのよい低湿地を生育地としている。

【生存に対する脅威と保存対策】 日当たりのよい湿地に生育しているが、このような湿地環境が減少している。個体保護ばかりでなく、生育環境全体の保全が必要である。

【特記事項】 本県産のミズトンボ属には当該種の他に、オオミズトンボ（別名サワトンボ）とヒメミズトンボ（別名オゼノサワトンボ）がある。

(木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 ガッサンチドリ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Platanthera takedae* Makino subsp. *uzenensis* (Ohwi) K. Inoue

【形態的特徴】 茎は直立し、高さ20～25cm、ミヤマチドリによく似ているが、萼片と唇弁の長さが3～4mmと短い。距は肉質で太い。花期は7～8月。

【選定理由】 本州ではきわめてまれである。

【分布と生態の概要】 細井（2010）は「日本特産で北海道から本州の日本海側高山を石川県の白山三峯までのブナ林下に希産する。県内では八甲田山で確認され、いずれも単生状できわめてまれである」と記している。成田（2017, 私信）によると最近の確認記録はないという。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

(齋藤信夫)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 トキソウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Pogonia japonica* Reichb. f.

【形態的特徴】 草丈10～30cmの多年草。根茎は横走して堅いので根のように見える。茎はその根茎から出て直立し、基部には膜質鱗片葉を中央部には線状長楕円形の葉を1枚、先端には紅紫色の花を1個つける。花は6弁から成り半開し、唇弁は円頭で内面に肉質突起を密生する。

【選定理由】 県内分布は、全域に渡り生育地点も多いが、個体の増加傾向にはない。生育地の環境悪化が進み、個体数は確実に減少している。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・朝鮮半島・中国。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は全域に渡っている。日当たりのよい湿地を生育地としている。

【生存に対する脅威と保存対策】 50年前までの群落が次第に見られなくなり、現在は点在株となっている。原因の1つは、湿地の乾燥化であるように思われる。湿地の保全が必要である。

【特記事項】 本県産で同属別種にヤマトキソウがある。トキソウが湿地に生えるのに対してヤマトキソウは日当たりのよい丘陵草地にみられる。
(木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科

B

和名 ウチョウラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Ponerorchis graminifolia* Rchb. f.

【形態的特徴】 山地の湿った岩場に生える多年草。小型で茎は高さ10～20cm。葉は茎の中段に3、4個つき、線形から広線形、長さ7～12cm。花は紅紫色まれに白色で、一方に傾いて数個つく。唇弁は3深裂し、濃紅紫色の斑紋がある。距は前の方に湾曲し、長さ1～1.5mm。花期6～8月。

【選定理由】 自生地では手の届く範囲はすべて盗掘され尽くし、上部にわずかに残るのみである。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、朝鮮に分布する。県内では白神山地や津軽半島の湿性岩壁にみられ、北限である。地域的な変異があり、山草として人気が高く、多くの園芸品種がつくられている。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。
(齋藤信夫)

被子植物キジカクシ目 アヤメ科

B

和名 カキツバタ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Iris laevigata* Fisch.

【形態的特徴】 水辺や湿地に生える多年草。茎は高さ40～70cm。葉は長さ40～70cm、幅2～3cm、中脈ははっきりしない（ノハナショウブの中脈は目立つ）。外花被片はたれ下がり、長さ5～7cm、中央から爪部は白色から淡黄色。内花被片は直立し、倒披針形、長さ6cm。花期5～6月。

【選定理由】 湿地開発・水質悪化・外来種キショウブとの競合などにより減少している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国（東北部）・シベリア（東部）に分布する。県内では全域に産する。池沼・水路などの水辺、湿原の水位の高い所に生え、ノハナショウブより生育地は限られている。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査でつがる市ベンセ湿原・東通村加藤沢沼・小田野沢南通・横浜町中吹越・三沢市新堂湿地・八戸市南部山で生育が確認できた。
(須藤智道)

被子植物イネ目 ガマ科

B

和名 エゾミクリ

環境省：該当なし

学名 *Sparganium emersum* Rehm.

【形態的特徴】 池沼・河川・水路などに生育する多年生の抽水・浮遊・沈水植物。タマミクリに似ているが雌花の花柱と柱頭の長さが3～4mmでタマミクリの倍近くある。雄性頭花はタマミクリが1～2個に対し4個以上付く。開花した雌性頭花は、針状の突起が密生したように見える。花期は7～9月。

【選定理由】 従来、タマミクリその他と混同されて分布状況がよく解っていなかった希産種である。

【分布と生態の概要】 国内では北海道・本州（中部以北）、国外では北半球の北極を取り巻いて広く分布する。県内では青森市・つがる市（旧木造町）・蔦温泉に分布する。石戸谷（2017, 私信）はつがる市ガシャ沼で確認している。Shutohらはつがる市の他の沼でも確認している（Shutoh *et al.*, 2019）。

【生存に対する脅威と保存対策】 生活廃水の流入や開発などによる水質汚染が生育を脅かしている。継続的なモニタリング調査が必要である。（齋藤信夫）

被子植物イネ目 ガマ科

B

和名 ヤマトミクリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Sparganium fallax* Graebn.

【形態的特徴】 池沼、ため池や河川などに生える多年性の抽水植物。地下茎により群生する。花茎は分岐せず直立する。雌雄同種。雄性頭花は上部に5～9個離れてつく。下部の雌性頭花は柄の全部または一部が主軸に合着する（腋上生）。雌性頭花と雄性頭花は1cm以上離れる。花期は5～9月。

【選定理由】 東北地方ではきわめて希で、県内ではフォーリー hachinohe 1913 (KYO) が唯一の記録であったが1994年七戸町（旧天間林村）坪川で確認した。80年ぶりである。北限種（細井, 2010）。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、アジア東部に分布する。

【生存に対する脅威と保存対策】 生活廃水の流入や開発などによる水質汚染が生育を脅かしている。継続的なモニタリング調査が必要である。（齋藤信夫）

被子植物イネ科 ガマ科

B

和名 タマミクリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Sparganium glomeratum* (Beurl. ex Laest.) L.M.Newman

【形態的特徴】 池沼や溝などの浅い水中に生える多年草。茎は高さ20～60cm、分枝しない。葉は幅6～12mm、茎より高く裏面に稜がある。雄性頭花は少数で茎頂に1、2個つく。雌性頭花は3～6個、上部で密につき腋生、下部では離れてつき、柄があり、柄の基部が茎に合着し腋上生。花期7～8月。

【選定理由】 開発・遷移進行・自然災害等による減少の危険性がある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、北半球に広く分布する。県内では全域に産し、低地から山地まで見られるが、ミクリより小型で、花が葉の蔭になり目立たないこともあって、確認地は少ない。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査でむつ市金谷沢・青森市田代平・八戸市大久保金吹沢・階上町赤保内で生育が確認できた。（須藤智道）

被子植物イネ目 ガマ科

B

和名 ヒメミクリ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Sparganium subglobosum* Morong

【形態的特徴】 池沼・ため池の周辺や湿原に生える多年草。茎は高さ30～60cm、枝は1、2本。葉は茎より高く、幅3～5mm、裏に稜がある。雄性頭花は茎の上部に2～7個まばらにつく。雌性頭花は下部に1～3個つき、柄はない。花期6～8月。

【選定理由】 最近では湿原開発・護岸工事および植生遷移の進行によりさらに減少している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州・沖縄、東アジア・インド・オーストラリア・ニュージーランドに分布する。県内では全域に点在する。かつての開田ブームとそれに続く牧野の放棄で湿原が減少し、生育地も次第に失われてきた。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)

今回の調査で東通村尻屋崎・加藤沢沼・むつ市一里小屋・三沢市仏沼で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物イネ目 ホシクサ科

B

和名 ネムロホシクサ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Eriocaulon atrum* Nakai

【形態的特徴】 湿地に生える無茎の1年草。葉は線形で長さ5～7cm、幅5～8mm。花が同じ黒藍色のクロイヌノヒゲに似ているが、種子の表面が無毛で、雌花内面に長毛がなく、縁に白短毛がないこと、葉の幅が広く3～5mmで、花茎が4稜であることで区別できる。

【選定理由】 希産種で個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 細井(2010)は「北海道根室を基準産地として発表され、特産と考えられていたが、太平洋岸を函館まで、本州では本県の下北郡、上北郡の低湿地、一部は日本海岸に至る」と記している。

【生存に対する脅威と保存対策】 海岸沿いの低湿地は本種に限らず希産種が多いので、開発に当たって特に留意すること。

【特記事項】 ホシクサ属は肉眼で区別しにくい。細井(2010)は「本種については高田順(秋田県)の精査によって判明した」と記している。

(齋藤信夫)

被子植物イネ目 ホシクサ科

B

和名 エゾホシクサ

環境省：該当なし

学名 *Eriocaulon monococcon* Nakai

【形態的特徴】 湿地に生える無茎の1年草。葉は線形で長さ7～14cm、幅1～2mm。花茎は高さ8～25cm。苞片は頭花より著しく長く、鋭頭。子房が1室あるのが特徴。花期8～9月。

【選定理由】 希産種で個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州に分布する。県内では東通村で採集されている。今後の精査が望まれる(細井, 2010)。

【生存に対する脅威と保存対策】 開発などによる水質汚染が生育を脅かしている。継続的なモニタリング調査が必要である。

【特記事項】 高田(2018)は青森県産のホシクサ属について7分類群を認めた。その分類群のほかに、標本の所在が明らかでない分類群や雑種あるいは変異種の存在など、多くの点で多面的な切り口からの調査が必要であることを提言している。

(齋藤信夫)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

B

和名 ネムロスゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Carex gmelinii* Hook.et Arn.

【形態的特徴】 海岸の草地や岩上に生える多年草。叢生し匍枝はない。茎は高さ20～40cm。小穂は茎の上方に数個集まり點頭する。頂小穂は雌雄性。果胞は楕円形、長さ4～5mm、扁平で有脈。

【選定理由】 産地が限られ、個体数が少ない。最近多くなった漂着ゴミの堆積による影響や釣り人・観光客の踏みつけにより減少が進行している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森・岩手）、朝鮮（北部）・千島・サハリン・カムチャツカ・アラスカ・北アメリカ（西北部）に分布する。県内では八戸市・平内町に産し、海岸砂礫質湿地や潮風にさらされる岩上に生育する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
今回の調査で八戸市鮫町小舟渡平で生育が確認できた。（須藤智道）

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

B

和名 ホロムイクグ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Carex oligosperma* Michx. subsp. *tsuishikarensis* (Koidz. et Ohwi) T.Koyama et Calder

【形態的特徴】 湿原に生える多年草。地下に匍枝がある。茎は高さ25～50cmで平滑。葉は幅1.5～2mmで、断面やや三角形。果胞は長さ5～6mm、硬くて光沢があり無毛。混生することのあるムジナスゲは果胞に毛を密生する。

【選定理由】 鷹架沼の生育地はむつ小川原開発地域内にあり、開発の及ぶ恐れがある。加藤沢沼は水位の変動・水質悪化・遷移進行などの環境変化により消滅の恐れがある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森・岩手・長野）・南千島・北アメリカ東部に分布する。県内では六ヶ所村鷹架沼・東通村加藤沢沼周辺の湿原に産する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
（須藤智道）

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

B

和名 オオクグ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Carex rugulosa* Kük.

【形態的特徴】 河口部や海岸近くの湿地に生える多年草。地下に太い匍枝がある。全体やや硬い。茎は高さ40～70cm。基部の鞘は濃赤褐色。葉は幅4～10mm。果胞は長さ6～7mm、木質で無毛。

【選定理由】 高瀬川河口部では護岸工事で一部消滅した所もある。最近多くなった漂着ゴミの堆積による影響も大きく、減少傾向にある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・九州、朝鮮・中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内では八戸市・三沢市・六ヶ所村・風間浦村などに産する。鷹架沼・高瀬川河口部に群生地がある。八戸市では海岸の砂礫地から背後の斜面湿地にみられる。ヤラメスゲ群落と同所ことが多い。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査でむつ市金谷沢・六ヶ所村鷹架沼・高瀬川河口・三沢市小川原湖・八戸市鮫町小舟渡平・大久喜で生育が確認できた。（須藤智道）

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

B

和名 ヌイオスゲ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Carex vanheurckii* Müll. Arg.

【形態的特徴】 高山の日当たりのよい、やや乾いた岩礫地や草地に生える多年草。ヒメスゲに似ているが、雄小穂は雌小穂より著しく長い（ヒメスゲは雄小穂と雌小穂は同長）。高さは10～40cm。果胞は上から見てまるい。花期は7～8月。

【選定理由】 希産種で個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、千島・カムチャツカ・アムール・東シベリア・中国東北部に分布する。県内では八甲田山に産する（細井, 2010；須藤, 2018, 私信）。

【生存に対する脅威と保存対策】 登山者による踏圧や乱獲に注意すべきである。（齋藤信夫）

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

B

和名 タカネクロスゲ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Scirpus maximowiczii* C.B.Clarke

【形態的特徴】 高山の湿った草地に生える多年草。匍枝はない。茎は高さ15~40cmで1~3節がある。花序は散房状で頂生し、やや一方に傾く。小穂は黒灰色で長さ7~10mm。果実は倒卵形で扁平形。花期は7~8月。

【選定理由】 希産種で限られた場所に分布する。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、千島・樺太・ウスリー・オホーツク・朝鮮・満州に分布する。県内では南八甲田の湿潤な低草地に希産する（細井, 2010; 須藤, 2018, 私信）。

【生存に対する脅威と保存対策】 登山者による踏圧や乱獲に注意すべきである。（齋藤信夫）

被子植物キンポウゲ目 メギ科

B

和名 ナンブソウ

環境省：該当なし

学名 *Achlys japonica* Maxim.

【形態的特徴】 草丈30cmほどで全体無毛の多年草。葉には、根生葉と側生葉がある。根生葉には長い柄があり扇形の3小葉をつける。花茎は直立し、葉柄の2倍もの長さで先端に白色の花穂をつける。花には花弁がなく、雄蕊と雌蕊だけである。

【選定理由】 県内分布は、黒石市黒森山と下北恐山だけで、個体数が極めて少なく、減少している傾向にある。津軽植物の会では、県内各地の類似環境の地点へ足を運び、新産地を探しているが個体確認は出来ない。そして分布情報も全く無い。

【分布と生態の概要】 世界的分布は中国・日本。日本分布は北海道・本州北部。県内分布は黒石市黒森山・下北郡恐山。ミズナラの林床に生育しているが土壤安定地帯ではない。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育地点は岩礫や砂礫の崩落が続き、個体の生育に大きな負荷を与えているようだ。生育地の崩落防止などの保存対策が必要。

【特記事項】 和名由来は南部（岩手県）で見出されたから。（木村啓）

被子植物キンポウゲ目 メギ科

B

和名 トガクシソウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Ranzania japonica* (T.Itô ex Maxim.) T.Itô

【形態的特徴】 草丈30~50cmの多年草。茎の基部には根出葉はなく鱗片葉で、茎の先には長い柄を持つ茎葉が対生し、葉身は3出複葉。小葉は円形で尖頭心脚、柄が長い。花は9枚の萼と6枚の花弁からなり、外萼3枚は小さく、内側6枚は紫色で大きく花弁のように見える。本当の花弁は更に内側に6個集り鐘状で小さい。

【選定理由】 西津軽郡の赤石川上流部・追良瀬川上流部・笹内川上流部にだけ見られ、個体数も極めて少ない。津軽植物の会では、県内各地の類似環境地点に足を運び調査しているが確認出来ない。分布情報も無い。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本だけである。日本分布は本州中部と北部の多雪地帯。本県分布は西津軽郡の赤石川上流部・追良瀬川上流部・笹内川上流部。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育環境は湿り気のある落葉樹林下であり、生育地の伐採や崩壊などで、個体の消滅が心配される。また、採取による減少も考えられる。保護対策が必要である。

【特記事項】 日本固有種。1属1種の植物。本県が北限の植物。ハモンソウ（破門草）の別名がある。日本人により最初に学名がつけられた植物。（木村啓）

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

B

和名 オオレイジンソウ

環境省：該当なし

学名 *Aconitum iinumae* Kadota.

【形態的特徴】 茎は直立し、草丈1mほどの多年草。茎の上部や花柄には曲がった毛が生える、長い柄がある根出葉は大型で7～9中裂し、裂片は更に浅く裂けて先は尖る。茎先に長さ30cmほどの細長い総状花序をつけ、淡黄色花を多数つける。総状花序の花は下から上へ順に咲いて行く。1個の花の外形は兜状であるが、これは5枚の萼片から構成されている。花卉は頂萼片の内部に隠れている。花卉には距があり、距の先端は著しく内側に曲がっている。母種エゾノレイジンソウの距先端は真っ直ぐで内側に曲がらないので区別が出来る。

【選定理由】 南八甲田と白神山地の一部に自生しているのみである。分布の広がりや個体増加の傾向は、殆ど見られない。

【分布と生態の概要】 日本分布は北海道・本州中部以北。県内分布は八甲田横沼地区と白神山地笹内地区。

【生存に対する脅威と保存対策】 個体数が少なく、深山渓谷の湿気のある斜面に生育し、渓谷の崩壊などが発生すれば、消滅へと進む心配がある。生育地の定期巡回などを行い保護対策が必要である。

【特記事項】 トリカブト属でありながら根茎が塊根をつくらず垂直に伸びる。 (木村啓)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

B

和名 センウズモドキ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Aconitum jaluense* Kom. subsp. *iwatekense* (Nakai) Kadota

【形態的特徴】 林下に生える多年草。葉は5角形状で3深～全裂する。花は紫色から白色まで変化がある。花期9～10月。花柄に真っすぐな開出毛を密生するのが特徴。類似種オクトリカブト・ツクバトリカブトの花柄には曲がった屈毛が密生する。開出毛と屈毛の混生する雑種の方がむしろ多い。

【選定理由】 落葉広葉樹林の伐採、スギ植林地化で生育地が失われてきている。現在の生育地では雑種の繁殖が目立ち、両親共まれにしか見られなくなっている。

【分布と生態の概要】 本州（中部以北の太平洋側）に分布する。県内では太平洋側南部の馬淵川流域以南に産する。*A.fauriei*（木梨が1900年青森で採集）も本種とされる（門田, 1987）。(青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用)

今回の調査で階上町階上岳で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

B

和名 アズマレイジンソウ

環境省：該当なし

学名 *Aconitum pterocaule* Koidz. var. *pterocule*

【形態的特徴】 林下のやや湿った所に生える多年草。茎は高さ0.8～1.5mで、上部はややつる状になる。葉は腎円形で5～7中裂する。花は淡紅紫色で、えぼし形の頂萼片上部が細まる点で、他のトリカブト類と区別できる。花期8～9月。

【選定理由】 産地・個体数が少なく、橋の架け替え工事で消滅した所もあり、開発等による危険性が大きい。

【分布と生態の概要】 本州（中部以北）の主として日本海側に分布する。県内では八戸市の新井田川流域にごくまれに産する。北限である。(青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用)

(須藤智道)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

B

和名 ミチノクフクジュソウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Adonis multiflora* Nishikawa et Ko. Ito

[形態的特徴] 草地や明るい林内に生える多年草。茎は中空。萼片は5、6枚で、長さは花弁の1/2～1/3、外面は緑色。花期4月中旬～5月上旬。よく似たフクジュソウは、茎が中実。萼片が6～10枚で、花弁と同長からやや短い、外面紫色から暗紫色。花期3～4月（西川, 1989）。

[選定理由] フクジュソウより産地・個体数は格段に少ない。草地・落葉広葉樹林の減少や園芸採取が危険要因である。

[分布と生態の概要] 本州（中部以北）・九州、朝鮮に分布する。県内では太平洋側南部に局所的に産する。海岸から丘陵地の草地や落葉広葉樹林下に生え、フクジュソウと混生することもある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で十和田市藤島・清瀬、八戸市小舟渡平・松館蟹沢・高館で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

B

和名 フクジュソウ

環境省：該当なし

学名 *Adonis ramosa* Franch.

[形態的特徴] 草丈15～25cmになる多年草。花は黄金色で早春に咲く。根はひげ根で多数出す。葉は互生して、3～4回羽状に細かく裂ける。黄金色の花は、萼と花弁から構成され、下部の数枚は萼で、上部の20～30枚は花弁である。

[選定理由] 県内全域に見られ、群落を形成していることが多い。しかし、生育地が年々減少し、個体も少なくなっている。生育地の消滅と個体の減少が確実に進んでいる。

[分布と生態の概要] 世界的分布は朝鮮半島・中国東北部・シベリア東部。日本分布は北海道～九州まで点在するが、西日本には少ない。県内分布は全域に渡っている。津軽西海岸・津軽半島・弘前市相馬地区・三八地区の自生地はよく知られている。

[生存に対する脅威と保存対策] 春一番に咲く美しく目出度い花なので、観賞用に採取が行われる。そのため、個体の減少が進んでいる。採取を禁じ、生育地の保存が必要。保存対策として、記念物指定が有効と思われる。

[特記事項] 同属の別種で、酷似するミチノクフクジュソウが種差海岸などに見られる。（木村啓）

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

B

和名 エゾノリュウキンカ

環境省：該当なし

学名 *Caltha fistulosa* Schiepecz.

[形態的特徴] 春はやく黄金色の大きな5弁花を咲かせる多年草。草丈50～80cmで、根生葉は腎円形で大きくアキタブキを思わせる。葉には光沢があり軟らかい。花柄は、直立し高さ70cmほどで、上部に少数の茎葉をつける。茎頂及び茎葉腋に花をつける。

[選定理由] 深山の水湿地に生育しているが、株が増加する傾向にはなく、自生地の消滅も見られる。津軽植物の会では毎年、県内各地の自生地調査をしているが新産地は殆ど無く、消滅した自生場所もある。

[分布と生態の概要] 世界的分布は千島列島・サハリン・朝鮮半島北部。日本分布は北海道・本州北部。本県分布は深浦地区・鱒ヶ沢地区・黒石地区・八甲田地区・三八地区。深山水湿地が生育場所である。

[生存に対する脅威と保存対策] 深山の開発が進み、林道の設置などで湿地自生地の消滅も見られる。開発時には、植生調査を行って、絶滅を防ぐことが必要である。

[特記事項] 当該種を本県ではヤチブキ（谷地蔞）と呼び、花・葉・茎・葉柄の全てを食べる。キンポウゲ科植物としてはニンソウ（本県俗称フクベラ）と並び食用にできる例外種である。

(木村啓)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

B

和名 ハンショウヅル

環境省：該当なし

学名 *Clematis japonica* Thunb.

【形態的特徴】 林縁や林内に生える木質のつる植物。ミヤマハンショウヅルに似て葉は1回3出複葉で対生、花は紫褐色で下垂し、質が厚く縁に白細毛が密生する（細井, 2010）。花期は5～6月。

【選定理由】 県内では特異な隔離分布をしている。

【分布と生態の概要】 細井（2010）は「岩手・秋田・宮城・山形の4県からは正確な分布は知られておらず、それより南に広く分布することが知られている。一種の隔離分布で津軽・下北両半島に分布している。林縁もしくは明るい林内に希産する」と記している。

【生存に対する脅威と保存対策】 マニアの乱獲を防止する。

【特記事項】 葉が似ているトリガタハンショウヅルは県内には分布しない（細井, 2010）。

(齋藤信夫)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

B

和名 コキツネノボタン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Ranunculus chinensis* Bunge

【形態的特徴】 日当たりのよい湿地に生える越年草。キツネノボタンに似ているが、全体に開出毛が多い。集合果は長楕円形（キツネノボタンは球形）。花期6～7月。

【選定理由】 自然度の高い湿地にみられる。八戸市の馬淵川河川敷を利用したサーキットパークにも生育していたが、河川敷整備により消滅した。それまでは毎年定期的な草刈りが行われ、レース以外は人の立ち入りのない好適な環境で、エゾナミキソウ・ミクリ・ミコシガヤなども生育していた。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・シベリアに分布する。県内では太平洋側八戸市・階上町に産し、ややまれである。キツネノボタンと混同されていることも考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市河原木馬淵川原で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

B

和名 イワカラマツ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Thalictrum sekimotoanum* Honda

【形態的特徴】 山地の日当たりの岩場に生える多年草。全体に腺毛が多いのを特徴とする。類似種のアキカラマツ・オオカラマツは全体無毛か、またはわずかに腺毛がでる。花期は6～7月。アキカラマツは通常8月で遅い（岩場に生えて花期の早いものもある）。

【選定理由】 産地が限られ個体数も少ない。道路工事・岩石採掘および植生の変化で減少している。

【分布と生態の概要】 本州（中部以北）に分布する。県内では局所的に岩場に小群でみられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で南部町諏訪ノ平・階上町金山沢で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

B

和名 ノカラマツ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Thalictrum simplex* L. var. *brevipes* H.Hara

【形態的特徴】 日当たりの草地に生える多年草。楔形の小葉が特徴。花びらはない。アキカラマツより花序も茎葉も狭く着き、茎は稜がはっきりしている。

【選定理由】 全国的にも希産であり、開発等により減少している。

【分布と生態の概要】 細井（2010）は「学名上の母種はヨーロッパに産し、他の変種はシベリア東部・北中支・朝鮮に分布しており、ノカラマツは南朝鮮と九州の阿蘇火山帯と本州では関東平野・井沢・蓼科に知られる。県内では佐井村・おいらせ町（旧下田町）・小川原湖畔・高瀬川に分布することが分かっており、湿った場所が多い」と記している。

【生存に対する脅威と保存対策】 草地の開発や、放棄による自然遷移などが脅威となる。園芸採取の防止が望まれる。（齋藤信夫）

被子植物ユキノシタ目 ボタン科

B

和名 ヤマシャクヤク

環境省：準絶滅危惧

学名 *Paeonia japonica* (Makino) Miyabe et Takeda

【形態的特徴】 草丈40cmほどの多年草。茎は直立し有柄の2回3出複葉を互生する。小葉は楕円形で先端は尖り基部は楔形となり、葉表は緑色で光沢があり、葉裏は白色を帯びる。茎の先端に大きい白色花を1個つける。花弁は5～7枚で萼片は3枚。果実は袋果で、秋に裂開すると不稔の紅色種子と結実の黒色種子が現れる。

【選定理由】 県内各地に生育しているが、株数は少なく増加する傾向にはない。津軽植物の会では県内各地に足を運び調査しているが新産地は少なく、株数も限られている。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・朝鮮半島。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は県内全域。低山地の落葉樹林下や杉林床に見られる。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育地は杉林や落葉樹の林床であるが、畑地開墾や開発工事などで、生育地が少なくなっている。加えて、花が美しいので観賞用に、根は薬用になるので、採取されてもいる。

【特記事項】 同じ県産種として、同科同属近似種のベニバナヤマシャクヤク（紅花山芍薬）があり、本県絶滅危惧種のAランクに入っている。（木村啓）

被子植物ユキノシタ目 ユキノシタ科

B

和名 シコタンソウ

環境省：該当なし

学名 *Saxifraga bronchialis* L. subsp. *funstonii* (Small) Hultén var. *rebunshirensis* (Engl. et Irmsch.) H.Hara

【形態的特徴】 山地から高山の岩礫地、砂礫地、岩場に生える多年草。根茎はよく分枝して株状になる。無花茎は短く、帯紅紫色。葉はやや肉質で、へら状披針形、長さ6～15mm、縁に剛毛がある。花茎は3～12cm。花弁は長さ4～7mmで、黄色と紅色の小さな斑点がある。花期6～7月。

【選定理由】 開発は考えられないが、草姿や花の魅力から盗掘の危険性が大きい。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、千島・サハリンに分布する。県内では白神山地と津軽半島に希産する。本州では普通高山生と考えられている植物が山地でみられ貴重である。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び周辺環境変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を主に引用）（齋藤信夫）

被子植物ユキノシタ目 ベンケイソウ科

B

和名 ツガルミセバヤ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Hylotelephium ussuriense* (Kom.) H.Ohba var. *tsugaruense* (H.Hara) H.Ohba

【形態的特徴】 山地の岩上や砂礫地や母岩が露出した崩壊斜面などに生える多年草。花茎は高さ20～30cmになり斜上する。葉は帯粉し白緑色、無柄で卵形から楕円形が多く、緩やかな鋸歯があり、対生・互生・輪生など変化に富む。花期は10月頃、乳白色の花を散房状につける。

【選定理由】 深山まで林道が開設されるようになって、立ち入りにより生育地がせばめられている。

【分布と生態の概要】 本州（青森・秋田）に分布する。白神山地から初めて報告された植物である。県内では白神山地のほか、津軽半島北端や青森市の山中に生育することが分かっている。

(齋藤信夫)

被子植物マメ目 マメ科

B

和名 フジカンゾウ

環境省：該当なし

学名 *Hylodesmum oldhamii* (Oliv.) H.Ohashi et R.R.Mill

【形態的特徴】 草丈80cmほどのヌスビトハギに類似した多年草。葉は互生し、5～7小葉からなる羽状奇数複葉で頂小葉も側小葉も長楕円形。葉柄基部には線形の托葉がある。花は長い総状花序で淡紅色の蝶形花を多数つける。果実は三角形の2節果でサンゴラスの形状を思わせる。三角形小節果には、全面に短い鉤毛が密生し、動物や被服に付着して散布される。

【選定理由】 限られた地域にだけ見られ、個体数も少ない。生育地点は低山地の林下路傍で、増加する傾向は見られない。分布域が狭く、津軽地区の一部に限られている。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・朝鮮半島・中国東北部。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は津軽西海岸・大鰐早瀬野地区。低山地の林下路傍に僅かに生育している。

【生存に対する脅威と保存対策】 西津軽郡鱒ヶ沢町赤石川上流部の山道端で確認しているが、近年は南津軽郡大鰐地区の山道でも記録した。道路改修や刈り払いの作業時には注意を要する。

【特記事項】 本県が北限の植物。

(木村啓)

被子植物バラ目 バラ科

B

和名 シロバナノヘビイチゴ

環境省：該当なし

学名 *Fragaria nipponica* Makino

【形態的特徴】 山地に生える多年草。花卉は5枚で白色。花期6月。北海道のものは全体に毛が多く、エゾクサイチゴとして区別することもある。県内産も毛が多いが区別しないことにした。同じ山地生のノウゴウイチゴは花卉が7、8枚で、幅が狭い。栽培種オランダイチゴも同属である。

【選定理由】 産地・個体数が少なく、自然災害による崩落・埋没等の危険性がある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・九州（屋久島）、千島・サハリン・朝鮮（済州島）に分布する。県内では津軽半島に希産し、岩場下部の草地にツルキジムシロ・ミヤマウツボグサなどと一緒に小群でみられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で外ヶ浜町鑄泊で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物バラ目 バラ科

B

和名 カラフトダイコンソウ

環境省：該当なし

学名 *Geum macrophyllum* Willd. var. *sachalinense* (Koidz.) H.Hara

[形態的特徴] 山地の湿り気のある林下に生える多年草。全体に黄褐色の長い剛毛がある。茎は高さ30～60cm。根生葉の頂小葉は円形で大きい。茎葉の托葉は小さく、全縁であることが多い。花柱には腺毛がある。花期6～8月。

[選定理由] 各産地とも個体数は少ない。開発や水質悪化等の間接的な影響による減少の危険性がある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、千島・サハリンに分布する。県内では散発的に産するが、同属のダイコンソウやオオダイコンソウより細作りで目立たないので、まだ潜在していると考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で五所川原市飯詰・六ヶ所村田面木沼で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物バラ目 バラ科

B

和名 ミチノクナシ

環境省：絶滅危惧 I B類

学名 *Pyrus ussuriensis* Maxim. var. *ussuriensis*

[形態的特徴] 野生のナシの1種である。若い葉には褐色の毛が密なものから薄いものまで変異がある。果実は径3cmぐらいで、黄緑色または褐色で、頂部に萼片が残る（類似種ヤマナシは萼片が脱落）。

[選定理由] 戦後激減し今では自生株が少ない。

[分布と生態の概要] 本州に分布し、県内では低山地や低地に見られる。花は良く咲くが、果実は虫がつきやすい。時々芳香を発するものもある。かつては民家周辺にしばしば植えられていた。

[生存に対する脅威と保存対策] 園芸採取及び周辺の環境変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

[特記事項] 細井（2010）は「別名イワテヤマナシ。岩手県の北上山地の高原には牛馬が長い間放牧されていて、その野生ナシはイワテヤマナシと呼ばれていた。今ではそれと同じものであると分かってミチノクナシと統合された。幹の太い株が少ないのは伐採されて家具などに利用されてきたためであろう」と記している。池谷ら（2010）は「ミチノクナシでは、北上山地の野生個体の一部は独自の単一の集団に由来すると推定されましたが、これ以外の北東北地方の個体は、ニホンナシと交雑していることが判明しました」と述べている。

(齋藤信夫)

被子植物バラ目 バラ科

B

和名 オオタカネバラ

環境省：該当なし

学名 *Rosa acicularis* Lindl.

[形態的特徴] 落葉低木で樹高1mほど。枝はよく分枝し、白色を帯びた鋭い刺を多生する。葉は互生し、奇数複葉で5～7個の小葉からなる。頂小葉の先端は尖り、側小葉の先端はやや円い。葉縁には粗い鋸歯があり、葉の羽軸には腺と小刺がある。花は小枝の先端に1～2個つき、紅紫色の5弁。5弁の中心部には多数の雄蕊があり葯は黄色。果実は倒卵状で狭紡錘形となり黄赤色に熟す。

[選定理由] 県内の分布域は限られており、個体数も少ない。新産地の報告は無く、生育している環境も厳しい。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本・朝鮮半島北部・中国東北部・サハリン・シベリア・カムチャッカ半島。日本分布は北海道・本州中北部の日本海側。本県分布は一部の高山や山地冷地で、津軽半島・黒石市黒森山・八甲田ぐだり沼・下北半島恐山など。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育場所が植生遷移などで変化がみられ、個体の生育が厳しくなっている。生育地域の保存指定が必要である。

[特記事項] 別和名はオオタカネイバラ（大高嶺茨）。

(木村啓)

被子植物バラ目 バラ科

B

和名 ホザキナナカマド

環境省：該当なし

学名 *Sorbaria sorbifolia* (L.) A. Braun var. *stellipila* Maxim.

【形態的特徴】 山地に生える落葉低木。高さ2 m内外で株立ちになる。枝の先に大きな円錐花序を出し、多数の小花をつける。花期7～8月。果実は袋果である。高木のナナカマドとは別属である。よく似た庭木のニワナナカマドは中国原産で同属である

【選定理由】 植生遷移・自然災害・森林の伐採・立ち入り等による減少の危険性がある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森）、朝鮮・中国（東北部）に分布し、日本では分布の限られた種である。県内では佐井村・むつ市（旧川内町、旧脇野沢村）に産する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で佐井村縫道石山で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ニシシギ目 ニシシギ科

B

和名 クロツリバナ

環境省：該当なし

学名 *Euonymus tricarplus* Koidz.

【形態的特徴】 亜高山帯の林縁に生える無毛の落葉低木。樹高は2～3 m。葉の両面とも無毛でしわがある。表面の葉脈はくぼみ、裏で隆起する。花は5数性で暗紫色。径約8 mm。果は3裂する。花期は6～7月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、サハリンに分布する。細井（2010）は「県内では岩木山と八甲田山に産するが、精査を要する」と記している。林縁に分布する。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び周辺環境変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

(齋藤信夫)

被子植物キントラノオ目 トウダイグサ科

B

和名 マルミノウルシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Euphorbia ebracteolata* Hayata

【形態的特徴】 林下や草地に生える多年草。全体紅色を帯びる。茎は高さ40～50cm、傷つけると白い乳液を出す。茎葉は白い中脈が目立つ。花期4～5月。腺体は腎円形。雄花の基部に小苞がない。果実は平滑である。類似種ノウルシの果実はいぼ状の突起があり、ナツトウダイの腺体は三日月形である。

【選定理由】 落葉広葉樹林の伐採、スギ植林地化などにより減少している。スギ林でも植林密度を下げることによって、本種のような春植物の生育が可能と考えられる。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）・九州、朝鮮・中国に分布する。県内では太平洋側南部の八戸市・階上町に産し、海岸や丘陵地の斜面下部にみられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市鮫町小舟渡平・松館蟹沢で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キントラノオ目 トウダイグサ科

B

和名 ヤマアイ

環境省：該当なし

学名 *Mercurialis leiocarpa* Sieb.et Zucc.

【形態的特徴】 草丈20～30cmの多年草。地上茎は直立し4稜があり、葉は有柄の長楕円形で対生する。地下茎にも4稜があり横に這い、繰り返し分枝を続けて群落を形成する。雌雄異株で、雄花序も雌花序も穂状花序となり、早春に開花する。

【選定理由】 本県唯一の深浦町の自生地であっても、増加傾向はなく限界の生育状況である。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・朝鮮半島・中国大陸・台湾・インドシナ。日本分布は本州・四国・九州・沖縄。本県分布は西津軽郡深浦町松神地区・深浦町十二湖地区。低山地の林床に群生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 深浦町松神の自生群落地は、生育地全体が保存されて、減少傾向には無い。しかし、他地点の群生地は森林伐採により全滅してしまった。

【特記事項】 本県が北限の植物。日本で最も古くから用いられた染料で、生の葉を布に擦りつけて染色した。万葉集や源氏物語にも当該種の名前が出てくる。(木村啓)

被子植物キントラノオ目 ヤナギ科

B

和名 イイギリ

環境省：該当なし

学名 *Idesia polycarpa* Maxim.

【形態的特徴】 雌雄異株の樹高8～20mの落葉高木。樹皮は滑らかな灰緑色。葉は互生し枝先に束生する。葉は大きく広円形で縁に粗い鋸歯があり鋭頭で心脚。葉柄は30～40cmと長くて赤色で、先端部に花外蜜腺がある。花は小さく黄緑色で、香気があり、葡萄房状に垂れ下がっている。花弁は無く萼片は5枚前後。果実は液果で熟すと赤色となり、落葉後の冬でも残存し、遠目でもよく目立つ。

【選定理由】 県内の限られた地区にだけ自生し、株数も少なく減少傾向にある。津軽植物の会では長年に渡って県内各地に足を運び調査をしているが新産地は見つかっていない。確認情報も無い。

【分布と生態の概要】 世界的分布は朝鮮半島・中国大陸・台湾。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は深浦町岩崎地区・津軽半島小泊地区・八戸市南郷地区。

【生存に対する脅威と保存対策】 人里に近い落葉樹林内に生育しているが株数が少なく、伐採も心配される。当該樹木の保護指定が必要である。

【特記事項】 本県が北限の植物。(木村啓)

被子植物キントラノオ目 スミレ科

B

和名 オオバタチツボスミレ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Viola langsdorfii* Fisch. ex DC. subsp. *sachalinensis* W.Becker

【形態的特徴】 地上茎のある大型のスミレで、草丈30cmほどになる多年草。葉は円心形で大きく、明るい緑色で、葉脈は引っ込んでいる。葉の基部は深い心形で、先端は凸出して軟らかく、波打っている。托葉は櫛歯状。花は淡い紫色で大きく、唇弁の筋目立ち、側弁に毛が密生し、距が白色である。

【選定理由】 県内分布は津軽半島・八甲田・六ヶ所村と限られ、生育環境も厳しくなっている。どの生育地点も環境悪化の傾向にあり、株の減少が心配される。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・サハリン・千島列島・カムチャッカ半島。日本分布は北海道・本州北部。本県分布は中泊町高根地区・八甲田田代地区・六ヶ所村。

【生存に対する脅威と保存対策】 一部の地点では、生育地の水湿地が乾燥化や整備などがみられ、株数の減少が認められる。生育地点の環境保全対策が必要である。

【特記事項】 オオバタチツボスミレは湿地を生育場所としていることなどから、系統的にはオオタチツボスミレやタチツボスミレよりもニョイスミレに近いとされている。(木村啓)

被子植物キントラノオ目 スミレ科

B

和名 アナマスミレ

環境省：該当なし

学名 *Viola mandshurica* W.Becker f. *crassa* (Tatew.) F.Maek.

【形態的特徴】 海岸に適応したスミレの品種。そのため、一見すると原野や路傍に生育しているスミレとってしまう。しかし、葉に光沢があり厚いことで気づく。詳しく観察すると、側弁に毛があり、葉は鉾形で、草丈が低く、叢生して花柄を多数伸ばし、濃い紫色で小形の花を咲かせている。

【選定理由】 県内分布は津軽西海岸など数地点と限られ、株数も多くない。生育現場は海水に洗われることもあり、株の消失も見られる。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州の日本海側（新潟県まで）。本県分布は津軽西海岸・津軽半島小泊地区。生育環境は海岸砂礫地で海風が強く吹き、波飛沫も被る。

【生存に対する脅威と保存対策】 自然状態の海岸砂礫地に生育しているが、護岸工事などで生育地の消失が見られる。深浦海岸と小泊海岸では、砂礫崩落に耐えて数株が残存しているのみである。また、歩行可能でもあるので、侵入禁止や柵などを作った保存対策が必要である。

【特記事項】 日本固有種。和名は北海道礼文島のアナマ岩に由来する。 (木村啓)

被子植物キントラノオ目 スミレ科

B

和名 アイヌタチツボスミレ

環境省：該当なし

学名 *Viola sacchalinensis* H.Boissieu

【形態的特徴】 一見普通種のタチツボスミレを思わせる多年草。違いのポイントは、距が白色である、托葉の切れ込みが浅い、側弁基部に毛がある、花柱上部に突起毛があることなど。また、花を咲かせる時期が2週間ほど遅れることである。

【選定理由】 分布地が数箇所と少なく、生育している株数も少ない。加えて、生育環境が厳しく、個体数増加は見られず、減少傾向にある。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・千島列島南部・サハリン・カムチャッカ半島。日本分布は北海道・本州北部と長野県。本県分布は黒石市黒森山・岩木山九合目・七戸町八幡岳・下北郡大間町・東津軽郡平内町。高山や高地など生育環境の厳しい崩落地などに見られる。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育場所は、岩場の崩落地で個体が流失している状況にもある。そのため、生育場所の保護対策が必要である。

【特記事項】 和名は、北海道に多産したチツボスミレに類似することに拠る。 (木村啓)

被子植物フウロソウ目 フウロソウ科

B

和名 タチフウロ

環境省：該当なし

学名 *Geranium krameri* Franch. et Sav.

【形態的特徴】 草地に生える多年草。茎は高さ50～80cm、下向きの毛がある。葉は両面に粗い毛がある。托葉はやや草質で離生し、狭3角形、長さ4mm。花は淡紅紫色で濃紫色の脈が目立ち、径2.5～3cm。類似種にエゾフウロ・ハマフウロ・チシマフウロなどがある。花期8月。

【選定理由】 産地・個体数が少なく、植生遷移の進行・環境改変による減少の危険性がある。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、朝鮮・アムール・中国（東北部）に分布する。県内では八戸市に産し北限である。生育地は現在陸上自衛隊の基地内にあり、ススキ草原状となっている。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で南部町福地で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物フトモモ目 アカバナ科

B

和名 ホソバアカバナ

環境省：該当なし

学名 *Epilobium palustre* L.

【形態的特徴】 湿原に生える多年草。地下に細長い匍匐枝を伸ばす。普通、茎は単一で分枝せず、高さ10～80cm。葉は柄がなく線形または線状披針形、巾3～5mmが多く、時には7～8mmのものもある。柱頭はこん棒状。屏風山では分枝して大きい株となるものもある。花期は6～9月。

【選定理由】 周極植物の一種で北半球の北極圏を取り巻いて広く分布しているが、日本では希少植物である（細井, 2010）。

【分布と生態の概要】 細井（2010）は「国内では中部以北の亜高山帯の湿原に分布している。国外ではユーラシア、北アメリカの温帯に分布する。県内では南八甲田の湿原に分布している他に、津軽半島の屏風山の湿地にも希産している。そこは日本海に近いので国内では最も特異な環境である」と述べている。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び周辺的环境変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

【特記事項】 別名はヤナギアカバナともいう。

(齋藤信夫)

被子植物アブラナ目 アブラナ科

B

和名 エゾイヌナズナ

環境省：該当なし

学名 *Drada borealis* DC.

【形態的特徴】 海岸岩上に叢生する草丈15cmほどの多年草。全草に毛が多く、根出葉は倒卵形、茎葉は広楕円形。茎の先端に白色4弁花10～20個を総状につける。花弁は倒卵形で先が窪む。果実は長楕円形でねじれている。

【選定理由】 津軽半島2地点と下北半島1地点に確認されているのみで、生育環境が極めて厳しい。どの生育地点でも株の増加傾向はみられない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・ロシア極東地方。日本分布は北海道・本州北部（青森県）。本県分布は津軽半島先端部・下北半島佐井地区。海岸の岩場という特殊環境に生育している。

【生存に対する脅威と保存対策】 進入困難な断崖絶壁などに生育しているので、採取による消滅の心配は無いが、生育地の崩壊などによる絶滅が考えられる。崩落防止などの保存対策が必要である。

【特記事項】 本県が南限の植物。別名はシロイヌナズナ。県産種として同科同属近似種のイヌナズナがあり、黄色花を咲かせ内陸平地に分布している。

(木村啓)

被子植物ビャクダン目 ツチトリモチ科

B

和名 ミヤマツチトリモチ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Balanophora nipponica* Makino

【形態的特徴】 樹木の根に寄生する多肉質で無毛の多年草。高さ8～15cm。花序は卵状円柱形、または狭卵形、帯橙黄色、ときには赤色を帯びる。雌雄異株であるが、雄株はまだ発見されていないという。花期は7月下旬～8月中旬。

【選定理由】 県内の産地はまれである。個体数は少ない。

【分布と生態の概要】 本州（北部、中部）・九州の山地に生え、イタヤカエデやウリハダカエデなどのカエデの仲間ほかの落葉樹の根に寄生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 森林伐採が生育を左右する。

(齋藤信夫)

被子植物ナデシコ目 タデ科

B

和名 ヌカボタデ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Persicaria taquetii* (H.Lév.) Koidz.

【形態的特徴】 水田や池の畔に生える1年草。葉は軟弱である。下部の茎は地を這い、根をだし、枝を分ける。上部は直立する。花序はまばらで細長く花穂の花は小さい。花期は9～10月。

【選定理由】 希少種である。

【分布と生態の概要】 細井（2010）は「全国的に分布しているが、現在では希産である。水辺や湿地に生える。県内では岩木川河口周辺、三八地方のみ」と記している。国外では朝鮮に分布する。

【生存に対する脅威と保存対策】 湿地の保護と生活環境の解明が必要である。

【特記事項】 細井（2010）は「佐藤耕次郎（1943）は原野ノ水辺、沼沢地、溜池ノ底、湿潤ノ畑地等ニ多ク見ユと記録しているが、今日では希産である」と記している。（齋藤信夫）

被子植物ナデシコ目 ナデシコ科

B

和名 アオモリマンテマ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Silene aomorensis* M.Mizush.

【形態的特徴】 山地の岩場に生える多年草。茎は叢生し高さ10～25cm。根生葉はヤナギのような細い葉で、先は尖り、基部は細くなりほとんど柄がなく、長さ8cmくらい。茎葉は根生葉より小さく、対生する。茎の先端に3cm前後の白色の花を数個咲かせる。花期は6月。萼は鐘形で膨らみ、10脈があり、産地により腺毛のあるのと無いものがある。

【選定理由】 本種が生育する場所は日当たりのよい岩場で、花が大きく、非常に目立つことから人目を引く。そのため盗掘が進み、個体数はきわめて少なくなっている。

【分布と生態の概要】 本州（青森・秋田）に分布。白神山地から初めて報告された植物である。県内では日本海側南西部の山地に局所的に産する。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び伐採による岩場周辺の環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。（齋藤信夫）

被子植物ツツジ目 サクラソウ科

B

和名 ミチノクコザクラ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Primula cuneifolia* Ledeb. var. *heterodonta* (Franch.) Makino

【形態的特徴】 草丈10～20cmの多年草。根際より4～5枚の葉をそう生させ、その中心から花柄直立させ、先端部に高杯状で紅紫色での花を1～6個つける。葉は倒卵状くさび形で、下部の方が次第に細くなり、長さ3～15cm、幅2～3cm。葉縁の上部には不揃いの深い鋸歯が多数ある。

【選定理由】 県内分布は岩木山のみで、9合目の谷筋や窪地などに群生する。開花の季節には登山をしながら鑑賞する人が多く、踏み付けなどで個体減少が心配される。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本だけ。日本分布は本県と秋田県。本県分布は岩木山。高山帯の岩地や岩礫地や草湿性に群生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 9合目からの登山道にも普通に生育しているので、踏み付けによる消滅が見られる。踏みつけ注意などの保護対策が必要である。

【特記事項】 日本固有植物。岩木山が基準産地で、白花をつける個体はシロバナミチノクコザクラと呼ぶ品種である。岩木山の他に秋田県田代岳でも発見された。（木村啓）

被子植物ツツジ目 サクラソウ科

B

和名 ユキワリコザクラ

環境省：該当なし

学名 *Primula farinosa* L. subsp. *modesta* (Bisset et S.Moore) Pax var. *fauriei* (Franch.) Miyabe

【形態的特徴】 草丈5～10cmの多年草。葉は根際を集まってつき、その中心部から花柄を出す。花柄の先端部に3～6個の淡紅色で高杯状の花をつける。花喉部は黄白色で、筒部は6mmほどの長さで、萼の1.5倍はある。基変種のユキワリソウと酷似するが、本変種は葉裏が著しく外曲するので区別が出来る。

【選定理由】 県内分布は八甲田山系と白神岳で、個体数も極めて少ない。生育する環境は、岩場で株数の増加は見られない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州北部。本県分布は深浦町白神岳・南八甲田赤倉岳・七戸町八幡岳。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育している岩場地帯の崩落壊が見られ、株数も減少している。崩落防止などの保護対策が必要である。白神岳の当該種を50年ほど前に実見しているが、近年の確認情報は無い。

【特記事項】 日本固有種。同属の酷似種にユキワリソウ（雪割草）があり、県内での分布域を異にしている。
(木村啓)

被子植物ツツジ目 サクラソウ科

B

和名 ユキワリソウ

環境省：該当なし

学名 *Primula farinosa* L. subsp. *modesta* (Bisset et S.Moore) Pax var. *modesta* (Bisset et S.Moore) Makino ex T.Yamaz.

【形態的特徴】 草丈5～10cmの多年草。葉は根際を集まってつき、その中心部から花柄を出す。花柄の先端部に3～6個の淡紅色で高杯状の花をつける。花喉部は黄白色、筒部は6mmほどの長さで、萼の1.5倍はある。ユキワリコザクラと酷似するが、本基変種は葉裏に黄色粉状物を密付するので区別が出来る。

【選定理由】 県内分布は下北半島の一部のみで、個体数も極めて少ない。生育する環境が岩場の湿潤地で、株数の増加は見られない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は下北郡大間町奥戸川上流部の2地点。深山溪谷の岩場を生育地としている。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育地点の岩場崩壊が見られ、年々個体数が減少している。崩落防止の方策を講じて、経過観察をしたい。また、進入禁止などの保存対策も必要である。

【特記事項】 日本固有種。同属の酷似種にユキワリコザクラ（雪割小桜）があり、県内での分布域を異にしている。
(木村啓)

被子植物ツツジ目 サクラソウ科

B

和名 オオサクラソウ

環境省：該当なし

学名 *Primula jesoana* Miq. var. *jesoana*

【形態的特徴】 草丈20～40cmの多年草。長い柄のある掌状の根生葉を5～6枚出し、その中心から花茎を真っ直ぐに伸ばす。花茎の先端に紫紅色で高杯状の大きな花を輪状に5～6個つける。群落の中に、白花株も認められることがある。これは、品種のシロバナオオサクラソウである。

【選定理由】 県内各地に見られるが、フクジュソウに次いで春に咲く美しい野生花なので、観賞用に採取されることが多い。自生地では年々個体数が少なくなっている。このままでは絶滅してしまう。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道西南部・本州中部以北。本県分布は西津軽郡・北津軽郡・中津軽郡・南津軽郡・東津軽郡・下北郡。深山の谷地や湿った草地に生育している。

【生存に対する脅威と保存対策】 花が美しいので、どの生育地でも採取があり、絶滅へと進むように思われる。生育地の保護指定と監視活動が必要と思われる。

【特記事項】 日本固有植物。津軽半島先端部に当該種の自生群落があったが、採取が続いたために絶滅してしまった例がある。
(木村啓)

被子植物ツツジ目 サクラソウ科

B

和名 ヒナザクラ

環境省：該当なし

学名 *Primula nipponica* Yatabe

[形態的特徴] 草丈10cmほどの多年草。葉は肉質の倒卵形で小さく、根際から多数集まって出る。集まった葉の中から、15cmほどの花茎を伸ばし、先端に2～8個の花を散形につける。花は白色で小さく高杯状をして、花弁は5深裂し、花弁の先端が更に浅く裂ける。

[選定理由] 県内分布は八甲田山系のみで、北八甲田と南八甲田の湿原に群生している。生育地の湿原の踏み付けなどで、個体の消失も見られる。厳しい環境に生育している種類なので見守りたい。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本だけ。日本分布は本州の東北地方だけ。本県分布は北八甲田の湿原・南八甲田の湿原。

[生存に対する脅威と保存対策] 雪が消えると乾燥する高山の湿生地にも生育するため、踏み付けによる個体減少が心配される。進入禁止などの保護対策が必要である。

[特記事項] 日本固有種。本県が北限の植物。当該種は白花株のみとされているが、北八甲田の大岳直下で紅紫色株を確認している。
(木村啓)

被子植物ツツジ目 ツツジ科

B

和名 ナガバツガザクラ

環境省：該当なし

学名 *Phyllodoce nipponica* Makino subsp. *tsugifolia* (Nakai) Toyok.

[形態的特徴] 背丈15cmほどの常緑低木で、枝をよく分枝し、葉を密生する。葉は線形で長さ8～12mmでツガザクラの仲間としては長い。花は釣鐘状で淡い紅色をして下を向いている。本県産のツガザクラ属には、他にアオノツガザクラ、エゾノツガザクラがあり、共に高山帯に生育している。

[選定理由] 県内分布は岩木山の1地点のみで、株数も多くない。高山の岩場地帯に僅かに生育している。雪害などで絶滅することも考えられる。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州北部。本県分布は岩木山。高山帯の岩場や岩礫地に生育している。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育地点への進入は極めて困難なので、採取による消失は考えられないが、植生変化や地形変化で衰退も考えられる。生育地点を保護区域に指定し、定期的な保護観察も必要である。

[特記事項] 日本固有植物。ツガザクラ（梅桜）の亜種で、別名をエゾノナガバツガザクラ（蝦夷長葉梅桜）という。
(木村啓)

被子植物リンドウ目 アカネ科

B

和名 フタバムグラ

環境省：該当なし

学名 *Oldenlandia brachypoda* DC.

[形態的特徴] 草丈15cmほどの1年草。茎は円柱形で細く、基部から枝分かかれし、斜上または横に広がっている。葉は線形で長さ3cm、幅3mmほどで、縁がざらつき、葉先は尖り基部は細くなり、殆ど柄が無く、対生している。花は白色筒状で先端が4裂し、葉腋につく。雄蕊は4本、雌蕊は1本、子房下位で2室に分かれている。

[選定理由] 県内分布は限られて、西津軽の低湿地に僅かに見られるのみである。生育地の湿地環境は厳しく、個体の増加傾向はみられない。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本・東アジア・熱帯アジア。日本分布は本州・四国・九州・沖縄。本県分布は、つがる市六沢溜池・西津軽郡深浦町切明沼。低湿地であるが、生育地点は極めて限られている。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育場所である低湿地の植生遷移が進み、本種の株数が減少している。環境保全が必要である。

[特記事項] 本県が北限の植物。
(木村啓)

被子植物リンドウ目 リンドウ科

B

和名 ホソバツルリンドウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Pterygocalyx volubilis* Maxim.

【形態的特徴】 山地の林縁などに生える多年草。ツルリンドウのように紫色を帯びることはなく、やや繊細である。葉は披針形で先は長く尖る。花は4数性で、花冠の先は4裂し、副片がない。花期10月。果実は蒴果。よく似たツルリンドウの花は5数性。果実は液化である。

【選定理由】 もともと産地・個体数の少ない植物で、環境改変・採取等によりさらに減少が進行している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内では全域に散発的にしか発見されなかったが、最近道路脇ののり面に出現することがあり、生態的な研究が必要である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村桑畑山・猿ヶ森・八戸市十日市で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物リンドウ目 キョウチクトウ科

B

和名 チョウジソウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Amsonia elliptica* (Thunb.) Roem. et Schult.

【形態的特徴】 川岸や林内などのやや湿った草地に生える多年草。茎は高さ60cm内外。葉は披針形で先は鋭くとがり、互生から一部対生。茎の先に青紫色の花をつける。花冠は筒状で、先が5裂して平開する。花期5～6月。

【選定理由】 開発および遷移進行により消滅の危険性がある。護岸工事等に際しては自然に配慮し、開発による水質悪化・水位変動の防止が必要である。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国に分布する。県内ではつがる市・鶴田町に希産する。近年の開田で生育地が減少し、今はため池の周辺などに残るだけである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査でつがる市稲垣・木造・鶴田町富士見湖で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物リンドウ目 キョウチクトウ科

B

和名 スズサイコ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Vincetoxicum pycnostelma* Kitag.

【形態的特徴】 日当たりのよい草地に生える多年草。茎は細くて直立し、高さ40～100cm。葉は長披針形から線状長楕円形、やや厚い。上部の葉腋に集散状のわん曲した花序を出し、黄褐色の花をまばらにつける。花は早朝に開き、日が当たると閉じる。花期7月。

【選定理由】 もともと広く分布するが個体数の少なかった種で、自然の牧野・採草地がなくなり、外来種の進出が多くなるとともに急激に減少した。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・ダフリアに分布する。県内では全域に点在し、自然度の高い草地にみられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で三沢市仏沼で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ナス目 ナス科

B

和名 ヒヨドリジョウゴ

環境省：該当なし

学名 *Solanum lyratum* Thunb.

[形態的特徴] つる状の多年草で、新しい枝が細長く伸び、葉柄で他物にからみつく。葉は互生し、卵形で深い切れ込みがあり、表面にも裏面にも短軟毛が密生する。花は集散花序に多数つき、花冠は白色で5深裂して裂片は反り返る。雄蕊は5個で葯が黄色でよく目立つ。雌蕊は1個で飛び出している。果実は、球形の液果で赤熟し、多数の種子が入っている。

[選定理由] 県内分布は津軽西海岸深浦地区で確認され、株数は極めて少ない。分布地点はそれぞれ孤立して、株の増加傾向にはない。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本・朝鮮半島・中国・インドシナ。日本分布は北海道・本州・四国・九州・沖縄。本県分布は西津軽郡深浦町。人里の林縁や路傍の藪地に生育している。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育環境は、林縁の藪地などで単独株である。藪地の刈り払いが行われれば消失する可能性が大きい。保護対策が必要である。

[特記事項] 和名は果実をヒヨドリが好んで食べることに由来。果実は有毒。 (木村啓)

被子植物シソ目 オオバコ科

B

和名 エチゴトラノオ

環境省：該当なし

学名 *Veronica ovata* Nakai subsp. *maritima* (Nakai) Albach

[形態的特徴] 草丈1mほどの多年草。茎は直立し先端に長い穂になった花序を出し、淡紫色の小花を密につける。小花は筒状で先端が深く4裂し、雄蕊2本と雌蕊1本が飛び出している。長穂に密に着いている小花は下方から上方へ順に開花していく。葉は対生し、披針形で長さ8cmほどの無毛葉をつける。葉の質は堅く、葉縁は浅い尖鋸歯で尖頭楔脚となる。

[選定理由] 県内分布は、津軽西海岸深浦地区の海岸草地で、株数は限られている。生育地点を継続調査しているが、株数が増加する傾向にはない。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本だけ。日本分布は本州東北地方の日本海沿岸部で福井県～青森県。本県分布は西津軽郡深浦町鱸作海岸～風合瀬海岸。海岸草地に生育しているが生育環境は極めて厳しい。

[生存に対する脅威と保存対策] 一部の生育地が道路に面し、草地が刈払われて当該種の姿が見られなくなった。進入禁止などの保存対策が必要である。

[特記事項] 本県が北限の植物。 (木村啓)

被子植物シソ目 オオバコ科

B

和名 シラガミクワガタ

環境省：該当なし

学名 *Veronica schmidtiana* Regel subsp. *senanensis* (Maxim.) Kitam. et Murata var. *shiragamiensis* (T.Yamaz.) Albach

[形態的特徴] 山地の岩場に生える多年草。地下茎から数本の茎が伸び、高さ20cm前後になる。葉は長柄があり根ぎわに多くつく。茎の先に青紫色の花を咲かせ、花卉の紫条が目立つ。東北地方に産するミチノククワガタとは、花が大きく、葉縁の鋸歯が規則的である点で区別される。花期は6～7月。

[選定理由] 白神山地の入山規制が実地されているが、採取などにより急激に減少している。

[分布と生態の概要] 本州（青森・秋田）。白神山地特産種である。ミヤマクワガタの仲間は通常ブナ帯以上の山地から高山の砂礫地に生えるが、本種はブナ帯の岩場や溪流沿いの岩場で確認されている。

[生存に対する脅威と保存対策] 園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。 (齋藤信夫)

被子植物シソ目 シソ科

B

和名 キセワタ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Leonurus macranthus* Maxim. var. *japonica*

【形態的特徴】 山地の草地や林縁に生える多年草。茎は直立し、高さ60～100cm。葉は卵形から狭卵形、欠刻状のあらい鋸歯があり、長さ5～9cm。花は上部の葉腋に輪状につき、花冠は紅紫色、外面は密に白毛があり、和名の通り綿を着せたようである。花期8～9月。

【選定理由】 もともと広く分布するが個体数の少なかった植物で、草地の減少および外来種の進出により、さらに生育地が失われてきている。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・ウスリーに分布する。県内では全域の草地に産するが、まれである。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)

(須藤智道)

被子植物シソ目 シソ科

B

和名 ヤマジソ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Mosla japonica* (Benth. ex Oliv.) Maxim.

【形態的特徴】 山地の日当たりのよい草地や裸地に生える小型の1年草。茎は高さ5～15cm、4角形で白毛がある。葉は卵形から狭卵形、長さ1～3cm。苞は卵形から広卵形で、長さ3～5mm、下部のものは萼より長い。花冠は淡紅色、長さ3mmで小さい。花期9月。

【選定理由】 牧野の牧草地化・森林化などで出現の機会もなくなり減少傾向にある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、朝鮮(南部)に分布する。県内では外ヶ浜町矢形石山・弘前市屏風岩・階上町階上岳・八戸市などで確認されている。山地の裸地や平地の造成地などに先駆的に出現し、植生遷移が進むと影を潜める。攪乱地依存の植物である。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)

今回の調査で外ヶ浜町矢形石山・八戸市鮫町小舟渡平・大久保金吹沢で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物シソ目 シソ科

B

和名 ミヤマウツボグサ

環境省：該当なし

学名 *Prunella vulgaris* L. var. *aleutica* Fernald

【形態的特徴】 山地の草地に生える多年草。茎は高さ10～30cm。全体ウツボグサに似ているが、茎の基部から匍枝を出さない点で区別される。花冠は紫色で、長さ1.5～2cm。花期6～7月。

【選定理由】 産地・個体数が少ないので、立ち入りや自然災害等により失われる危険性が大きい。

【分布と生態の概要】 北海道・本州(中部以北)、千島・ウスリー・カムチャツカ・アリューシャンに分布する。県内では津軽半島北部の岩場の草地に希産する。本州では高山生の植物であるが、低山地に生育している。北海道では海岸部から見られる。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)

今回の調査で外ヶ浜町鑄泊で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物シソ目 シソ科

B

和名 デワノタツナミソウ

環境省：該当なし

学名 *Scutellaria muramatsui* H.Hara

【形態的特徴】 草丈20cmほどの多年草。茎は長く這った地下茎から立ち上がり、卵状形で柄のある葉を対生させる。茎は四角柱、葉は円頭、葉縁は波形鋸歯、茎や葉には微毛がある。花は紫色の唇形で、下唇には紫斑が無いのが最大特徴。

【選定理由】 県内分布は津軽西海岸岩崎地区の湿生林地で、株数が少ない。生育環境は薄暗い流水域で、増加している傾向にはない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本だけ。日本分布は本州の近畿以北。本県分布は西津軽郡深浦町の山地谷川地帯で厳しい生育環境にある。

【生存に対する脅威と保存対策】 林内の流水域に生育しているので、増水などにより流失する心配がある。流失防止などの保存対策が必要である。

【特記事項】 本県が北限の植物。本県産のシソ科タツナミソウ属には、ヒメナミキ・デワノタツナミソウ・ヤマタツナミソウ・エゾタツナミソウ・ハマナミキソウ、エゾナミキソウの6種がある。

(木村啓)

被子植物シソ目 ハマウツボ科

B

和名 オニシオガマ

環境省：該当なし

学名 *Pedicularis nipponica* Makino

【形態的特徴】 草丈40～100cmの多年草。茎は直立し、葉とともに白色の軟毛を密生する。葉には茎につく対生葉と根元から出る根生葉がある。根生葉は大形の長楕円形で羽状に全裂し、裂片は深く裂ける。茎葉は小形で羽裂せず、上部の葉は苞となる。茎の先に花穂をつくり、まばらに花をつける。花は桃色の唇形で、長さ15cmほど幅6cmぐらいと大きく目立つ。

【選定理由】 県内分布は、津軽西海岸の河川上流部と岩木山麓の一地点で、株数は限られている。どの生育地点でも、株が増加する傾向にはない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本だけ。日本分布は本州石川県～青森県までの日本海側。本県分布は津軽西海岸の追良瀬川・吾妻川・笹内川の上流と弘前市湯段地区黒沢林道で何れも湿った谷間である。

【生存に対する脅威と保存対策】 河川沿いの湿気のある山道端にみられるが、崖崩れなどで埋没し、消失する心配がある。保護対策が必要である。

【特記事項】 日本固有種。本県が北限の植物。

(木村啓)

被子植物シソ目 タヌキモ科

B

和名 タヌキモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Utricularia japonica* Makino

【形態的特徴】 多年生の水生食虫植物。植物体は柔らかく、葉は糸状裂片に細かく分かれ、所々に補虫囊をつける。夏になると水上に直立する花軸を出して、上部に数個の花をまばらにつける。花は黄色で仮面状をして短い距をつける。

【選定理由】 県内分布は、全域に渡っている。沼や池などの浅い水中に浮遊しているが減少傾向にある。生育域を拡大する様子は見られない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・中国東北部・サハリン・南千島。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は西津軽郡・北津軽郡・東津軽郡・南津軽郡・中津軽郡・上北郡・下北郡・三戸郡。

【生存に対する脅威と保存対策】 一部の生育地では、池沼の乾燥化削除がみられる。また、開発による沼地の消滅もみられる。生育地保存の対策が望まれる。

【特記事項】 本県産タヌキモ属には、イヌタヌキモ・ミミカキグサ・フサタヌキモ・コタヌキモ・タヌキモ・オオタヌキモ・ヒメタヌキモ・ヤチコタヌキモ・ムラサキミミカキグサの9種がある。

(木村啓)

被子植物シソ目 タヌキモ科

B

和名 ヒメタヌキモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Utricularia minor* L.

【形態的特徴】 浅い池沼に生える多年生の水生食虫植物。軸は水底の沈殿物の中に伸び、所々に地中葉を泥中に出して固着する。水中葉は3～4回分枝し、まばらに補虫囊をつける。裂片の先には1～3本の刺がある。地中葉にも補虫囊がつく。夏に10cmほどの花軸を出して黄緑色花をつける。花はタヌキモより小さい。

【選定理由】 県内分布は、全域に渡っている。湿地や池沼のごく浅いところにみられ、減少傾向にある。生育域を拡大する様子は見られない。

【分布と生態の概要】 世界的分布はアジア・北アメリカ・ヨーロッパ等の周北地域。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布はつがる市屏風山の治右エ門沼と出来島2号溜池・上北郡小川原湖・下北郡尻屋崎。貧栄養な沼地や溜池や湿地に生育。

【生存に対する脅威と保存対策】 タヌキモと異なって、土中にも茎を伸ばして土壤微生物を捕食している。湿地土壌の乾燥化が進んでいるので、保護対策が必要である。

【特記事項】 冬に越冬芽をつくって本体は枯れる。(木村啓)

被子植物シソ目 タヌキモ科

B

和名 ムラサキミミカキグサ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Utricularia uliginosa* Vahl

【形態的特徴】 湿地に生える多年生の食虫植物。地下茎は白色糸状で地中を浅く這い、まばらに補虫囊をつける。葉は細いへら形で、地下茎の所々から地上に出る。夏には、細長い花柄を地上に直立させ、上部に総状花序をつけ、まばらに淡紫色の花を数個つける。花冠は上下に2裂して仮面状となる。

【選定理由】 県内分布地点は限られており、個体数も極めて少ない。そして、生育地の湿地帯は乾燥化や破壊などが見られ、株数増加の傾向にはない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州・四国・九州・沖縄。本県分布はつがる市屏風山・五所川原市長富・上北郡野辺地町・八甲田地区・小川原湖・六ヶ所村・東通村。貧栄養の湿地帯に生育し、環境変化に敏感である。

【生存に対する脅威と保存対策】 最近、五所川原市と野辺地町で確認されたが、生育個体は少なく自然消滅も心配される。環境改善などの保護対策が必要である。

【特記事項】 日本固有種。(木村啓)

被子植物キク目 キキョウ科

B

和名 キキョウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Platycodon grandiflorum* (Jacq.) A.DC.

【形態的特徴】 日当たりのよい草原に生える多年草。太い根茎が地に深く入る。茎は高さ50～100cm。葉は互生し、長卵形から広披針形。花は茎の先に数個つき、青紫色、まれに白色、径4～5cm。雄しべ先熟の代表的な植物で、雄しべが熟して倒れてから、雌しべの柱頭が5裂して開く。花期8～9月。

【選定理由】 最近では残された草地も外来種の侵入などにより自然度が低下し、まれな植物となっている。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州・沖縄、朝鮮・中国・ウスリーに分布する。県内では全域に産する。かつてはオミナエシなどと共に初秋の草原を彩ったが、草地の減少により1960年代頃から急激に影を潜めてしまった。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び放棄による環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。(齋藤信夫)

被子植物キク目 ミツガシワ科

B

和名 アサザ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Nymphoides peltata* (S.G.Gmel.) Kuntze

【形態的特徴】 湖沼やため池、河川の流れがよどむ場所、水路に生育する多年生の浮葉植物。地下茎を伸ばして生長する。葉は水面に浮かびヒツジグサに似て盾形、縁に浅い波状の鋸歯がある。黄色い花を咲かせる。花期は6～9月。

【選定理由】 開発や水質汚染で激減している。

【分布と生態の概要】 細井（2010）は「国内では北海道石狩を北限として本州・四国・九州に分布しているが、近年はまれになってきた。国外では北半球に広く分布する。県内では東津軽郡、西津軽郡にも知られていたが、東津軽郡では見当たらなくなったし、西津軽郡でもきわめてまれである。小川原湖はまだ目につくが少ない」と記している。近年、石戸谷（2017, 私信）はつがる市で確認している。

【生存に対する脅威と保存対策】 池沼や水路の護岸工事や水質汚染、さらに農薬に弱いため、現状を把握するための計画的なモニタリング調査を継続しつつ、随時、見直しと修正をしながら管理することが必要である。（齋藤信夫）

被子植物キク目 キク科

B

和名 オニオトコヨモギ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Artemisia congesta* Kitam.

【形態的特徴】 海岸岩石地に生えて、ハマオトコヨモギやオトコヨモギに似るが、全体は強壮であり、頭花も大きい。葉の裂片の切れ込みには個体差がある。

【選定理由】 基準産地は大間町弁天島である。分布域は下北半島の大間町・佐井村・道南。

【分布と生態の概要】 本種は上述のように、国内でも限られた分布域に産する固有種で、海岸の岩石地に生えるが、津軽半島からは見つかっていない（細井, 2010）。

【生存に対する脅威と保存対策】 園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

【特記事項】 細井（2010）は「昭和9年（1934）に村井三郎が田代善太郎を案内して大間町の弁天島に渡って採集した標本が基となった植物で、多分にハマオトコヨモギから分化した種のように思われる」と記している。（齋藤信夫）

被子植物キク目 キク科

B

和名 アサギリソウ

環境省：該当なし

学名 *Artemisia schmidtiana* Maxim.

【形態的特徴】 草丈15～50cmの多年草。全体が銀白色の絹毛で被われている。枝は多数に分かれ、花の重みで垂れ下がっている。茎葉は互生して2回羽状に全裂し、裂片は細くて1mmほどの幅。頭花は多数総状円錐花序につき、頭花には舌状花は無く筒状花ばかりである。

【選定理由】 県内分布は、城ヶ倉と追良瀬川と津軽半島であるが、生育株は極めて少ない。自生株は限られ、減少傾向にある。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・サハリン・千島列島南部。日本分布は北海道・本州の東北地方と北陸地方。本県分布は青森市城ヶ倉溪谷・深浦町追良瀬川上流など。深山溪谷の岩場などの厳しい環境を生育場所としている。

【生存に対する脅威と保存対策】 自生地は、何れも河川上流の急斜面で、崩落による消失が認められる。生育地の保護対策が望まれる。

【特記事項】 和名は、草姿と色彩が朝霧状況を思わせることによる。（木村啓）

被子植物キク目 キク科

B

和名 クモマニガナ

環境省：該当なし

学名 *Ixeridium dentatum* (Thunb.) Tzvelev subsp. *kimuranum* (Kitam.) J.H.Pak et Kawano

[形態的特徴] 亜高山帯から高山帯に生える多年草。高さ7～35cm。根生葉は楕円形で幅1～2.5cm。

[選定理由] 八甲田山大岳が基準産地の希産種である。

[分布と生態の概要] 北海道・本州に分布する。細井（2010）は「県内では八甲田山井戸岳・赤倉岳の噴火口の石礫地帯によく見られ、他に下北半島の釜臥山・朝比奈岳にもあるのに岩木山や白神山地にはない」と記している。須藤（2018, 私信）は八甲田山の太岳で確認した。

[生存に対する脅威と保存対策] 園芸採取及び自然災害などの環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

[特記事項] 細井（2010）は「白花品シロバナクモマニガナ form. *albescens* Kitam.もまれに見られ、基準産地は富山県立山である」と記している。(齋藤信夫)

被子植物キク目 キク科

B

和名 タカサゴソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Ixeris chinensis* (Thunb.) Nakai subsp. *strigosa* (H.Lév.et Van.) Kitam.

[形態的特徴] 日当たりのよい草地に生える多年草。茎は高さ20～40cm。根生葉が多く、葉縁は羽状に裂けるものから全縁まで変化がある。茎葉は少ない。花は淡紫色を帯びた白色、径2～2.5cm、小花は23～27個（よく似たシロバナニガナは8～11個）。花期6～7月。

[選定理由] かつて馬の放牧が行われていた頃の牧野や採草地にやや普通にみられたが、1960年代頃から草地の減少と自然度の低下により、急に影を潜めてしまった。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州・朝鮮に分布する。県内では全域に産したが、今はごくまれである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）(須藤智道)

被子植物キク目 キク科

B

和名 ウスユキソウ

環境省：該当なし

学名 *Leontopodium japonicum* Miq.

[形態的特徴] 山地から亜高山の岩場や礫地に生える多年草。茎は高さ20～50cm。根生葉は花時にない。茎葉は披針形から狭楕円形、裏面に白綿毛がある。茎頂に数本の枝を出し、中心部の枝に雄性頭花、周辺部に雌性頭花をつける。その下の苞葉は白綿毛をかぶり目立つ。花期7～8月。

[選定理由] 産地・個体数が少なく、自然災害等により失なわれる危険性がある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国・九州、中国に分布する。県内では八甲田山・白神山地に希産する。沢沿いの雪崩斜面の中程の岩石地に生育する。

[生存に対する脅威と保存対策] 園芸採取及び自然災害などの環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。(齋藤信夫)

被子植物キク目 キク科

B

和名 ムツトウヒレン

環境省：該当なし

学名 *Saussurea hosoiana* Kadota

[形態的特徴] 海岸草原に生育する茎の高さ30～40cmの多年草。花期は9月。花期にも根生葉が生存する。風の強い海岸に生えるため葉が革質で光沢がある。茎は良く分枝して花序を多数つける。最上部には3～8個の頭花が集合している。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 本県の六ヶ所村泊物見崎のクロマツ林床に生育する。このクロマツ林は高さ5mほどで低木層を欠き、海からの強風をつよく受ける風衝地の環境である。また六ヶ所村泊中山崎・東通村尻屋に産する。

[特記事項] 門田裕一により2008年新種として発表された。(須藤智道)

被子植物キク目 キク科

B

和名 ハチノヘトウヒレン

環境省：該当なし

学名 *Saussurea neichiana* Kadota

【形態的特徴】 海岸草原に生育する茎の高さ40～80cmの多年草。花期は9月。他のトウヒレンから、総苞片は8列、総苞外片は長卵形で先端は鋭形となり尾状に長く伸長しない、茎には良く発達した翼があり鋸歯縁となることがある、また葉が革質となるなどの特徴で区別される。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 本県の八戸市周辺の海岸草原に生育する。鮫町小舟渡平～種差～金浜に分布する。

【特記事項】 門田裕一により2008年新種として発表された。

(須藤智道)

被子植物マツムシソウ目 スイカズラ科

B

和名 リンネソウ

環境省：該当なし

学名 *Linnaea borealis* L.

【形態的特徴】 常緑小低木で、茎は長く地を這い、地下茎により個体群を維持していることが多いといわれる。長さ5～10cmの花茎には腺毛があり、先端で二股に分かれ、淡紅色の花を下向きに2個開く。花冠は長さは約1cmの漏斗状鐘形で先は5裂する。花期は7～8月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、北半球に分布する。亜高山帯から高山帯のハイマツ林下などに生える。県内では八甲田山の一部に産する（細井, 2010；須藤, 2018, 私信）。

【特記事項】 園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。（齋藤信夫）

被子植物マツムシソウ目 スイカズラ科

B

和名 ウコンウツギ

環境省：該当なし

学名 *Macrodiervilla middendorffiana* (Carrière) Nakai

【形態的特徴】 樹高1mほどの落葉低木。葉は対生し、長楕円形で長さ5～10cm、幅4～5cm、鋭頭楔脚で、脈上に毛があり、柄は短い。花は、淡黄色のローツ状唇形花冠で、上唇は3深裂、下唇は2深裂する。花筒内面の下部に橙色網紋がありよく目立つ。雄蕊5本で、花糸下部に毛が多い。

【選定理由】 県内分布は岩木山と弘前市久渡寺山であるが、岩木山では増加傾向は全く無く、久渡寺山では、近年の存在確認が出来ていない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・千島列島・サハリン・オホーツク・アムール。日本分布は北海道・本州（東北地方）。本県分布は岩木山九合目風穴付近。一般的には、高山帯の岩場窪地などに群落を形成して生育しているのであるが、本県の場合は小塊群である。

【生存に対する脅威と保存対策】 岩木山での生育状況は厳しく、生育地点の崩落などの環境変化で絶滅も心配される。保全対策が必要である。

【特記事項】 県内他の高山帯では見られない岩木山の象徴植物の1つである。

(木村啓)

被子植物マツムシソウ目 スイカズラ科

B

和名 カノコソウ

環境省：該当なし

学名 *Valeriana fauriei* Briq.

[形態的特徴] 草丈40～80cmの多年草。細長い地下茎を横走させ、節から太い根を多数出す。茎は直立し羽状葉を対生につけ、上部に散房花序の淡紅色花を密につける。花形は筒状で先端が5深裂し、雄蕊3本が花外に飛び出し、雌蕊は1本で先端が3裂している。雄蕊先熟なので、雄蕊の葯が出終わってから雌蕊が伸びてくる。果実が熟すと白色羽根状の冠毛が伸びてくる。

[選定理由] 確認している自生地4か所の継続調査をしているが、減少が続いているためランクをCからBにした。また、自生地の植生遷移が進み、生育範囲が狭まっている。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本・朝鮮半島・中国東北部・サハリン。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は竜飛崎・算用師峠・津軽半島青岩草原・尻屋崎草原。海岸に面した草原に生育している。

[生存に対する脅威と保存対策] 自生地点の1か所は県道端で、道路拡張などにより、消滅も心配されるので留意が必要である。

[特記事項] 根が精神安定剤としての効用があるので採取される心配がある。 (木村啓)

被子植物マツムシソウ目 スイカズラ科

B

和名 ツルカノコソウ

環境省：該当なし

学名 *Valeriana flaccidissima* Maxim.

[形態的特徴] 林下の湿り気のある場所に生える多年草。全体軟弱で、茎は高さ20～50cm。花後細長い走出枝を伸ばして新苗をつくる。葉は対生し、羽状に全裂する。花は散房花序につき、花冠は小さく2mm内外、白色から淡紅色。花期5月。そう果に羽状の冠毛がある。

[選定理由] 人里にみられる植物で、開発等により次第に減少している。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州に分布する。県内では太平洋側南部に産し、北限である。八戸市新井田川流域にしばしば小群がみられる。水流と風散布に関係し、流域によって量的な差がある。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)

今回の調査で五戸町又重・八戸市是川・南郷区島守巻での生育が確認できた。 (須藤智道)

被子植物セリ目 セリ科

B

和名 ハナビゼリ

環境省：該当なし

学名 *Angelica inaequalis* Maxim.

[形態的特徴] 山地の谷間に生える多年草。茎は高さ60～80cm。葉は2、3回3出羽状、やや薄く、小葉は粗い鋭鋸歯がある。散形花序の大花柄は不同長。花卉は暗紫色を帯びる。花期9月。果実は広楕円形で著しい翼がある。

[選定理由] 産地・個体数が少なく、ダム建設により消滅した所もある。流域には採石場が多く、残された生育地にも進出する危険性がある。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州に分布する。日本固有。県内では八戸市の新井田川流域に数か所産する。北限である。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)

今回の調査で八戸市南郷区島守巻で生育が確認できた。 (須藤智道)

ヒカゲノカズラ類ミズニラ目 ミズニラ科

C

和名 ヒメミズニラ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Isoetes asiatica* (Makino) Makino

山地から高地の池沼の底に生育する小型の夏緑性シダ植物。塊茎は径0.5～2cm、一条の溝があって浅く2分している（ミズニラは3分）。葉は単葉で束生する。孢子嚢は葉のつけ根が白色に膨らんだ部分につく。

北海道・本州（中部以北）、ロシア（極東）・南千島に分布する。県内では東通村尻屋崎・八甲田山系・深浦町十二湖に産するが、個体数は少ない。

貧栄養の水中に生育する植物なので、開発や立ち入りによる水質悪化、自然災害や道路工事による土砂流入等に注意する必要がある。（須藤智道）

ヒカゲノカズラ類ミズニラ目 ミズニラ科

C

和名 ミズニラ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Isoetes japonica* A.Braun

夏緑性で鮮緑色の柔らかい沈水性または抽水性の多年生のシダ植物である。細井（2010）は「県内の採集記録は2、3にとどまっているが、分布域はもっと広いと思われる。国内の分布は北海道（胆振）、本州・四国・九州。沼、池、川の底やまれに湿地にも生じる。生育地の埋め立てや生活排水の流入等により急激に減少した」と記している。（齋藤信夫）

ヒカゲノカズラ類ミズニラ目 イワヒバ科

C

和名 イワヒバ

環境省：該当なし

学名 *Selaginella tamariscina* (P.Beauv.) Spring

山地の岩上に生育する常緑性シダ植物。根がからみあって仮幹をつくり、葉身状の枝を放射状に何十枚もつける。孢子嚢穂は小枝の先につける。乾燥に強く、乾燥してくると内側に巻き込み、湿度が上がると復元する。岩上に生育し、ヒノキの葉に似た分枝の形状によりイワヒバと名付けられた。

日本（全域）、ロシア（極東）・朝鮮・中国・台湾・インド（北部）・東南アジアに分布する。県内では白神山地・八甲田山系等に点在する。

江戸時代から観葉植物として栽培され、多くの園芸品種がある。県内では産地・個体数共少ないので、今後園芸採取の防止が必要である。（須藤智道）

大葉シダ植物ウラボシ目 メシダ科

C

和名 コウライイヌワラビ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Deparia coreana* (Christ) M.Kato

葉身50cm前後の中型の夏緑性シダ植物。オオメシダに似ているが、葉は小さく、羽片は狭く、葉柄や中軸も細い。孢子嚢群は円形から鉤形で小羽片の中肋と辺縁の中間からやや中肋寄りにつく。

高麗（朝鮮）で発見され、イヌワラビに似ているのでコウライイヌワラビと名付けられた。

北海道（胆振）・本州（新潟以東）・四国（愛媛）・九州（対馬）、朝鮮・中国に分布する。県内では八戸市・三沢市・十和田市・七戸町・五戸町・おいらせ町・東北町・深浦町などに点在する。いずれの生育地も個体数は少ない。戦前の記録がなく、戦後植林されたスギ林で発見する例が多いことから、最近の暖温帯シダ類の進出と同様に考えられることもあるが、森林の伐採・環境変化により減少傾向にある。（須藤智道）

双子植物コショウ目 ウマノスズクサ科

C

和名 ミチノクサイシン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Aristolochia fauriei* Franch. var. *fauriei*

湿り気のある林下に生える常緑の多年草。茎は地をはい節間が長い。葉は広卵形から腎円形、3cm内外。花は径1~1.5cm。萼筒は短い鐘形。花期4月中旬~5月。類似種のトウゴクサイシン・オクエゾサイシンは、夏緑性で、葉は大きくて卵心形である。

本州（東北地方・新潟・長野）に分布する。県内では低地のハンノキ林下に見出されることが多いが、山地のブナ林下にも産する。

過去の開田から最近の工業用地造成に伴う湿原開発がなければ、広範に分布していたものと考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で五所川原市飯詰・鱒ヶ沢町シノブ谷地・むつ市大室平・六ヶ所村市柳沼・平沼・東北町浜台・六戸町金矢・八戸市尻内町で生育が確認できた。（須藤智道）

被子植物オモダカ目 シバナ科

C

和名 シバナ（オオシバナ）

環境省：準絶滅危惧

学名 *Triglochin asiatica* (Kitag.) A. et D.Löve

塩性湿地に生える多年草。茎は高さ15~50cm。叢生する。総状花序で密に花をつける。果実は楕円形で、長さ3~5mm。類似種ホソバナシバナは、果実が線形で、長さ約9mm。

北海道・本州（東北地方）、北半球の温帯に広く分布する。県内では全域の海岸に産する。太平洋側の尾駮沼・鷹架沼・高瀬川河口部に群生地がある。平坦な砂泥地や岩間の砂礫地で時折海水に浸る辺りに生育する。

海岸部の開発が進み減少している。現状ではまだ危機感は薄いですが、今後の開発、護岸工事等により情勢は変わってくる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で六ヶ所村尾駮沼・鷹架沼・高瀬川河口・八戸市鮫町小舟渡平・階上町榊浜で生育が確認できた。（須藤智道）

被子植物キジカクシ目 ラン科

C

和名 エビネ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Calanthe discolor* Lindl.

草丈30~40cmの多年草。葉は長楕円形で束生し、長さ20cmほど。花は直立した花柄の上部に10個ほど着き、淡紫色をしている。地下茎は連球状である。県内各地のスギ林床に多く見られる。

近年の実地調査で、各地の林地に普通に見られるようになってきている。以前のように、掘り取られることは殆ど無くなっていて、年々増加傾向にありBからCへのランク変更が適当である。

県内各地の植物調査でスギ林に入ると、必ずと言っていいほど確認している。以前に見られた、掘り取り形跡も無くなって、生育環境が良好に保たれている。

世界的分布は日本・朝鮮半島。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は全域。

(木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科

C

和名 ハクウンラン

環境省：該当なし

学名 *Kuhlhasseltia nakaiana* (F.Maek.) Ormerod

ブナ林や特にヒバ（ヒノキアスナロ）林またはブナ・ヒバ混交林に生える。高さ5~15cmで茎先に白色の花を1~7個つける。花期は7~8月。県内各地の林内でみられるが、数は減少しており、将来絶滅が予想される。細井（2010）は「オオハクウンランとハクウンランを同一種とする人と、オオハクウンランの染色体がn=20、ハクウンランの染色体がn=13として別種とする人がある」と記している。成田（2016, 私信）は五所川原市・大鰐町・深浦町などの林下で確認している。

(齋藤信夫)

被子植物キジカクシ目 ススキノキ科

C

和名 ノカンゾウ

環境省：該当なし

学名 *Hemerocallis fulva* L. var. *disticha* (Donn ex Ker Gawl.) M.Hotta

葉は扁平であって、下方はやや内折し、長さ50～70cm。花は橙赤色で長さ12cm。花期は7～8月。

本州・四国・九州、国外では琉球・台湾・中国に分布する。県内での、記録は極めて少ない。

生育地が住宅地・道路・田・畑になり、生育地が狭くなりつつある。土地、道路の造成に際しては十分注意する。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(細井, 2010)を引用) 今回の調査で五所川原市前田野目・六ヶ所村尾駸で生育が確認できた。(須藤智道)

被子植物イネ目 ガマ科

C

和名 ミクリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Sparganium erectum* L.

草丈50～100cmで池や沼や溝に生える多年草。根茎は短く走出枝を出し、葉は叢生し茎よりも長く軟らかく線形で1本の稜がある。夏に葉の間から茎を直立させ、上部が分枝して花穂となる。花後には集合果球となり緑色の突起が多い。

生育地である水辺や溝がコンクリートなどで改良整備され、個体数が急激に減少している。整備にあたっては、水底や側面に土壌が残るなどの配慮した工法が必要である。

世界的分布は日本・アジア・ヨーロッパ・北アフリカ。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は西津軽郡・北津軽郡・東津軽郡・南津軽郡・中津軽郡・上北郡・三戸郡・下北郡。

(木村啓)

被子植物イネ目 ガマ科

C

和名 ナガエミクリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Sparganium japonicum* Rothert

茎は直立し、高さ40～70cm。花序は単純で苞は通常花序より長い。雌性頭花は3～4個、下方の1～2個は多くは有梗、果時は径1.5～2cm、5～10個の雄性頭花は互にやや離れてつく。

埋め立てなどで生育地が少なくなり、県内での絶滅が心配される。

本州・四国・九州の沼畔、池溝にはえる。朝鮮に分布する。

生育地の環境を変えぬよう注意する必要がある。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(細井, 2010)を引用) 今回の調査でむつ市田名部土手内・十和田市向切田で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物イネ目 イグサ科

C

和名 セキショウイ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Juncus covillei* Piper

湿地に生える多年草。地下に長い匍枝がある。茎は高さ20～40cm。葉は扁平でイネ科状、長さ10～30cm、幅2～3mm。頭花は3、4個、花被片は長さ3.5～4mm。果実は花被片よりやや長く、楕円形で凹頭。

北海道・本州(青森・岩手)、千島・カムチャツカ・北アメリカに分布する。県内では太平洋側の海岸部およびむつ湾東岸に点在し、六ヶ所村高瀬川河口部に小群がみられる。日当たりのよいやや砂質の湿地に生育する。原子力関連の開発により失われた所もあり、開発や植生遷移の進行により減少している。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用) 今回の調査で東通村尻屋崎で生育が確認できた。(須藤智道)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

C

和名 エゾサワスゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Carex viridula* Michx.

湿地に生える多年草。全体やや小型で硬質。茎は叢生し、高さ10～30cm。匍枝はない。葉は直立し、幅1.5～2.5mm。小穂は直立。最下の苞は葉状で、長くて開出し、短鞘がある。

北海道・本州（中部以北）、千島・サハリン・カムチャツカ・北アメリカに分布する。県内では太平洋側の三沢市から下北半島まで点在し、むつ湾岸にも産する。海岸部の日当たりの砂質湿地に生育することが多い。

原子力関連の湿原開発および遷移の進行により減少している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で東通村尻屋崎・横浜町吹越で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物イネ目 カヤツリグサ科

C

和名 ミチノクホタルイ

環境省：該当なし

学名 *Schoenoplectus orthorhizomatus* (Kats.Arai et Miyam.) Hayas. et H.Ohashi

低山地から低地の湿地に生えているミヤマホタルイに似た種類で、地下茎が発達せず株立ちとなり、花序のところで針状苞が曲折する。

近年識別された種で、従来ミヤマホタルイと混同されていた。

北海道と本州北部に分布し、県内各地に分布しているが、調査が十分でないために詳しいことは解っていない。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）今回の調査でむつ市田名部赤川・青森市田代平・新郷村迷ヶ袋で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

C

和名 ヒメキンポウゲ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Halerpestes kawakamii* (Makino) Tamura

塩性湿地に生える多年草。小型で高さ5～12cm。細長い匍枝を出して増える。花は径約6mm。花期6～8月。

日本の特産種で、本州の太平洋側は青森県から千葉県（最近消息不明といわれる）まで、日本海側は秋田県まで分布する。県内では太平洋側に多く、尾駮沼流出部と高瀬川河口部に群生地があり、時折海水に浸る平坦な砂泥地に生育する。八戸海岸では岩間の湿地にみられる。

海岸開発・護岸工事・砂採掘および生活排水・産業排水の流入等により減少している。尾駮・高瀬川河口部の群生地は保存を考える必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で六ヶ所村老部川河口・尾駮沼・高瀬川河口・八戸市種差・階上町榊浜で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科

C

和名 オオウマノアシガタ

環境省：該当なし

学名 *Ranunculus grandis* Honda var. *grandis*

湿り気のある林下や草原に生える多年草。ウマノアシガタに似ているが、全体大型で茎は高さ30～100cm。地下に匍枝を出すのが特徴である。花期6月。

本州の岩手県と青森県だけに分布する北上山系固有種である（菊地, 1967）。県内では太平洋側南東部の北上山系北部に相当する地域に点在し、三沢市八幡が北限である。海岸草原や山間の流れのほとりなどに小群で見られる。

人里で発見されることがあり、環境適応性もあると考えられる。開発に合わなければ保存可能であるが、ウマノアシガタと混同しないよう注意が必要である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で田子町堅田・南部町相内・三沢市八幡・八戸市南郷区島守巻ノ下・鮫町大須賀で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ユキノシタ目 スグリ科

C

和名 ヤシャビシヤク

環境省：準絶滅危惧

学名 *Ribes ambiguum* Maxim.

樹高30～50cmの落葉低木でブナやミズナラの老木樹上に根をおろしている。葉は円腎臓形で長い柄がある。雌雄異株で、雌株は腺毛密生の球形果実をつける。

生育環境となる自然度の高い落葉樹林が減少し、それに伴って本種の姿が少なくなっている。本種が着生する老木が少なくなると、本種の絶滅が心配される。

自然度の高い落葉樹林の伐採が進み、同時に本種の着生木も少なくなっている。本種を津軽ではラショウと呼び、盆栽などに育て珍重している。

世界的分布は日本・中国。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は全域であるが個体は少ない。

(木村啓)

被子植物ユキノシタ目 ベンケイソウ科

C

和名 コモチレンゲ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Orostachys malacophylla* (Pall.) Fisch. var. *boehmeri* (Makino) H.Hara

細井(2010)は「青森県の岩石地海岸にはコイワレンゲに混じってよく見かけるし、時には純群落を作ることもある。牧野は“子持ち”の意を数cmの若い茎を伸ばしてその先端に小苗をつける個体をさしてコモチと命名した。(大橋ら, 2008)」と記している。

(齋藤信夫)

被子植物ユキノシタ目 ベンケイソウ科

C

和名 ハコダテキリンソウ

環境省：該当なし

学名 *Phedimus ellaconbeanus* (Praeger) 't Hart

細井(2010)は「キリンソウに似て秋には花の基部の葉腋に越冬芽をつけて枯れずに残る。鞘果は、キリンソウよりも広がって開裂する。北海道と本県に産し、北海道の函館山には普通に見られ、渡島半島の津軽海峡側と日本海側にも分布している。県内では下北半島と青森市浅虫海岸、夏泊半島にもある。キリンソウと同じ環境に生えるが、ずっと少なく、岩石地が多い。普通のキリンソウと似ているので、本種のみ乱獲される心配はないが、開発に当たっては注意したい」と記している。

(齋藤信夫)

被子植物ユキノシタ目 タコノアシ科

C

和名 タコノアシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Penthorum chinense* Pursh

湿地に生える多年草。茎は高さ30～80cm、淡紅色を帯びることが多い。葉は互生し、狭披針形から長楕円形、細鋸歯がある。花序は放射状に出て多数の花をつける。花期7～8月。

本州・四国・九州、東アジアに広く分布する。県内では全域に産するが局所的である。河原や休耕田に先駆的に出現し、しばしば群生することもあるが、その後植生が変わるにつれて数年で影を潜めてしまう。出現の度合いは河川流域によって異なる。

最近休耕田が増え、出現の機会が巡ってきているが、水田や河岸の整備等により今後は減少に向かう可能性がある。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用) 今回の調査でつがる市蝦夷ヶ館溜池・八戸市新井田松館・内舟渡馬淵川原・尻内町堤下で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ユキノシタ目 アリノトウグサ科

C

和名 タチモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Myriophyllum ussuriense* (Regel) Maxim.

沼や湿地に生える雌雄異株の多年生水草。水位に合わせて沈水形・抽水形・陸生形となり、多様な生育形態をみせる。地上では柱状の茎を直立させ10cmほどとなり、線状形～羽状形の葉をつける。茎の下部では対生、上部では輪生となる。水中の茎は50cmほどに伸びる。雄花の花弁は4個で淡紅色、雄蕊8個、雌花は萼筒先端に白毛密生の柱頭を4個つける。

環境変化に敏感で、急激に個体を減少させている生育地もある。湿地の乾燥化や開発を防ぎたい。世界的分布は日本・朝鮮半島・中国。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は分布は県内全域であるが、生育地点は少ない。生育地である沼や湿地の環境悪化が進み個体の減少が見られる。
(木村啓)

被子植物バラ目 バラ科

C

和名 ヒロハノカワラサイコ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Potentilla niponica* Th. Wolf

日当たりの良い河原や砂地に生える多年草。萼片・副萼片・花柄・茎などに毛が多い。茎はよく分岐し地面を這うように四方に伸びる。葉は奇数羽状複葉。表面は緑色、裏面は白い綿毛が密生する。花は直径1～1.5cmで黄色。花期は6～8月。かつてはごく普通の野草だったが、採草地の減少、里山の放置などで生育環境が激変したことにより、オキナグサやキキョウなどとともに、身近な野草ではなくなっている。須藤（2017, 私信）は東通村・八戸市・階上町・六ヶ所村で本種を確認している。
(齋藤信夫)

被子植物バラ目 バラ科

C

和名 ツルキジムシロ

環境省：該当なし

学名 *Potentilla stolonifera* Lehm. ex Ledeb.

日当たりの砂礫質の草地に生える多年草。山野に普通なキジムシロによく似ているが、長い匍匐枝を伸ばして新苗を生じる。花期6月。

北海道・本州・四国・九州、朝鮮（済州島）・千島・サハリン・カムチャツカに分布する。県内では津軽半島に1か所小群で産する。本州産は北方のものより小型とされているが、東北地方では本県だけに分布し、北海道の分布域に入り、大きさはキジムシロとさして変わらない。

産地・個体数が少なく、生育地が岩場下部の草地で、崩壊・埋没等自然災害による危険性がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で外ヶ浜町鑄泊で生育が確認できた。
(須藤智道)

被子植物バラ目 バラ科

C

和名 コガネイチゴ

環境省：該当なし

学名 *Rubus pedatus* Sm.

亜高山帯から高山帯の針葉樹林下に生える多年草。茎は地上を這い5～10cmの花茎を立てる。小葉は3～5裂し、鈍頭（類似種ゴヨウイチゴ・ヒメゴヨウイチゴの小葉は鋭尖頭）。県内では南八甲田の横岳のハイマツの下にまれに生えている他には未だに別の産地は知られていない（細井, 2010）。
(齋藤信夫)

被子植物キントラノオ目 トウダイグサ科

C

和名 ノウルシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Euphorbia adenochlora* C.Morren et Decne.

湿地に生える多年草。茎は高さ30~60cm、傷つけると白い乳液を出し、それにふれるとかぶれる。茎の先に5枚の輪生葉をつけ、散形状に枝を出して杯状花序をつける。鮮やかな黄色が目立つのは苞葉である。腺体は腎形。花期4~5月。果実はイボ状の突起がある。

北海道・本州・九州に分布する。県内では全域に点在し、河岸や湖沼周辺のヨシ湿原に群生することがある。

湿原開発により消滅した所もある。水質悪化などで減少傾向にある。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用) 今回の調査でつがる市森田・むつ市金谷沢・横浜町向平・六ヶ所村高瀬川河口で生育が確認できた。
(須藤智道)

被子植物キントラノオ目 トウダイグサ科

C

和名 シナノタイゲキ

環境省：該当なし

学名 *Euphorbia sinanensis* (Hurus.) T.Kuros. et H.Ohashi

茎は無毛または有毛。果実の突起は半球形。葉裏に毛が多く、子房に毛がない。落葉樹林の林床や林縁に生え、植物体の上部に葉を多くつける。葉は茎の下方では互生、頂部では5枚輪生する。外観はナツトウダイに似ているが苞が小さく、腺体はタカトウダイに似る。県内での分布は三八地方・十和田市・六ヶ所村の太平洋側。黒沢(1994)はシナノタイゲキとタカトウダイの種分化について述べている。まだ十分調査されていないが本州中北部に希産する。落葉樹林の伐採に十分留意する必要がある。
(齋藤信夫)

被子植物キントラノオ目 スミレ科

C

和名 アリアケスミレ

環境省：該当なし

学名 *Viola betonicifolia* Sm. var. *albescens* (Nakai) F.Maek. et T.Hashim.

地上茎が無いスミレ属でシロスミレに酷似するので要注意。本県が北限の植物。

近年の継続調査で、津軽地方各地で多数の株が確認されるようになった。特に、つがる市森田地区の湖沼端には数千株の大群落を形成している。年を追う毎に、新しい生育地点確認と株数が多くなっているので、BからCへのランク変更が適当と考えた。

生育地は、適度に攪乱された低湿潤地であるが、この条件の場所が多く見られるようになったので、青森市浪岡地区吉野田湧水池・つがる市森田地区狄ヶ館溜池・つがる市森田地区新小戸六ダム・つがる市平滝沼地区など、各地で記録されるようになった。
(木村啓)

被子植物キントラノオ目 スミレ科

C

和名 イソスミレ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Viola grayi* Franch. et Sav.

草丈10cmほどの多年草。地下茎は木化し太くて硬く、砂中を長く這っている。茎はそう生し、円心臓形で厚く光沢のある葉をつける。花は淡紫色で距は白色、側弁は無毛である。

県産スミレ属は81種が記録されているが、唯一海岸砂地に適応した種である。県内各海岸の砂地に群落を形成して見られるが、生育環境は厳しい。砂地の移動や海辺の護岸などで姿を消している状況もある。生育している海岸砂地の保存が必要。

世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道西南部・本州日本海側青森県~鳥取県・本州太平洋側八戸。本県分布は津軽西海岸・津軽半島小泊海岸・陸奥湾野辺地海岸・尻屋海岸。日本固有種。
(木村啓)

被子植物キントラノオ目 スミレ科

C

和名 ゲンジスミレ

環境省：該当なし

学名 *Viola variegata* Fisch. ex DC. var. *nipponica* Makino

明るい林下に生える多年草。地上茎はない。葉は広卵心形。花は淡紅紫白色。花期4月下旬～5月上旬。和名は全体紫色を帯びることから、紫式部と源氏物語にかけたものといわれる。基本種フイリゲンジスミレ（中国原産）は観賞用として栽培されている。

本州（北中部・岡山）・四国（愛媛）に隔離分布する。県内では太平洋側南部の丘陵地に点在し、岩手県北部と1つの分布域をなしている。落葉広葉樹林のやや乾燥した場所にみられる。

各産地とも個体数は少なく、落葉広葉樹林伐採・スギ植林地化などにより減少している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で八戸市櫛引・階上町平内で生育が確認できた。
(須藤智道)

被子植物キントラノオ目 オトギリソウ科

C

和名 エゾオトギリ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Hypericum yezoense* Maxim.

日当たりの岩場に生える多年草。茎は高さ10～30cm、2条の隆起線があり、その線上に黒点が並ぶことで他のオトギリソウ類と区別できる。葉は長楕円形で、明点が多く縁に黒点がある。花弁には明点と明線があり、縁に黒点がある。花期6～7月。

北海道・本州（北部）、千島・サハリンに分布する。県内では全域の岩場に点在する。

各産地共個体数は少ない。他のオトギリソウ類と混同されていることもあり、その消長ははっきりしない。採石場開発・自然災害による減少の危険性がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で佐井村縫道石山・八戸市南郷区島守で生育が確認できた。
(須藤智道)

被子植物フウロソウ目 フウロソウ科

C

和名 チシマフウロ

環境省：該当なし

学名 *Geranium erianthum* DC.

草丈30cmほどの多年草。茎や葉柄に下向きの圧毛が散生し、萼片には開出毛が密生するが腺毛は少ない。花は青紫色の5弁で、花弁の基部付近に開出毛がある。

本県分布は八甲田山系と白神山地の高山帯と津軽半島の高地草原であるが増加する傾向にはない。高山草地の環境変化により群落が貧弱になっている。特に、津軽半島の生育地では岩礫の崩落が続き、確実に少なくなっている。保存対策が必要である。

世界的分布は日本・シベリア東部・北アメリカ北部。日本分布は北海道・本州北部。本県分布は八甲田山系・白神山地の高山帯・津軽半島の高地草原。
(木村啓)

被子植物アブラナ目 アブラナ科

C

和名 ハクサンハタザオ

環境省：該当なし

学名 *Arabidopsis halleri* (L.) O'Kane et Al-Shehbaz subsp. *gemmifera* (Matsum.) O'Kane et Al-Shehbaz var. *senanensis* (Matsum.) Yonek.

山地に生える多年草。茎は株状で高さ10～30cm、花が終るころ倒伏して新苗を出す。根出葉は頭大羽状に分裂する。花期5～6月。角果はじゅず状にくびれる。

北海道・本州・四国（剣山）・九州（宮崎）に分布。県内では鱒ヶ沢町・深浦町・東通村に産する。本州では低地から亜高山帯まで広くみられるといわれるが、北部の本県ではまれである。やや日当たりの湿った場所に生える。よく似たミヤマハタザオはやや乾燥した所に生え、茎は倒伏せず、角果は棒状である。

産地・個体数が少なく、開発・自然災害により減少の危険性がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で深浦町追良瀬川上流の岩場で生息が確認できた。
(須藤智道)

被子植物アブラナ目 アブラナ科

C

和名 オオユリワサビ

環境省：該当なし

学名 *Eutrema okinosimense* Taken.

細井（2010）は「青森県で通称ユリワサビと呼ばれて食べられてきた植物は夏になると葉が全部枯れ、地下に残った葉柄基部が肥厚してユリの鱗茎状になる。秋に新葉を出して越冬し、ワサビと同じ4～5月に開花する。ところが、本種は本来のユリワサビとは異なり、福岡県の沖ノ島から竹内（1935）によってオオユリワサビとして発表されたものと同じであることが判明した。その後全国的に分布することが分かってきた。青森県にも点在するが、開発等により減少傾向にある（鳴橋ら、2000）」と記している。

(齋藤信夫)

被子植物ナデシコ目 タデ科

C

和名 ノダイオウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Rumex longifolius* DC.

山地や低山、河原や原野などに生える多年草。茎は直立し1～2mほどになる。葉は長卵状楕円形で幅は狭い。細井（2010）は「市販の図鑑や参考図書には葉裏脈上も無毛としているが、県内産を含む本州北部のものは葉裏脈上に短毛状突起を生ずる。果実を取りまく花被の中央部に瘤はなく全縁である。北半球に広く分布し、国内では北海道・本州、四国は高知県のみ。県内では低山地の沢沿いに分布している。葉の大きさや幅に変化があり、果穂がないとマダイオウと区別できない。県内ではところによっては希産ではないが、よく調べられていない。移植は簡単である」と記している。

(齋藤信夫)

被子植物ナデシコ目 ナデシコ科

C

和名 タチハコベ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Arenaria trinervia* L.

山地の沢沿いに生える1～2年草。花弁は萼より短く、一見花が終わったハコベのように見える。葉はやや3脈が目立ち、同属のオオヤマフスマに似ているが、オオヤマフスマの花弁は萼より長いので区別される。花期6月。

北海道・本州・四国・九州、北半球の温帯に分布する。県内では太平洋側に偏った分布を示し、南部の新井田川流域に産地が多い。通常岩陰などに生えるが、河畔林の砂質地にみられることもある。

目立たない植物であり、産地・個体数が少なく、開発・自然災害等の危険性があるので、注意を要する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)今回の調査で十和田市奥入瀬、南部町高屋敷、八戸市南郷区島守巻ノ下・南郷区不習・南郷区古里・松館蟹沢、階上町金山沢で生育が確認できた。

(須藤智道)

被子植物ナデシコ目 ナデシコ科

C

和名 アオモリミミナグサ

環境省：該当なし

学名 *Cerastium arvense* L. subsp. *strictum* Gaudin var. *mitsumorense* (Miyabe et Tatew.) S.Akiyama

細井（2010）は「山地の岩石地に生じる。花茎基部に葉束がよく発達する。葉は狭長で無毛であるが花は大きくオオバナノミミナグサと似ている。県内では生育確認地が1か所よりなく、希産である。セイヨウミミナグサの日本固有の変種で、函館の三森山からミツモリミミナグサ、渡島の太平山からヒロハミツモリミミナグサとして発表されたものと同じで区別の要がないとされた。しかし、太平山の一部で観察した株とはかなり差があるので、同一に扱うことには抵抗を感じる」と記している。

(齋藤信夫)

被子植物ナデシコ目 ナデシコ科

C

和名 ナガバツメクサ

環境省：該当なし

学名 *Stellaria longifolia* Muhl. ex Willd.

湿地に生える多年草。茎は細く、高さ20~40cm、4稜形で、稜上に粒状の細突起がある。葉は広線形で、長さ1.5~2.5cm。花弁は萼より長く、2深裂する。花期5月下旬~6月。

北海道・本州（青森）、北半球の温帯北部に分布する。県内では太平洋側の六ヶ所村市柳沼・三沢市姉沼・小川原湖および旧仏沼周辺のハンノキ - ミズバショウ群落中にみられる。

各産地とも小面積で個体数が少なく、植生遷移・水位の変化により減少傾向にあり、湿原開発等の危険性もある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で三沢市新堂湿地で生育が確認できた。
(須藤智道)

被子植物ツツジ目 サクラソウ科

C

和名 ハイハマボッサ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Samolus parviflorus* Raf.

草丈10~20cmの多年草。茎は細く斜めに立ち、葉は広楕円形で光沢があり、先端は円く、基部は細まって柄に流れ、全縁で、互生している。総状花序に10~20個の合弁白色花をまばらにつける。花は小さく径2~3mmで、1~2cmの花柄を持ち途中に1個の小苞がある。

県内分布は津軽・下北が中心であるが生育地点は少ない。平地や低山の湿生地に見られるが、個体数が少なく、増加傾向にはない。目に着きにくい小形植物なので、生育地を特定して保存指定が望まれる。

世界的分布は日本・北アメリカ。日本分布は北海道・本州。本県分布は津軽の屏風山・五所川原市原子・弘前市高照神社・下北脇野沢など。
(木村啓)

被子植物ツツジ目 ツツジ科

C

和名 オオウメガサソウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Chimaphila umbellata* (L.) W.P.C.Barton

海岸近くのやや乾いた林下に生える常緑の多年草。地下茎は長く横走する。茎は高さ10~15cm。葉は倒披針形、上半に粗い鋸歯がある。花は茎の先に散房状につき、淡紅色。花期7月。

北海道・本州（青森・岩手・茨城）、ヨーロッパ・北アメリカの亜寒帯に分布する。県内では日本海側・むつ湾岸にもみられるが、太平洋側の東通村から三沢市までの海岸クロマツ林下にしばしば群生する。まれに内陸にみられることもある。

クロマツ砂防林の普及に伴って分布を広げてきたが、最近ではクロマツの成長に従って林床環境が変わり、陰湿化・競合などで減少傾向にある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査でつがる市屏風山・東通村尻屋崎・猿ヶ森・横浜町吹越で生育が確認できた。
(須藤智道)

被子植物リンドウ目 キョウチクトウ科

C

和名 フナバラソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Vincetoxicum atratum* (Bunge) C.Morren et Decne.

草原に生える多年草。全体に密に軟毛がある。茎は直立し、高さ30~60cm。葉は対生し、楕円形から卵形、長さ6~10cm。上部の葉腋に濃紫褐色の花をやや密につける。花期6月。袋果は広披針形、長さ7~8cm、和名の船腹草はこの果実の形からきているという。北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国に分布する。県内では全域の海岸草地や林縁に点在する。広く分布するが、個体数の少ない類に入る。山地草原の低木群落への移行・海岸草原のレジャー用地化などで自生地が失われている。
(齋藤信夫)

被子植物リンドウ目 キョウチクトウ科

C

和名 タチガシワ

環境省：該当なし

学名 *Vincetoxicum magnificum* (Nakai) Kitag.

山地の林下に生える多年草。茎は高さ30～60cm。葉は茎の上部に集まってつき、卵円形、長さ10～15cm。花は茎頂部に集まってやや密につき、緑褐色。花期5～6月。袋果は披針形で、長さ7～15cm。

本州の主として太平洋側に分布する。県内では太平洋側南部の馬淵川以東にややまれに産し、北限である。自然度の高い落葉広葉樹林の斜面などに生育し、個体数は少ない。

森林の伐採により生育地が失われている。目立たない植物であるが分布の限られた貴重種である。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用) 今回の調査で八戸市白浜・松館蟹沢・階上町階上岳で生育が確認できた。(須藤智道)

被子植物ナス目 ナス科

C

和名 オオマルバノホロシ

環境省：該当なし

学名 *Solanum megacarpum* Koidz.

湿原など湿気が多い場所に生える多年草。茎はつる性。葉は卵形から狭卵形、葉身は長さ4～9cm。集散花序。花は径1～1.5cm、花冠は紫色で、5深裂し裂片は反り返る。花期7～8月。液果は楕円形で赤熟。

北海道・本州(中部以北)、千島・サハリンに分布する。県内では全域にややまれに産し、湖沼周辺・河畔の低湿地や湿原に見られるが、湿った林下にも生える。

各産地とも個体数は少ない。湿原開発等により生育地が狭められている。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用) 今回の調査で鶴田町富士見湖・東通村加藤沢沼・六ヶ所村市柳沼・三沢市仏沼・姉沼で生育が確認できた。(須藤智道)

被子植物シソ目 オオバコ科

C

和名 ビロードトラノオ

環境省：該当なし

学名 *Veronica ovata* Nakai subsp. *kiusiana* (Furumi) Albach var. *villosa* (Furumi) Albach

山地の日当たりの岩場に生える多年草。茎は高さ50～80cm。葉は3角状披針形で、鋭尖頭・鋭鋸歯があり、両面に毛を密生する。茎頂に長い花序を出し、青紫色の花を蜜につける。花期7月。類似種に毛の少ないエゾリトラノオ・ヤマルリトラノオ・無毛のエチゴトラノオがある。

本州(中部以北)に分布する。県内では八戸市南郷の岩場に小群でみられる。

産地・個体数が少ない。立ち入りや開発は考えられないが、植生の変化・自然災害等の危険性がある。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用) 今回の調査で八戸市南郷区島守で生育が確認できた。(須藤智道)

被子植物シソ目 シソ科

C

和名 テイネニガクサ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Teucrium teinense* Kudo

ツルニガクサに似る。しかし、ツルニガクサの萼には密に腺毛があるが、本種ではまばらに生えるのみ。山地の林下にまれに分布する。北海道と東北地方に分布し、県内では深山に希産するが、ツルニガクサより自然度が高い環境に見られる(細井, 2010)。(齋藤信夫)

被子植物シソ目 シソ科

C

和名 ハマゴウ

環境省：該当なし

学名 *Vitex rotundifolia* L.f.

海岸砂地に生える落葉低木で、茎は砂上や砂中を長く這い根を下ろす。枝は四角柱で直立や斜上して広卵形の葉を対生。葉表は緑色、葉裏は軟毛の白色。夏に枝先に円錐花序をだし唇形青紫色花を多数つける。

生育地である海岸砂地が護岸設置などで消失したり狭まったりして個体数が激減している。海岸砂地の計画的な環境保全が必要である。

世界的分布は日本・朝鮮・中国・東南アジア・ポリネシア・オーストラリア。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は深浦町風合瀬海岸・平内町夏泊半島大島・中泊町青岩海岸。

本県が北限の植物。江戸時代の紀行家菅江真澄の紀行文に登場する重要な歴史文化植物でもある。
(木村啓)

被子植物シソ目 ハマウツボ科

C

和名 ハマウツボ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Orobanche coerulescens* Stephan ex Willd.

海岸や川原の砂地に生育する一年草。ヨモギ属、特にカワラヨモギの根に寄生する。茎は黄褐色で太く、直立して高さ10~25cm、まばらに白軟毛が生える。茎の上部に淡紫色の花を密につける。花期は6月。

北海道~沖縄、中国・朝鮮・シベリア・ヨーロッパ東部に分布する。県内では全域の海岸草原に点在するが個体数は少ない。また近年、海岸草原が減少しているので自生地が失われつつある。

(須藤智道)

被子植物シソ目 シソ科

C

和名 イヌタヌキモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Utricularia australis* R.Br.

貧栄養や腐植栄養の湖沼やため池、側溝などの流れのゆるい小川や低山地の沼に広く分布している、多年生の浮遊植物。細井(2010)は「三木茂が本種を新種 *U.tenuicaulis* Mikiとして発表したときに、Aomori (K.Kita Aug, 1934) の標本を引用している。これにより国内では早くから本種が青森県に分布することが知られていた」と記している。分布は北海道・本州・四国・九州。農薬や家庭排水などによる水質汚濁・低湿地の開発で生育地が激減している。石戸谷(2017, 私信)は弘前市・つがる市・青森市で確認している。Shutohらはつがる市の沼で確認している(Shutoh *et al.*, 2019)。また、須藤(2017, 私信)はむつ市で確認している。
(齋藤信夫)

被子植物キク目 キク科

C

和名 ホロマンノコギリソウ(キタノコギリソウ)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Achillea alpina* L. subsp. *japonica* (Heim.) Kitam.

海岸の草原などに生える多年草。茎は高さ30~60cm。葉は羽状に中裂から深裂する。花は茎頂に密な散房状につき、径1~1.5cm、舌状花は6~8個、白色から淡紅色。花期7~9月。葉の切れ込みや花の大きさ・色など変異がある。よく似たノコギリソウと紛らわしい。

北海道・本州(中部以北)、南千島・サハリンに分布する。県内では全域の海岸および内陸の草地に産するが、ノコギリソウ類は変異が多く分布状況は明らかでない。

草地の減少や外来種との競合で減少は進行している。(青森県レッドデータブック2010年改訂版(根市, 2010)を引用)今回の調査で深浦町深浦海岸・六ヶ所村尾駈沼・鷹架沼・三沢市仏沼・八戸市鮫町小舟渡平で生育が確認できた。
(須藤智道)

被子植物キク目 キク科

C

和名 オオバヨモギ

環境省：絶滅危惧 I B類

学名 *Artemisia koidzumii* Nakai var. *megaphylla* Kitam.

細井（2010）は「ヤマヨモギに似て葉は広く、若い時には葉の表面にクモ毛があって白く見える。頭花は綿毛が多く白くてヤマヨモギより少し大きい。大間町の弁天島が基準産地である。県内では弁天島の他に、大間港に希産し、尻屋にも分布する。母種は北海道産のヒロハウラジロヨモギで、その変種に当たる。北海道にもオオバヨモギに相当するものを立待岬と戸井漁港で確認した。いずれも海岸である」と記している。
(齋藤信夫)

被子植物キク目 キク科

C

和名 ミチノクヤマタバコ

環境省：該当なし

学名 *Ligularia fauriei* (Franch.) Koidz.

草地に生える多年草。全体粉白色を帯びる。茎は高さ60～150cm。根生葉の葉身は卵状長楕円形。長さ10～25cm。葉柄は翼があり、長さ15～17cm。茎頂に長い総状花序を出す。総苞は筒状で、総苞片は離生。舌状花は2、3個。花期6月。

本州（東北地方・関東北部）に分布する。県内では太平洋側南部の八戸市に産し、北限である。分布の限られた種で、かつて八戸市から階上町までの海岸部に数か所の生育地があったが、現状は2か所ほどしか残っていない。

生育地周辺のおオイタドリや木本類および外来種の進出による競合等の危険性がある。

2009年にクロマツ林間伐により再現した所もあり保存対策の指針になる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で八戸市鮫町小舟渡平・中須賀で生育が確認できた。
(須藤智道)

被子植物キク目 キク科

C

和名 オオニガナ

環境省：該当なし

学名 *Nabalus tanakae* Franch. et Sav. ex Y.Tanaka et Ono

湿地に生える多年草。茎は高さ80～120cm。茎葉は三角状矢羽形に中裂から深裂し、葉柄は長くて翼がある。花は黄白色で、径4cm内外。花期9～10月。

本州（近畿以北）に分布する。日本固有種。県内では全域に産し、海岸から山間部までの湿地にみられ、北限である。

かつては湿地にやや普通にみられたが、開田ブームで減少し、戦後は牧野・採草地の放置で湿地はハンノキ林に遷移し、開発が加わって生育地が次第に失われてきた。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査でむつ市田名部赤川、東通村尻屋崎・荒沼、おいらせ町イチョウ公園で生育が確認できた。
(須藤智道)

被子植物セリ目 セリ科

C

和名 ハクサンサイコ

環境省：該当なし

学名 *Bupleurum nipponicum* Koso-Pol.

草丈50cmほどの多年草。葉は互生し長楕円形で茎を抱く。葉表面は淡緑色で裏面は粉白色、縦に走った葉脈が目立つ。茎の頂に複散形花序をつけ、小さい淡黄色の5弁花をつける。県産で同属類似種のホタルサイコ・オオホタルサイコと似るが、小総苞片が大きく5個である。

県内では限られた地域だけに生育し、個体の増加は見られず、むしろ減少傾向にある。生育地全体の保存が必要である。白神山地域で深浦町の追良瀬川上流にある自生地点を継続観察しているが、個体数は極めて少ない。加えて、自生場所の崩落もあり、姿を見せない年もあった。

世界分布は日本だけ。日本分布は本州北部と中部。本県分布は白神山地・津軽半島。日本固有種。

(木村啓)

被子植物オモダカ目 トチカガミ科 **D**

和名 マルミスブタ

学名 *Blyxa aubertii* Rich.

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

水田やため池、水路などに生育する一年生の沈水植物。葉は根生し、線形で、長さ10~30cm、幅3~9mm。よく似ているスブタとの区別点は本種の種子には尾状突起が発達しないことである。細井（2010）は「東北地方では希産で本県が北限である。県内では村井（1939）の「スブタ畦溝水田（西郡）」の記録と鈴木（1978）の線画があり、角野（1994）には青森が図示されており、これはフォーリーのAomori 1904.10(KYO)の標本によった。角田充によれば青森市大谷、つがる市牛潟沼周辺にも産す由である。現存地の再確認をし、見つかった水域での水環境保全に充分注意すべきである」と記している。（齋藤信夫）

被子植物オモダカ目 トチカガミ科 **D**

和名 オオトリゲモ

学名 *Najas oguraensis* Miki

環境省：該当なし

湖沼・ため池、まれに水路などに生育する沈水植物で、本州・四国・九州に分布する日本固有種である。細井（2010）は「トリゲモとオオトリゲモの区別は難しく、現在は、葯室の数で区別している。オオトリゲモ4室、トリゲモ1室だが、時には不完全なので、たくさん標本を作っておくことが望まれる」と記している。石戸谷（2016, 私信）はつがる市のタテコ沼、作沼、ガシャ沼で確認している。（齋藤信夫）

被子植物オモダカ目 アマモ科 **D**

和名 タチアマモ

学名 *Zostera caulescens* Miki

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

砂質の浅い海底に生育する多年生の海草。アマモ科の中では最も長くなり、7mという報告もある。葉幅は1~1.5cmでアマモ（3~6mm）よりも広い。国内では北海道・本州（日本海沿岸、陸奥湾~相模湾）、国外では千島列島、朝鮮半島に分布する。（齋藤信夫）

被子植物オモダカ目 トチカガミ科 **D**

和名 ヒロハトリゲモ

学名 *Najas chinensis* N.Z.Wang

環境省：該当なし

ため池や水田などに生育する一年生の沈水植物。葉は長さ1.5~3cm、幅0.3~0.6mm、ホッスモやイトトリゲモに比べて全体が大きい。種子は長楕円形で長さ2.5~3mm、表面に四~六角形の大きな網目模様がある。本州・四国・九州・沖縄、アジア東部に分布する。細井（2010）は「県内では八戸市の水田で採集されたもの以外の記録はない」と記している。（齋藤信夫）

被子植物オモダカ目 アマモ科 **D**

和名 スゲアマモ

学名 *Zostera caespitosa* Miki

環境省：準絶滅危惧

砂泥の海底に生える沈水植物。地下茎があるがアマモのように横に広がらず株となる。全国的に浅海の砂泥海底が少なくなって生育場が減っている。分布は北海道・本州の海岸。細井（2010）は「県内では各所にあるようだが、海中のことであり直接確認しにくい。佐井村・野辺地町・青森市その他の標本が記録されている」と記している。（齋藤信夫）

被子植物オモダカ目 カワツルモ科 **D**

和名 ネジリカワツルモ

学名 *Ruppia cirrhosa* (Petagna) Grande

環境省：準絶滅危惧

カワツルモに似るが、受粉後果梗がいちじるしく伸長し、数回らせん状に湾曲する。水草である。葉端が鈍頭~切形。県内では小川原湖の採集記録がある。詳細な分布調査が必要である。（齋藤信夫）

被子植物ユリ目 シュロソウ科 D

和名 シラオイエンレイソウ
学名 *Trillium × hagai* Miyabe et Tatew.
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

母親はミヤマエンレイソウで父親はオオバナエンレイソウの自然雑種。このことが、花の形状から伺われる。

一見オオバナエンレイソウを思わせるが、雌蕊と雄蕊を精査すると、ミヤマエンレイソウとオオバナエンレイソウの中間型である。

県内分布報告は僅かに七戸町と南部町だけである。更なる調査を要する。

確認した個体数は少なく、分類形態や生態を調査するためにも保全対策が必要である。

(木村啓)

被子植物キジカクシ目 ラン科 D

和名 オオミズトンボ
学名 *Habenaria linearifolia* Maxim.
環境省：絶滅危惧ⅠB類

陽光地の湿原に生育する多年草。花は唇弁以外が白色。花期は8～9月。唇弁は淡緑色十字形で、側裂片は水平または下向き（類似種ミズトンボの側裂片は上向きに反曲）。細井（2010）は「1933年（昭和8年）東京大学・原寛が八甲田より発表した。その後の記録はない。なお、変種のヒメミズトンボが東通村の湿原に知られている」と記している。北海道・本州（北部および関東北部）、朝鮮・中国・ウスリー・アムールに分布する。
 (齋藤信夫)

被子植物キジカクシ目 ラン科 D

和名 シテンクモキリ
学名 *Liparis purpureovittata* Tsutsumi, Yukawa et M.Kato
環境省：該当なし

青森県内では成田・山岸(2018)がはじめて報告した。報告によると生育場所は湿地帯と低木帯との境界付近である。外部形態はクモキリソウに似ているが、唇弁の基部中央に赤紫色の点がある。種小名はそのことを表している。本種の唇弁はクモキリソウのように強くは巻き込まず、萼片・側花弁・花柄子房などが赤紫色を帯びるというが、稀に緑一色の個体もあることから、色だけで同定はできない。北海道～本州、四国から報告される。分子情報と分類学の統合研究から明らかになった例として紹介される。(齋藤信夫)

被子植物ソクサ目 ミズアオイ科 D

和名 ミズアオイ
学名 *Monochoria korsakowii* Regel et Maack
環境省：準絶滅危惧

草丈30cmほどの水生1年草。花は青紫色で美しく、葉は卵状心臟形で整っている。

県内各地の水田や水路や池沼に普通に見られ、水田雑草として大量に除去されている。県内各地に普通に分布し生育量も多く、絶滅の心配は感じられないので、ランクをDに変更して、更に見守りたい。

県内の水田農家では、昔から水田雑草として扱い、手作業で除去しているが、根絶することは無いようだ。
 (木村啓)

被子植物キンポウゲ目 キンポウゲ科 D

和名 アカミノルイヨウショウマ
学名 *Actaea erythrocarpa* (Turcz. ex Ledeb.) Fisch. ex Freyn
環境省：該当なし

ルイヨウショウマの果実は黒いが、本種は赤い。分布は北海道と本州北部、樺太・北アジア・欧州。県内では下北と八甲田の記録がある。細井（2010）は「従来岩手・山形県からの記録は間違いらしい。福島県西白河郡旭岳のみは確認されている。下北半島からは確認報告がない」と記している。花期は5～6月。(齋藤信夫)

被子植物ユキノシタ目 スグリ科 D

和名 ザリコミ
学名 *Ribes maximowiczianum* Kom.
環境省：該当なし

スグリ科の落葉低木で、ブナ林の林床に生育している。都道府県別のRDBでは18都県において指定されている。青森県内ではむつ市からはじめて報告された（むつ市教育委員会, 2016）。立地は1m前後の巨岩が積み重なる岩礫地で、重なる巨岩間には大きな空隙が確認できる。本種はそのような巨岩上に生える蘚苔類に混じって這うように生育する。土壌はほとんどみられない。幹は途中で途切れたりしているが、蘚苔類に接している地這部分は発根が見られる。樹皮は非常にはがれやすい。
 (齋藤信夫)

被子植物フトモモ目 ミソハギ科 **D**

和名 ミズキカシグサ

学名 *Rotala rosea* (Poir.) C.D.K.Cook

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

水田地帯やその付近の湿地に生え、茎は直立し、葉は狭長である。茎の断面は円形で各葉腋から枝を分ける。よく似たキカシグサは本種よりも小型で、茎が斜上するか這う。本州・四国・九州、朝鮮に分布する。細井（2010）は「県内では十分調べられていない。青森市に生えていたが、近年は見当たらなくなった」と記している。（齋藤信夫）

被子植物キク目 キク科 **D**

和名 タカサブロウ

学名 *Eclipta thermalis* Bunge.

環境省：該当なし

水田や湿地に生える一年草。茎や葉に剛毛があつてざらつく。高さは20～70cm。舌状花と頭状花があり、花色は白。北海道を除く国内に普通に分布するとされているが、県内では極めて少ない。細井（2010）は「1955年頃に日本海岸の深浦町の防波堤裏の水田湿地で一度だけ採集した。その後は県内で採集された情報もなく、きわめてまれになったものと思われる」と記している。（齋藤信夫）

被子植物ナス目 ナス科 **D**

和名 ヤマホロシ

学名 *Solanum japonense* Nakai

環境省：該当なし

林縁などに生えるやや無毛の蔓状の多年草。葉は3角状狭卵形。下部のものは3～5裂する。花は直径1cmほどで淡紫色。花期は7月～10月。細井（2010）は「県内では、採集の記録が少ない。生態など不明の点が多い」と記している。

（齋藤信夫）

被子植物キク目 キク科 **D**

和名 コオニタビラコ

学名 *Lapsanastrum apogonoides* (Maxim.)

J.H.Pak et K.Bremer

環境省：該当なし

水田などに生える2年草。春の七草のホトケノザは本種である。本州・四国・九州、朝鮮（済州島）・中国に分布する。本県が北限である。耕起前の水田などで開花するのが見られたが、1970年代から急激に減少し消息不明となっている。米の栽培様式の変化や農薬の使用等が原因と考えられる。舌状花は6～9個。花期4～5月。よく似たヤブタビラコは、花が小さく、舌状花が18～20個と多い。コオニタビラコに代わり進出している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で五所川原市で生育が確認できた。（須藤智道）

③引用文献

- 青森県 2003. 青森県史自然編生物. 804pp.
- 海老原淳 2016. 日本産シダ植物標準図鑑Ⅰ. 学研, 東京. 475pp.
- 海老原淳 2017. 日本産シダ植物標準図鑑Ⅱ. 学研, 東京. 507pp.
- 藤原陸夫・阿部裕紀子 2017. 北東北維管束植物分布図 秋田植生研究会, 秋田. 804pp.
- 八戸市 2005. 新編八戸市史別編自然編. 535pp.
- 細井幸兵衛 2010. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. 青森県. pp.20-23, pp.25-28, p30, pp.33-35, pp37-38, pp.40-42, pp44-49, pp.52-53, pp.55-58, pp61-64, p.67, pp.69-70, pp.75-76, p79, p82, pp.87-89, p.91-93, pp95-97, p.101, pp.103-105, pp.107-108, pp.111-112, pp115-118.
- 細井幸兵衛 2018. 新青森県植物目録. 弘前大学白神自然環境研究所. 弘前. XXI + 115 + 40pp.
- 岩槻邦男 1992. 日本野生植物シダ. 平凡社, 東京. 311pp.
- 角野康郎 1994. 日本水草図鑑. 文一総合出版, 東京. 179pp.
- 柿崎敬一・高谷泰三郎・齋藤信夫・太田正文・神 真波 2005. 小川原湖周辺の植物(5). 青森県立郷土館調査研究年報, 29 : 5-10.
- 葛西直子 2008. 青森市でマルバノサワトウガラシの群落に遭遇. 月刊津軽植物, 55(1) : 6-7.
- 葛西直子 2017. 行合崎でアナマスミレを確認. 月刊津軽植物, 54(9) : 6-7.
- 木村 啓 1965. ヤマアイの大群落発見. 月刊津軽植物, 2(5) : 3-4.
- 木村 啓 1965. 十二湖でクマガイソウの群を発見. 月刊津軽植物, 2(6) : 4.
- 木村 啓 1966. 十二湖のクマガイソウその後. 月刊津軽植物, 3(8) : 5-6.
- 木村 啓 1966. スズメウリ採集の記. 月刊津軽植物, 3(10) : 4-6.
- 木村 啓 1968. 北限ヤマアイの分布について. 月刊津軽植物, 5(5) : 1-6.
- 木村 啓 1968. 白神山系でオオサクラソウ採集される. 月刊津軽植物, 5(7) : 6.
- 木村 啓 1968. 北限キンランの第三産地を発見. 月刊津軽植物, 5(7) : 9.
- 木村 啓 1968. 写生図のページ (16) キンラン. 月刊津軽植物, 5(7) : 10.
- 木村 啓 1970. 十二湖のクマガイソウ健在. 月刊津軽植物, 7(7) : 1-3.
- 木村 啓 1972. 津軽種里でフジカンゾウの群落発見. 月刊津軽植物, 9(10) : 1-3.
- 木村 啓 1974. サカネラン鱒ヶ沢町で発見さる. 月刊津軽植物, 11(9) : 2.
- 木村 啓 1974. 八甲田山で紅花のヒナザクラを発見. 月刊津軽植物, 11(9) : 1.
- 木村 啓 1974. 津軽半島小泊地区内のオサバグサを見る. 月刊津軽植物, 11(9) : 3.
- 木村 啓 1975. 東京大学植物標本庫のホロムイイチゴ. 月刊津軽植物, 12(5) : 5-7.
- 木村 啓 1975. 青森県でアズマツメクサ発見. 月刊津軽植物, 12(9) : 2-3.
- 木村 啓 1976. 東京大学にあるアズマツメクサの標本. 月刊津軽植物, 13(5) : 4.
- 木村 啓 1976. イトハコベ青森県初発見の記. 月刊津軽植物, 13(8) : 2.
- 木村 啓 1976. 国立科学博物館標本庫のアズマツメクサ. 月刊津軽植物, 13(11) : 2.
- 木村 啓 1977. 国立科学博物館のイトハコベ標本. 月刊津軽植物, 14(4) : 3-4.
- 木村 啓 1977. イトハコベを屏風山の他湿原でも発見. 月刊津軽植物, 14(7) : 6.
- 木村 啓 1977. エゾノウワミズザクラ本州初発見の記. 月刊津軽植物, 14(7) : 7.
- 木村 啓 1978. 北海道大学のエゾノウワミズザクラ標本. 月刊津軽植物, 15(8) : 2-4.
- 木村 啓 1982. 岩木山特産のミチノクコザクラが秋田県田代岳に群生するという. 月刊津軽植物, 19(1) : 2-4.
- 木村 啓 2000. 津軽半島のエゾイヌナズナ絶滅危機. 月刊津軽植物, 37(6) : 1.
- 木村 啓 2000. アギナシが見つかりました. 月刊津軽植物, 37(9) : 2.
- 木村 啓 2001. 白神岳山頂で目にしたのはユキワリソウかユキワリコザクラか. 月刊津軽植物, 38(1) : 8.
- 木村 啓 2001. イイギリを津軽半島で確認. 月刊津軽植物, 38(10) : 2-8.
- 木村 啓 2002. 木造町平滝沼でアリアケスミレ発見. 月刊津軽植物, 39(1) : 1-2.
- 木村 啓 2002. ベニシユスラン東北初発見の記録. 月刊津軽植物, 39(2) : 1-3.
- 木村 啓 2002. 青森県内のエゾノウワミズザクラの生育地点. 月刊津軽植物, 39(6) : 1-3.

- 木村 啓 2002. 森田村でハンゲショウを確認. 月刊津軽植物, 39(8): 2.
- 木村 啓 2003. 森田村でハイハマボス群落発見. 月刊津軽植物, 40(10): 3-4.
- 木村 啓 2004. 津軽半島のチシマフウロ健在でした. 月刊津軽植物, 41(8): 3.
- 木村 啓 2004. 津軽半島竜飛崎にカノコソウ群落. 月刊津軽植物, 41(9): 3-4.
- 木村 啓 2004. 眺望山でハイハマボス群落確認. 月刊津軽植物, 41(11): 7.
- 木村 啓 2005. エゾノウワミズザクラの雪中模索. 月刊津軽植物, 42(3): 7-8.
- 木村 啓 2007. アズマツメクサ33年振りに再発見. 月刊津軽植物, 44(9): 7-8.
- 木村 啓 2008. ヒヨドリジョウゴの果実観察. 月刊津軽植物, 45(2): 1-2.
- 木村 啓 2008. アリアケスミレの大群生を発見. 月刊津軽植物, 45(8): 1-2.
- 木村 啓 2008. 新小戸六ダム南面にアリアケスミレの大群生. 月刊津軽植物, 45(11): 6-8.
- 木村 啓 2010. クロミノコジマエンレイソウ果実の種子を数えた. 月刊津軽植物, 47(8): 6.
- 木村 啓 2011. 津軽屏風山で本州初のハゴロモエゾニワトコ発見. 月刊津軽植物, 48(11): 1-5.
- 木村 啓 2012. 深浦町でクロミノコジマエンレイソウ発見. 月刊津軽植物, 49(6): 4-5.
- 木村 啓 2012. 梵珠山系原子山でハイハマボスの開花を確認. 月刊津軽植物, 49(9): 8.
- 木村 啓 2013. ハゴロモエゾニワトコが刈られずに残った. 月刊津軽植物, 50(11): 1-2.
- 木村 啓 2015. 名久井岳でシラオイエンレイソウ発見. 月刊津軽植物, 52(7): 1-3.
- 木村 啓 2015. アオバスゲ東北地方初発見. 月刊津軽植物, 52(8): 1-3.
- 木村 啓 2016. コジマエンレイソウの環境激変. 月刊津軽植物, 53(7): 1.
- 木村 啓 2016. 五所川原市でムラサキミミカキグサ確認. 月刊津軽植物, 53(11): 1-2.
- 木村 啓 2017. 青森県産スミレ属81種. 月刊津軽植物, 54(4): 2-4.
- 木村 啓 2018. 吉野田湧水池にアリアケスミレ多数. 月刊津軽植物, 55(1): 2.
- 木村 啓 2018. 津軽西海岸のオサバグサ. 月刊津軽植物, 55(7): 1-2.
- 小林範士 1975. オニシオガマ岳の湿原で発見. 月刊津軽植物, 12(1): 7.
- 黒沢高秀 1994. タカトウダイとシナノタイゲキの種分化. 植物研究雑誌, 69(1): 1-13.
- 葛谷 孝 1967. ミチノクコザクラの歩んだみち(1). 月刊津軽植物, 4(5): 6-7.
- 葛谷 孝 1967. ミチノクコザクラの歩んだみち(2). 月刊津軽植物, 4(6): 1.
- 葛谷 孝 1967. ミチノクコザクラの歩んだみち(3). 月刊津軽植物, 4(7): 2-3.
- 葛谷 孝 1967. ミチノクコザクラの歩んだみち(4). 月刊津軽植物, 4(8): 4-6.
- 正木智美(編) 2018. 日本産スゲ属植物分布図集. すげの会, 岡山. 766pp.
- むつ市教育委員会 2016. 釜臥山・障子山の自然調査報告(植物・哺乳動物) 観察報告. むつ市文化財調査報告, 44: 94-98.
- 長尾キヨ 2004. モエギオクエゾサイシンとサカネラン確認. 月刊津軽植物, 41(8): 3.
- 奈良岡隆樹 2002. 板柳町でエゾノウワミズザクラ発見. 月刊津軽植物, 39(7): 1-2.
- 成田一哉・山岸洋貴 2018. 青森県におけるシテクモキリの新産地. 青森自然誌研究, 23: 61-62.
- 沼田俊三 1989. 青森県のラン. 著者自刊, 青森. 207pp.
- 岡 武利 2019. ハナワラビ色いろ(3). 日本シダの会会報, 4(31): 44-49.
- 佐藤石夫 2001. 岩崎村黒崎地区で幻の稀産キジノオシダと再会. 月刊津軽植物, 38(1): 2-3.
- 佐藤石夫 2001. 深浦町吾妻川のオニシオガマについて. 月刊津軽植物, 38(9): 2-4.
- 佐藤石夫 2004. 吾妻川のタカネゲンバイの生育環境など. 月刊津軽植物, 41(4): 4-5.
- 佐藤石夫 2018. オサバグサの青森県新産地. 月刊津軽植物, 55(1): 2.
- 澤田 満 2005. 下北半島の屏風立岩と桑畑山にユキワリソウを確認. 月刊津軽植物, 42(7): 3-4.
- Shutoh, K., T. Yamanouchi, S. Kato, H. Yamagishi, Y. Ueno, S. Hiramatsu, J. Nishihiro & T. Shiga 2019. The aquatic macrophyte flora of a small pond revealing high species richness in the Aomori Prefecture, Japan. Journal of Asia - Pacific Biodiversity, 12: 448-458.
- 鈴木 恒 1977. 木造町にキンラン. 月刊津軽植物, 14(8): 2.
- 高田 順 2018. 青森県産ホシクサ属植物－フロラと分類の課題－. 東北植物研究会2018年度青森県大会要旨. 1p.
- 米倉浩司・梶田 忠 2003. 「BG Plants 和名－学名インデックス」(YList), <http://ylist.info> (2019年1月12日確認).